ウトグチＣ遺跡

福岡県春日市白水ヶ丘所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第54集

序

春日市は、アジア最大の都市福岡市の南側に接する住宅都市となっています。市域の面積は極めて狭く、15㎢程ですが、市制施行以来30数年のうちに急速に都市化が進み、これまで育まれた豊かな自然と人の営みが大きく変化してきました。悠久の歴史以来の数々の遺産を物語るひとつである埋蔵文化財も、開発にともなう発掘調査によってその多くが消滅してきました。

多くの貴重な文化遺産としての遺跡が消えていくのは残念でなりませんが、発掘調査の成果を報告し、春日という地域の歴史や文化の足跡を多くの市民の皆さんに知ってもらうことは、その後の文化財を大切に守っていくためには、文化財行政としての大事な努めであります。

本書は春日市が昭和63年から平成元年にかけて発掘調査を実施した、ウトグチＣ遺跡の発掘調査報告書です。昭和61年度から平成３年度にかけて春日市南西部で行われた上白水南土地区画整理事業にともなう発掘調査では、縄文時代から江戸時代にいたる数多くの遺跡が明らかとなりました。ウトグチＣ遺跡の調査では、古墳時代前期および鎌倉時代から室町時代にかけての墓地が確認されました。

本書が埋蔵文化財の保護に対する理解と地域の遺跡を通しての歴史文化の学習を深める資料として広く活用され、市民の皆さんの郷土春日に対する理解や愛着につながることとなれば幸いです。

終わりに、本報告書の発掘調査並びに報告書作成に際しましてご協力いただきました多くの方々に感謝の意を表します。

平成20年３月31日

春日市教育委員会

教育長　山　本　直　俊

例　　言

１．本書は、昭和63年度及び平成元年度に春日市教育委員会が国・県補助事業によって発掘調査を行ったウトグチＣ遺跡の報告書である。

２．遺構の実測は、丸山康晴、平田定幸、中村昇平、吉田佳広が行い、製図は池田由紀、田中由紀、須崎葉津子が行った。

３．遺物の実測は、中村、早瀬知美、岸本真美、吉富千春、末田敬子、境靖紀、坂田邦彦（現鳥取市教育委員会）が行ない、製図は吉富、末田が行った。

４．掲載写真のうち、遺構については（有）空中写真企画、中村、吉田が撮影し、遺物については坂上嘉規（ヌーベルギャラリー）、岡紀久夫（フォトハウスオカ）が撮影した。

５．本書使用の2.5万分の１地形図は、国土交通省国土地理院発行の『福岡南部』及び『不入道』である。

６．本書の遺構実測図に用いた方位は、磁北である。

７．本書の執筆及び編集は、中村が行った。

８．本書で掲載した図面・写真・出土遺物は、春日市奴国の丘歴史資料館で保管中である。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに ……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の体制……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境……4

Ⅲ　発掘調査の概要 ……11

Ⅳ　遺　構 ……12
　1．古墳時代の遺構 ……12
　2．歴史時代の遺構 ……33
　3．その他の遺構 ……53

Ⅴ　遺　物 ……58
　1．古墳時代の遺物 ……58
　2．歴史時代の遺物 ……64
　3．その他の遺物 ……69

Ⅵ　まとめ ……71

図　版　目　次

図版１　１　古墳群全景
　　２　古墳群全景（南から）
図版２　１　１号墳全景
　　２　１号墳主体部
　　３　１号墳主体部（東から）
図版３　１　１号墳主体部土層断面
　　２　１号墳主体部鉄剣
　　３　１号墳周溝内土器
図版４　１　２号墳全景
　　２　２号墳木棺墓
　　３　２号墳主体部
図版５　１　３号墳第１主体部
　　２　３号墳第２主体部

３　３号墳第２主体部
図版６　１　４号墳全景
２　４号墳主体部
３　５号墳
図版７　１　１号壺棺墓
２　１号土壙
３　２号壺棺墓
４　２号土壙墓（西から）
図版８　１　Ａ群１号土壙墓（北西から）
２　Ａ－８・９号墓
３　Ａ－９号墓火葬骨埋納状況
図版９　１　Ａ－10号墓
２　中世墓地Ｂ・Ｃ群集石遺構
３　中世墓地Ｂ群埋納壙
４　Ｂ－10号墓埋納壙
図版10　１　Ｂ－９号墓鉄製品出土状況
２　中世墓地Ｃ群集石遺構
３　中世墓地Ｃ群埋納壙
図版11　１　中世墓地Ｄ群（１次調査）
２　中世墓地Ｄ群（１次調査）
３　中世墓地Ｄ群（２次調査）
４　Ｄ・ａ－１号墓
図版12　１　Ｄ・ｉ－１号墓
２　中世墓地Ｄ群（Ｄ・ｆ～ｈ）
３　Ｄ・ｈ－４号墓
４　Ｄ・ｈ－４号墓（完掘）
図版13　１　Ｄ・ｊ－４号墓鉄製品出土状況
２　Ｅ－１号墓
３　Ｄ・ｄ－１・２号墓
図版14　古墳出土土器
図版15　壺棺、古墳出土鉄製品・玉類
図版16　中世墓出土陶磁器・土器①
図版17　中世墓出土土器②
図版18　中世墓出土土器③
図版19　中世墓出土土器④、出土土器
図版20　中世墓出土石塔類・鉄製品・古銭、出土石器

挿　図　目　次

第１図　上白水南土地区画整理事業範囲及び調査遺跡位置図（1/5,000）……2
第２図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）……5
第３図　旧地形復元図による調査位置図（1/2,500）……6
第４図　地形測量図（1/200）……7•8
第５図　調査区位置図（1/200）……9•10
第６図　遺構配置図①（1/200）……13•14
第７図　１号墳主体部実測図（1/30）……15•16
第８図　１号墳土層実測図（1/60）……17
第９図　１号墳周溝内土器出土状況実測図（1/20）……18
第10図　２号墳主体部実測図（1/30）……19•20
第11図　２号墳土層実測図（1/30）……21
第12図　３号墳第１主体部実測図（1/30）……23•24
第13図　３号墳第２主体部実測図（1/30）……25
第14図　３号墳周溝土層実測図（1/60）……26
第15図　４号墳主体部実測図（1/30）……27•28
第16図　４号墳土層実測図（1/60）……29
第17図　４号墳周溝内土器出土状況実測図①（1/20）……30
第18図　４号墳周溝内土器出土状況実測図②（1/20）……31
第19図　４・５号墳土層実測図（1/60）……31
第20図　５号墳土層実測図（1/60）……32
第21図　１・２号壺棺墓実測図（1/20）……32
第22図　１号土壙墓実測図（1/30）……33
第23図　Ａ－１～９号墓実測図（1/30）……34
第24図　Ａ－10号墓実測図（1/30）……35
第25図　Ｂ－１号墓実測図（1/30）……36
第26図　Ｂ－２～19号火葬墓実測図（1/30）……39•40
第27図　Ｃ－１号墓実測図（1/30）……41
第28図　Ｃ－２号墓実測図（1/30）……41
第29図　Ｃ－３～14号墓実測図（1/30）……43
第30図　中世墓地Ｄ群遺構配置図①（1/100）……45•46
第31図　中世墓地Ｄ群遺構配置図②（1/100）……47•48
第32図　Ｄ・ａ－１号墓実測図（1/30）……49
第33図　Ｄ・ｂ－１号墓実測図（1/30）……49
第34図　Ｄ・ｃ－１～５号火葬墓実測図（1/30）……51•52
第35図　Ｄ・ｄ－１・２号墓実測図（1/30）……53

第36図　Ｄ・ｅ－１・２号墓実測図（1/30）……53
第37図　Ｄ・ｆ－１～９号墓実測図（1/30）……54
第38図　Ｄ・ｇ－１・２号墓実測図（1/30）……54
第39図　Ｄ・ｈ－１～４号墓実測図（1/30）……54
第40図　Ｄ・ｉ－１号墓実測図（1/30）……54
第41図　Ｄ・ｊ－１～９号火葬墓実測図（1/30）……55•56
第42図　Ｄ・ｋ－１号墓実測図（1/30）……57
第43図　Ｅ－１号墓実測図（1/30）……57
第44図　１号土壙実測図（1/60）……57
第45図　２号土壙実測図（1/30）……57
第46図　２号土壙墓実測図（1/30）……57
第47図　出土土師器実測図①（1/3）……59
第48図　出土土師器実測図②（1/3）……60
第49図　出土土師器実測図③（1/6）……61
第50図　出土土師器実測図④（1/6）……62
第51図　出土装身具実測図（1/1）……62
第52図　出土鉄製品実測図①（1/2）……63
第53図　出土陶磁器実測図（1/3）……64
第54図　出土土器実測図①（1/3）……64
第55図　出土土器実測図②（1/3）……65
第56図　出土土器実測図③（1/3）……65
第57図　出土土器実測図④（1/3）……66
第58図　出土土器実測図⑤（1/3）……67
第59図　出土鉄製品実測図②（1/2）……68
第60図　出土石塔類実測図（1/4）……69
第61図　出土瓦実測図（1/4）……69
第62図　出土古銭実測図（1/1）……69
第63図　出土石器実測図（1/2）……70

表　目　次

表１　上白水南土地区画整理事業地内調査一覧表……1
表２　中世墓関連出土土器観察表……74•75

Ⅰ　はじめに

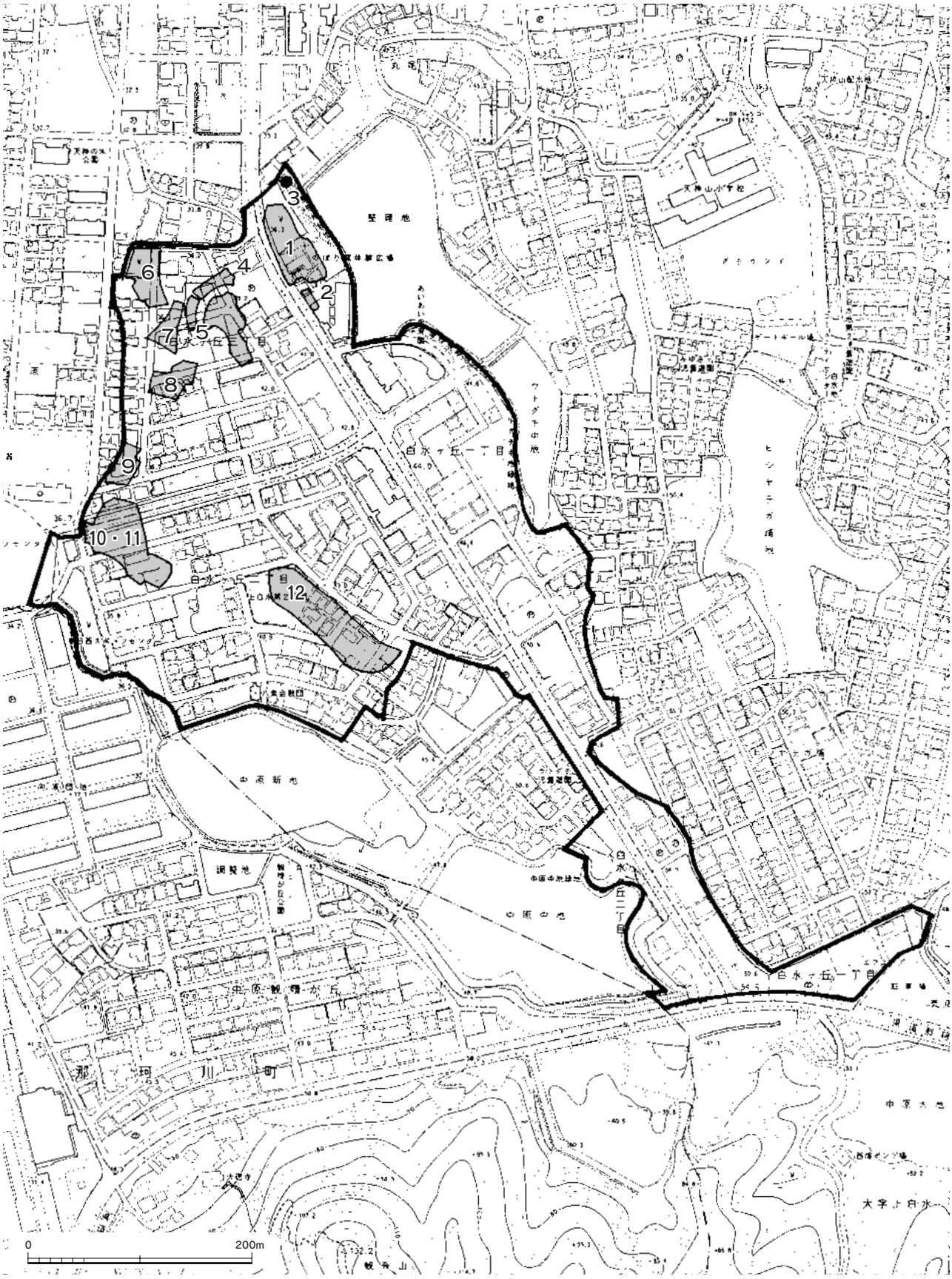
1．調査に至る経過

ウトグチＣ遺跡の発掘調査は、春日市南西部で計画された上白水南土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、春日市が国・福岡県の補助金を受けて実施した。同遺跡の調査地点は、福岡県春日市白水ヶ丘３丁目35・38番地外に所在する。

上白水南土地区画整理事業は、福岡都市計画事業として、春日市上白水南土地区画整理組合により計画され、実施計画面積は18.1haに及ぶ。発掘調査主体者である春日市教育委員会には、同整理組合から同事業に伴う埋蔵文化財調査報告文化財発掘調査依頼書が昭和60年９月に提出された。福岡県遺跡等分布地図及び計画予定地内の現況地形等から判断して、埋蔵文化財包蔵地に対する事前の発掘調査の必要な範囲と、これに伴う調査期間及び費用等について協議を行い、昭和61年から順次発掘調査を実施することになった。

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査年月日	調査内容	備　　考
1	ウトグチＢ遺跡（１・２次）	春日市白水ヶ丘１丁目４	871106～880205	瓦窯跡２基、溝１条、古墳１基	鴟尾、鬼瓦、軒瓦、平・丸瓦多数
			880404～880618	弥生時代土壙５基他	ガラス勾玉
2	ウトグチＢ遺跡（３次）	春日市白水ヶ丘１丁目５	900410～900601	溝１条、甕棺墓１基	平・丸瓦
3	ウトグチＢ遺跡（４次）	春日市白水ヶ丘１丁目1-1	901011～901012	甕棺墓２基	
4	ウトグチＣ遺跡（１次）	春日市白水ヶ丘３丁目35外	880620～880712	中世火葬墓	
5	ウトグチＣ遺跡（２次）	春日市白水ヶ丘３丁目38外	890406～900110	古墳５基、中世火葬墓他	鉄剣、鉄刀子、石製玉類
6	百堂遺跡（４次）	春日市白水ヶ丘３丁目131外	891014～891210	中世土壙墓１基、集落跡他	白磁碗
7	百堂遺跡（２次）	春日市白水ヶ丘３丁目46外	880411～880519	縄文時代土壙、歴史時代溝他	押型文土器
8	百堂遺跡（５次）	春日市白水ヶ丘３丁目58外	920413～920604	中世集落跡他	
9	百堂遺跡（６次）	春日市白水ヶ丘３丁目113外	930601～930728	縄文時代集石遺構２基、ピット多数他	押型文土器
10	百堂遺跡（３次）	春日市白水ヶ丘３丁目112外	880511～880705	古墳４基他	鉄器
11	百堂遺跡（１次）	春日市白水ヶ丘２丁目80外	871008～871205	古墳１基、甕棺墓１基、７世紀土壙墓他	須恵器、鉄器、玉類
12	ウトグチＡ遺跡（１・２次）	春日市白水ヶ丘２丁目54外	860917～870110	古墳７基、弥生時代土壙	鉄刀子、土師器

表１　上白水南土地区画整理事業地内調査一覧表



第１図　上白水南土地区画整理事業範囲及び調査遺跡位置図（1/5,000）

２．調査の体制

発掘調査を行った昭和63年度及び平成元年度、報告書刊行の最終的作業を行った平成19年度の春日市教育委員会の調査体制は下記の通りである。

（昭和63年度・平成元年度）

総括	春日市教育委員会	教育長	三原　英雄
		教育部長	西田　譲
		社会教育課長	矢野　文一
庶務		文化財係長	鬼倉　芳丸
		同主任主事	増永　睦司
調査		同技術主任	丸山　康晴
		同上	平田　定幸
		同技師	中村　昇平
		同嘱託	池田　洋子

（平成19年度）

総括	春日市教育委員会	教育長	山本　直俊
		社会教育部長	鬼倉　芳丸
		文化財課長	古賀　俊光
庶務		管理担当係長	渡辺　厚子
		同主査	塩足　雅弘
		同主事	北里ひとみ
調査		文化財担当係長	丸山　康晴
		同主査	中村　昇平
		同上	吉田　佳広
		同上	森井千賀子
		同上	境　靖紀
		同嘱託	吉田　浩之
		同嘱託	長谷部真弓

なお、発掘調査期間中に、福岡県文化課（現文化財保護課）、筑紫地区各市町の文化財関係者諸兄のご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

ウトグチＣ遺跡は、福岡県春日市白水ケ丘３丁目35・38番地外に所在する。福岡平野南奥部に位置する春日丘陵の南西部にあり、那珂川及びその支流の梶原川の西方に望む小丘陵尾根部及び斜面に立地している。牛頸山麓から派生し、開析作用によって形成されたウトグチ遺跡周辺の各小丘陵地帯は、八つ手状に小丘陵と小谷が発達しているが、中位段丘上で概ね西向きに突出することから、眺望性に富み各種、各時代の遺跡が多く分布する。同遺跡周辺は、現在の春日市の母体となる江戸時代以来の旧五箇村のうちの上白水村に属する。

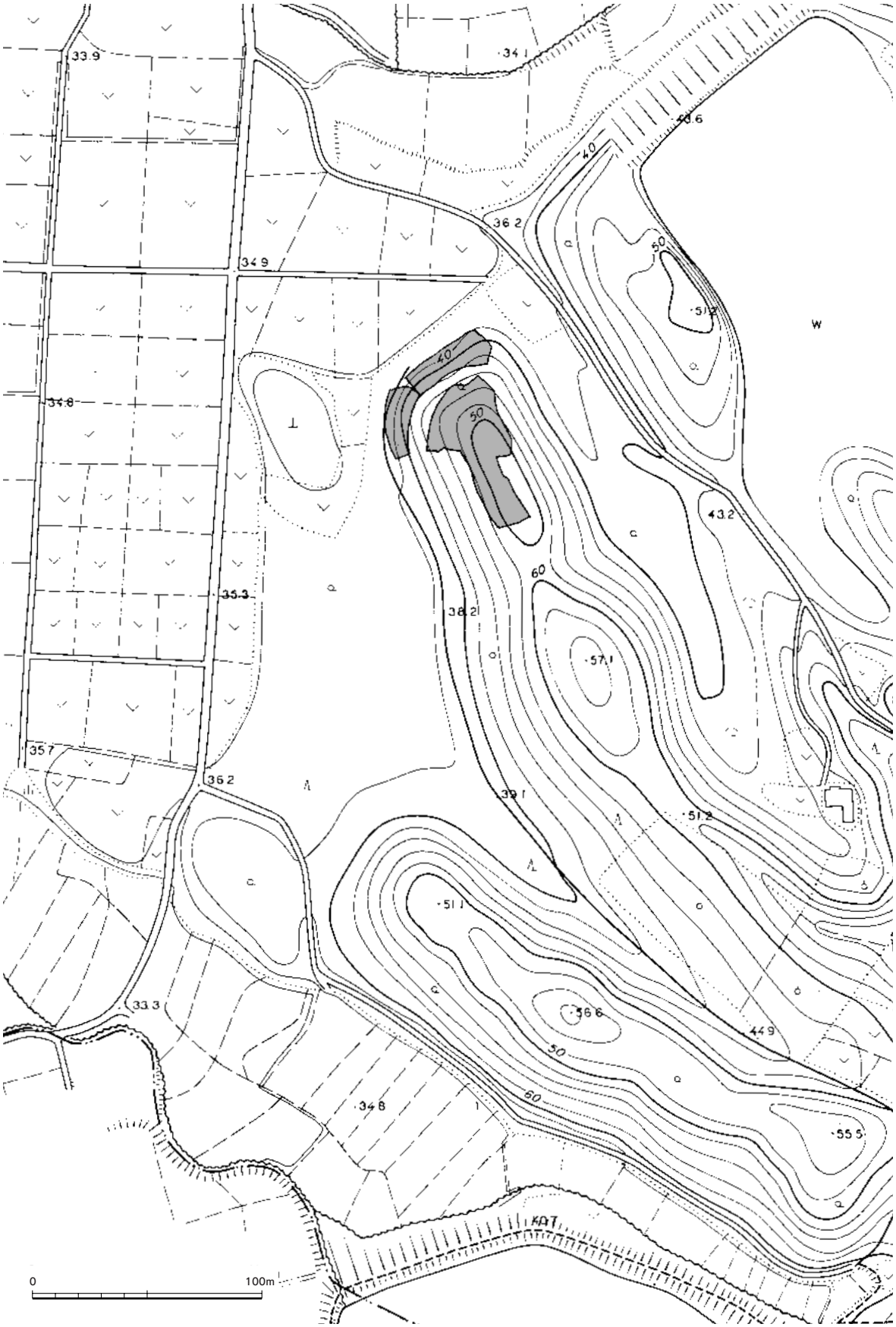
弥生時代の遺跡は、春日丘陵北半部に存在する須玖遺跡群を中心に華々しく展開するが、同遺跡周辺では、小丘陵前面の段丘上に、弥生時代中期前半以降に集落及び墓地が密に展開し始める。天神の木遺跡、中白水遺跡、門田遺跡、原遺跡などからなる所謂上白水遺跡群は、奴国の中枢である須玖遺跡群の、言わば衛星的な集落と墓地であろう。

古墳時代の遺跡は、その発生期より、那珂川・梶原川中流域を東岸から見下ろすという好適な地理的環境下に数多くの主要な集落、古墳が分布する。ウトグチ古墳群は、今回報告するウトグチＣ遺跡の存在する小丘陵上の５基のほかに、同丘陵の谷を隔てて東に対峙する小丘陵上のウトグチＢ遺跡の１基、あるいは南後方の小丘陵上にある同Ａ遺跡の７基が確認されている。Ａ～Ｃとも造営の時期が若干異なるが低墳丘の方墳、円墳で構成されている。中～後期については、那珂川・梶原川流域については赤井手古墳、日拝塚古墳などの比較的大型の円墳、前方後円墳が首長層の墳墓として流域に点在する。後期になると、春日丘陵より南東方牛頸川流域周辺で牛頸窯跡群の分布が顕著であるが、市内の発掘調査では６世紀から８世紀代にかけての窯跡は今までに約40基が確認調査されている。また、遺跡周辺で特記すべきは、６世紀後半以降の群集墳が流域周辺で爆発的に分布することである。同遺跡の南方500mに広がる観音山古墳群、那珂川町観音山南麓に総数300基以上が分布し、白水池・イゲ谷・西浦の各古墳群はその支群に位置付けられる。

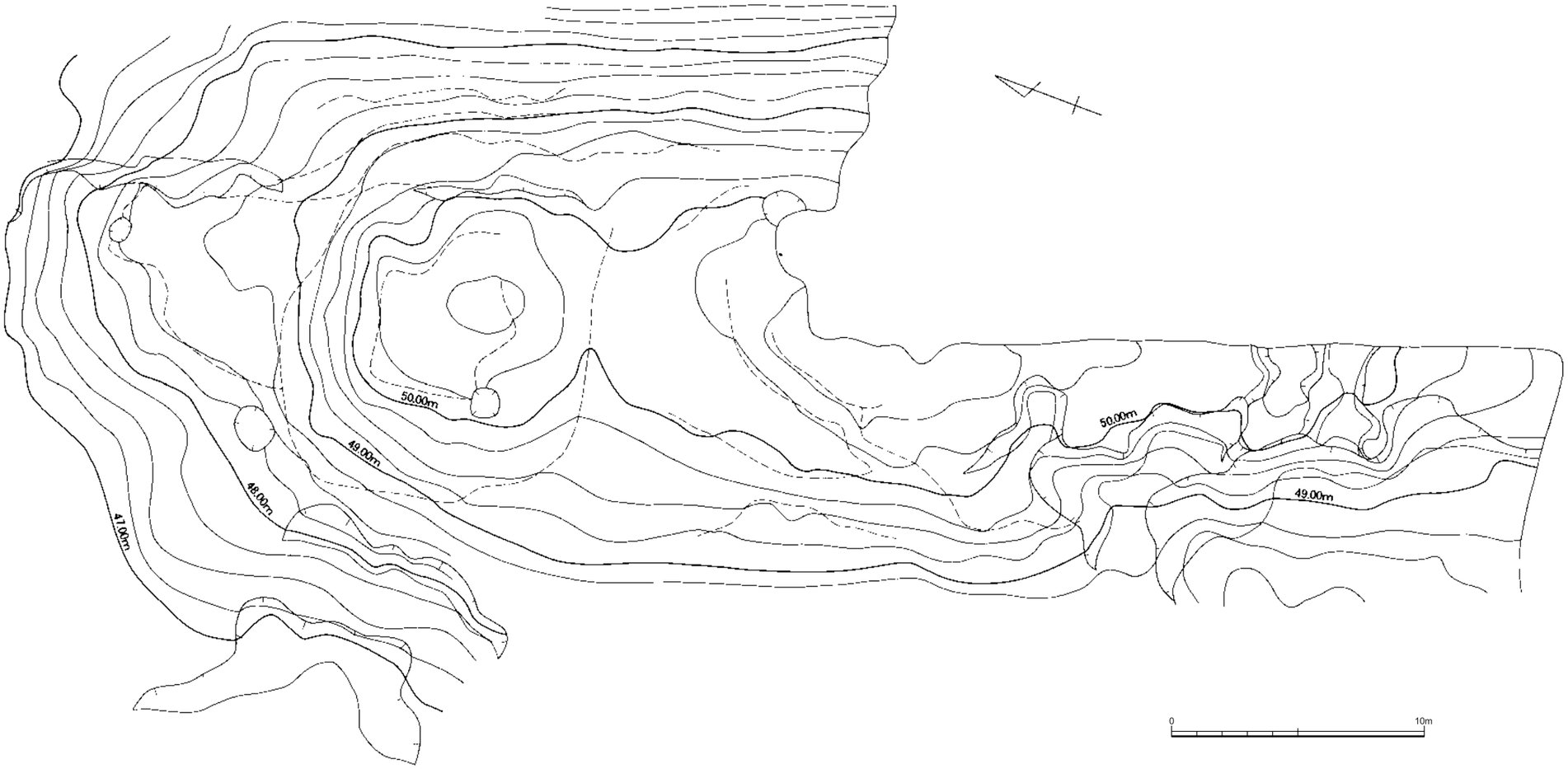
さらに西方の中位段丘崖から地峡部にかけても、同時代から古代・中世以降も流域の要衝であったことを物語る遺跡が数多く分布する。記紀の伝承をともない、現在も水路として存続する那珂川町裂田溝、古代の白水廃寺の存在を想起させるウトグチ瓦窯跡、大宰府防衛の拠点の一つ大土居・天神山水城跡などである。小水城群の外側に位置するが、那珂川中原・ヒナタ遺跡群では７、８世紀の建物群がこれまでに20棟以上確認されているが、今後の調査により性格究明が待たれる重要な遺跡の一つであろう。ウトグチＣ遺跡で確認された中世墓地は、同地から北方に見下ろす中白水遺跡の奥津城であることは、上白水館跡を核とする同遺跡のこれまでの発掘調査成果から、近年実態が徐々に浮き彫りになってきた。僅かに残る中世文書から京都石清水八幡宮を本家とする白水荘を基盤とする中世白水村の版図を示している。これらを物語る後世の遺産が、白水八幡宮南西側に広がる上白水集落周辺に密に分布する板碑をはじめとした石塔類の豊富さであろう。田神信仰としての七天神や、各旧家に残る屋敷神として、集落内に残る板碑、五輪塔類は今なお30以上が残っている。

１須玖遺跡群　２弥永原遺跡群　３警弥郷Ａ遺跡　４老松神社古墳群　５老司瓦窯跡群　６老司古墳　７警弥郷Ｂ遺跡　８野口遺跡群　９中尾古墳　10浦の田４号墳　11観音堂遺跡群　12石尺遺跡　13寺田・長崎遺跡　14日拝塚古墳　15辻畑遺跡　16柏田遺跡　17中白水遺跡　18門田遺跡（門田古墳群）　19今光・地余遺跡　20城ノ越遺跡群　21井河古墳群　22宗石遺跡群（貝徳寺古墳）　23中原・ヒナタ遺跡群　24下原遺跡　25天神ノ木遺跡　26天神山古墳群・天神山水城跡　27大土居水城跡　28整理池遺跡　29ウトグチＢ遺跡　**30ウトグチＣ遺跡**　31百堂遺跡（百堂古墳群）　32ウトグチＡ遺跡　33原遺跡（原古墳群）　34中原塔ノ元遺跡　35松ノ木遺跡群　36恵子若山遺跡　37妙法寺古墳群　38油田古墳群　39大万寺前古墳　40イボリ古墳　41白水池古墳群　42イゲ谷古墳群　43西浦古墳群　44観音山古墳群　45カクチガ浦遺跡群（エゲ古墳）　46炭焼古墳群　47裂田溝　48後田遺跡群　49安徳大塚古墳　50安徳遺跡群　51安徳台遺跡群　52平蔵遺跡群　53龍頭遺跡群　54楠木遺跡群　55岩門城跡　56地別当遺跡群　57山田西遺跡群

第２図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）



第３図　旧地形復元図による調査位置図（1/2,500）



第４図　地形測量図（1/200）

Ⅲ　発掘調査の概要

ウトグチＣ遺跡は、最高所の標高が50m前後の小丘陵の尾根及び斜面に立地する。福岡平野最奥部の牛頸山系から派生する春日丘陵の南西部に位置する。

発掘調査前の同遺跡は、「福岡県遺跡等分布地図」（1980年刊行）によると、1975年の福岡県教育委員会による分布調査により、同小丘陵南側で古墳時代初頭の壺棺墓１基が確認調査されている。これは、春日市教育委員会発行の「春日市遺跡地図」（2004年～）によると、ウトグチＣ遺跡に該当する。

１次調査は、昭和63年（1988年）６月20日から着手し、７月12日まで行われた。調査内容は、同丘陵の先端裾部について、同地点東側に対峙する丘陵斜面で確認された。

ウトグチ瓦窯跡に関連する遺構の有無を含めてトレンチ調査を併用して行った。結果的に、瓦窯跡に関連する遺構は確認できなかったが、緩斜面に数ヶ所集石状況及び糸切り底の土師質土器片を確認した。集石の周囲、とくに斜面下方は里道状に掘削を受けていること、また、斜面の一部に土壙状の掘り込みが数ヶ所あることなどから、結果的に計７ヶ所の集石遺構を上部施設とする火葬墓と、その下層から方形周溝状遺構１基を検出することができた。

２次調査は、平成元年４月６日に着手し、平成２年１月10日に終了した。調査区は大きく２区に分けられた。前年度１次調査の成果から、斜面裾部に１次調査地点から連続する火葬墓地の存在が予測できたので、同丘陵西側斜面裾部について、遺構の広がりをバックホー確認しながら、主に人力による表土剥ぎを行った。１次調査に比べて集石遺構の残りも良く、集石の外周を取り囲む界石や自然石の立石による墓標を数ヶ所で確認した。

もう一つの調査区は尾根上である。発掘調査前、伐採の終了した同所は古墳状の高まりが目視でも明瞭に確認できたため、まず平板実測による現況測量図を作成した。ついで、尾根上の明らかな墳丘２ヶ所を中心に土層ベルトを四方に残しながら、古墳主体部の検出と平行して表土の掘り下げに着手した。その結果、まもなく古墳墳丘周囲に河原石の集積状況を確認した。尾根上にも火葬墓地が展開することが判明したので、主体部を中心とした各墳丘の検出作業及び周囲の火葬墓の上位施設である集石の検出作業を並行した。結果的に、古墳時代初頭から前期にかけての壺棺墓２基、低墳丘の方墳５基及び、墳丘周辺を中心に４つの群からなる火葬墓のほか、中世の土葬墓等を検出した。特に注目されるのは、１号墳丘上で砂岩製の秀逸な板碑が墓塔として樹立した状況で確認されたことである。その集石下から、土師質土器小皿を身と蓋にする埋納容器も検出することができた。ウトグチ周辺の丘陵部では、過去の調査でも中世期の墳墓が市内の他地域よりも数多く確認されており、調査地点の下流に当たる上白水集落付近に広がる中白水遺跡の中世集落としての調査成果に対応していることは、中世における当該地域史を解明するための良好な資料を調査成果が内包しているといえる。

２ヶ年にわたる発掘調査の後、調査地周辺は土地区画整理事業による工事掘削によって、眼前から消えた。調査地周辺のかつての丘陵間の景観は、今は近くに残る県史跡ウトグチ瓦窯跡の斜面に僅かに残るのみである。

Ⅳ 遺　構

１．古墳時代の遺構

１号墳（図版１～３、第４・６～９図）

尾根上の調査区のうち、最高所の標高50m前後の部分に位置する。今回調査した５基の古墳のうち、最も好適な位置に選地されている。発掘調査前の尾根上の現況測量調査でも、はっきりと墳丘裾部がとらえうることができた。それによると、略南北方向に走る尾根線の最も先端部にあって、しかも北側（尾根先端側）、東西各斜面側に直線状の墳丘裾の一辺が認識できた。したがって、墳形は方墳として予測し発掘調査に着手した。

墳丘

尾根上の最高所の選地により、各辺の裾部及び尾根線上をまず地山整形し、２段の方形台状の基部を造りだしている。２段目墳頂部は平坦な造りだしの上に約20cmの盛土層が主体部掘り方の断ち割り調査の際の土層で観察された。

周溝は１段目の南辺及び東辺裾部に即して掘り込んでいる。幅0.9～1.8m、深さ0.9mほどである。また、周溝コーナー部分からまとまった量の古式土師器が出土した。

本古墳の規模は、１辺が13～14mとなり、東側墳裾（周溝底）からの高さは1.75m、北側墳裾（周溝底）からの高さは約３mを測る。

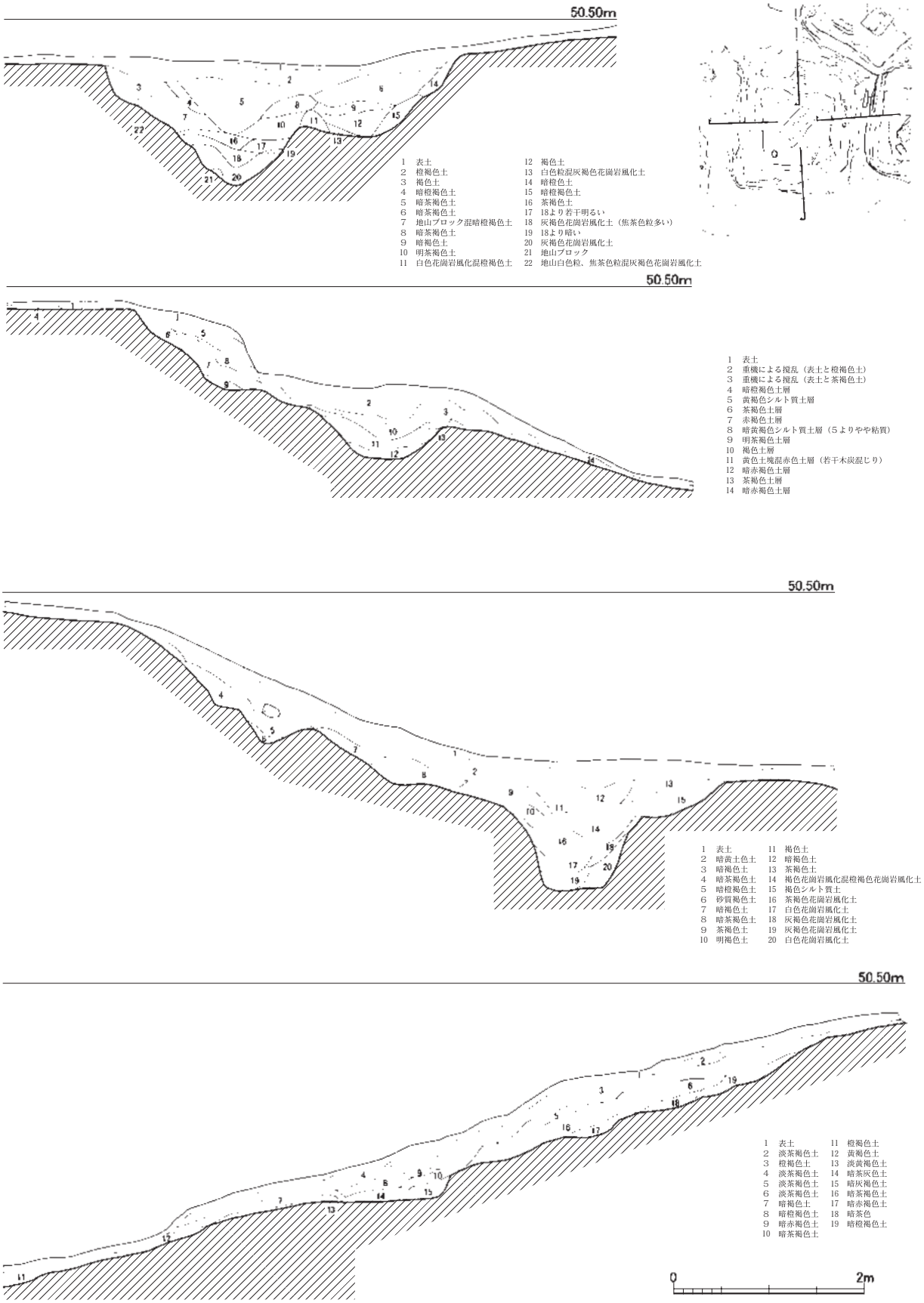
主体部

本古墳の内部主体は粘土槨割竹形木棺である。主体部中心を全体的に被覆残存する淡青灰色粘土の内部空間から推察した。棺を安置する掘り方は方形の墳頂部のほぼ中央部に掘り込まれている。主軸方向はN－56°－Wにとり、ちょうど墳頂形の対角線上にのる。周囲を棺自体は完全に腐朽して残っていなかったが、棺主軸に直交する土層断面の観察から10・11層は棺材の痕跡を示すものと考えられる。棺を安置した内部空間に落ち込んだ粘土を除去すると床面付近から遺物が出土した。頭位付近から鉄製刀子、滑石製玉類、中央付近から鉄製鏃、滑石製玉類、そして足位付近から鉄製剣がそれぞれ出土した。

復元される木棺の規模は、棺長3.38m、最大幅0.85mを測る。頭位側と考えられる南側小口で約0.8m、足位側と考えられる北側小口で約0.6mとなろう。棺底は中央部が最も深く両小口に向かって緩やかに舟底状に上がるものであろう。また、南側小口は推定される頭位付近で一段上がる。

２号墳（図版１・４、第４・６・10・11図）

１号墳の北隣にある。発掘調査前の現況測量では、北方に向かって突き出る尾根先端部からやや下がり始めた位置の標高48.5m付近に位置する。現況測量時の１号墳墳頂部から約1.8～2.3m下がり、墳丘の存在すら掴みかねていたので、１号墳北側のバックホウによる表土剥ぎの段階で墳丘及び主体



第８図　１号墳土層実測図（1/60）

部掘り方の一部を下げすぎてしまった。後に人力により慎重に掘り下げた。

墳丘

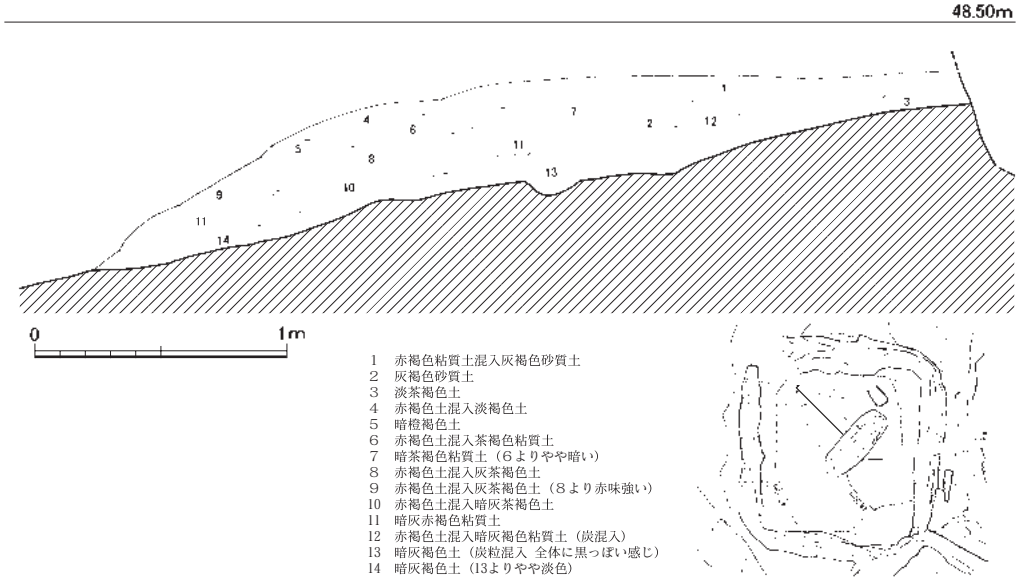
墳丘上の主体部掘り方北側長辺から墳裾にかけての土層断ち割り調査で、15～40cm程の盛土層を確認できた。造墓にあたって、まず尾根先端部から緩やかに下がりかけた部分に地山整形を行い、平坦面及び方形の基部を造りだしたと考えられる。墳形の成形については、墳裾を方形に巡る周溝を掘削している。周溝幅は１～1.5m程、深さ0.9mを測る。後出する３号墳に墳裾南西隅角部分を切られている。墳丘規模は周溝外側間の距離から、１辺11.1～12.7m程の方墳と推定される。墳丘の高さは現存する最高所と周溝底の比高差で約1.5mである。

主体部

主体部は粘土槨割竹形木棺と推定される。１号墳に次ぐ選地の良さに相応する内部主体を有するが墳丘上での不用意な掘削、撹乱の多さから掘り方の残り具合はよくない。掘り方主軸方向はN－54.6°－Wをとり、墳丘ほぼ中央にあって方形の対角線上に沿う。掘り方上面プランは隅丸長方形で、掘り込みは２段になっている。現状の墳頂から深さ0.15m程まで盛土層で、以下は地山層である。２段目の掘り込みは、地山中の１段目底面から棺が安定するように、長さ約3.3mの浅い半円状の掘り込みとなっている。さらに両小口部分は棺小口の外側の粘土の被覆を安定させるように夫々楕円状に浅い掘り込みを行っている。２段目床面に粘土は堆積していないので掘り方の整形後、木棺を安置した後に両側縁から粘土を積み上げながら被覆。さらに１段目床面も含めて次の粘土をレンズ状に被覆していると推定される。淡青灰色系の粘土を多用している。また１段目床面と粘土の間及び２段目床面に部分的に赤色顔料が見られたことから、掘り方内に木棺を安置する以前に赤色顔料を散布したと推定される。

復元される木棺の規模は棺長３m、棺幅0.5mを測る。棺底は頭位側に向かって緩やかな

第９図　１号墳周溝内土器出土状況実測図（1/20）



第11図　２号墳土層実測図（1/30）

舟底状を呈して上がるであろう。

副葬品等出土遺物はなかった。

３号墳（図版１・５、第４・12～14図）

１・２号墳の西隣にある。今回調査した他の４基と違い尾根上のラインからやや外れた、標高47m前後の西向き斜面に墳丘が造られている。現況測量調査の段階でもまったく存在を予測していなかったが、１・２号墳の遺構検出作業段階で墳丘東半分の周溝プランを確認したため、精査した。古墳南西側斜面下方に浅い谷が入っていることから、後世土砂の流出等の原因で墳丘の西側半分ほどが失われている。

墳丘

１・３号墳間の土層調査を含めて検討すると古墳東側の周溝の掘り込みによって、１・２号墳とも裾部コーナーを切られていることから、１・２号墳の造営後に造られたことは明らかである。地山整形により方形の基部と周溝を造り出している。周溝の規模は幅１～1.2m、深さ0.5mを測る。墳丘上位の残りが悪く、地山整形による墳丘上位に盛土が構築されていたかどうかは不明である。

墳丘東辺に残る周溝の長さから、墳丘の規模は１辺12m程の方墳となろう。

第１主体部

残存する墳丘のほぼ中央に位置するが若干北寄りに偏る。掘り方の主軸方向はN－60°－Wである。１・２・４号墳主体部の方向とほぼ合う。墓壙掘り方床面の造作の形状から木棺直葬と推定される。掘り方上面プランは、ほぼ方形で主軸長2.6m、最大幅2.4m、深さ1.4mを測る。掘り方壁面がほぼ直に掘り込まれ、壙底の主軸方向に隅丸長方形プランで深さ10cmにも満たない浅い２段目が掘り込まれている。これが棺の規模を示していると考えられる。これから棺の規模を復元すると棺長約2.2

m、棺最大幅0.75mとなろう。頭位側の小口の幅がやや広くなっている。棺の周囲に粘土はまったく無かった。床面はほぼ平坦で頭位側と推定される東側小口に向かって緩やかに上がる。両小口外側の１段目掘り方下位の壁面に横方向の僅かな掘り込みが見られる。棺の長さが掘り方の主軸長とほとんど変わらないため、墓壙内に棺を安置する際、便宜的に掘り込んだものであろう。

掘り方中下層から鏃と思われる鉄製品の破片が出土した。

第２主体部

第１主体部の南東側に近接して造られる。他の主体部と大きく主軸方向が異なりN－20°－Eを取る。墳丘上面が大きく削平され、かつ木の根等の撹乱によって東辺以外の掘り方上位は失われている。凡そ隅丸長方形の２段掘りの墓壙であろう。２段目肩に沿って淡青灰色粘土が帯状に被覆されていたが内部には木質等は残っていない。土層断面の観察及び被覆用の粘土残存状況から木棺の使用が推測される。２段目のプランは隅丸長方形で主軸長約2.2m、最大幅0.85mを測る。床面の横断面形は緩やかな舟底状である。頭位は小口の幅が広い北側と推定される。

副葬品等の出土遺物は無かった。

４号墳（図版１・６、第４・15～19図）

１号墳の南側に隣接し丘陵尾根線上の中央に位置する。標高は最高所で50.5mを測る。１号墳よりもさらに南奥の尾根線上から東側斜面にかけては、発掘調査以前のマサ土用の土採り造成によって尾根から東側斜面にかけて大幅に削りとられ、既に４号墳の墳丘の約1/3は消失していた。

現況測量作成段階で鍵型の掘削壁面付近は、僅かに墳丘状の高まりが認識できたので、同壁面の精査によって周溝及び主体部と思われる土壙状の土層断面を検出し調査に取りかかった。

墳丘

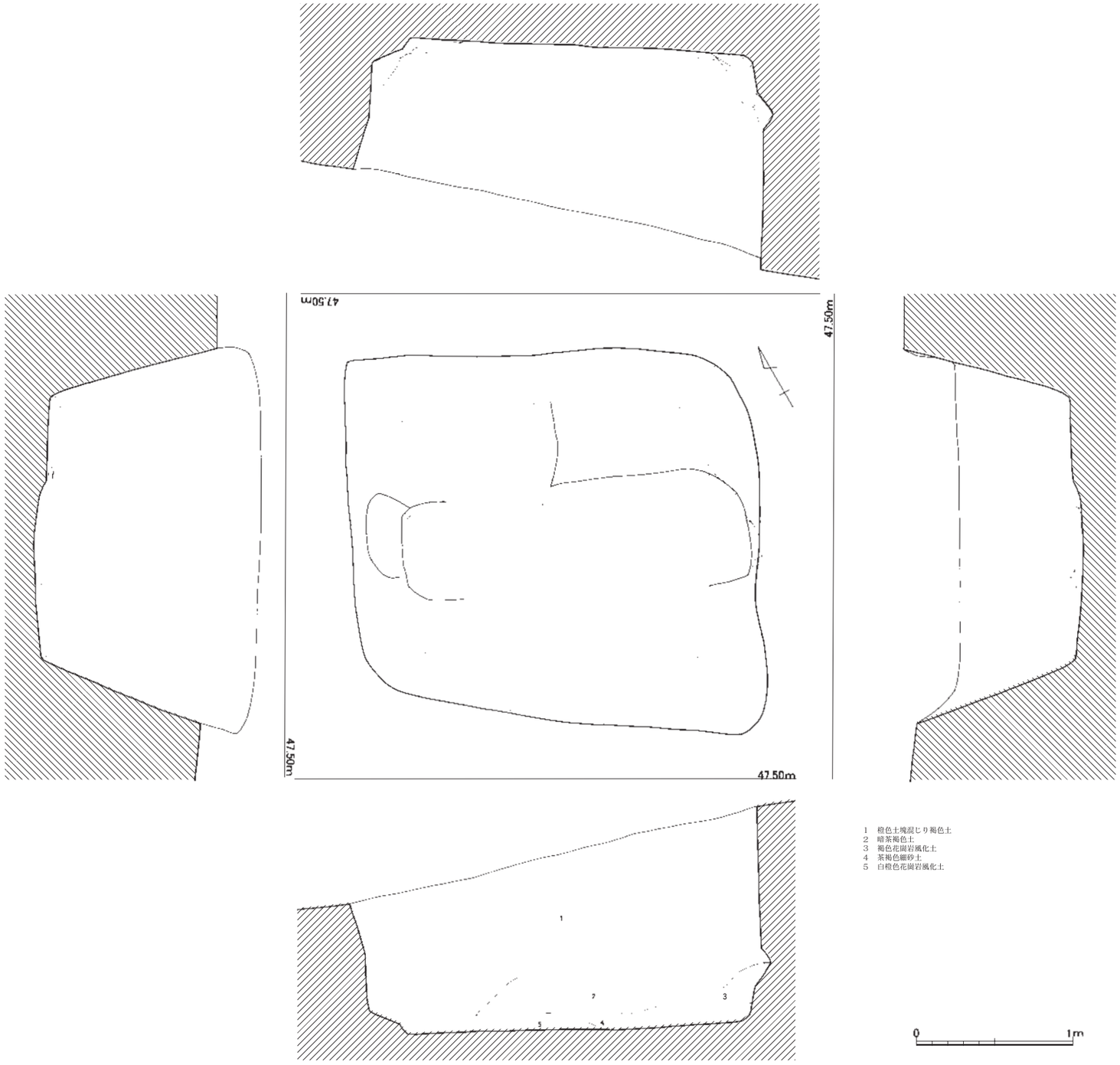
発掘調査以前に墳丘上は大幅に削られて残りが悪く、主体部掘り方のプラン検出時ですでに棺に被覆する粘土の一部が露出していたほどであった。したがって墳丘から三方に設定した土層ベルト上で墳丘上位への盛土の有無は確認できなかった。古墳造営は尾根上の地山整形と墳丘裾部の周溝の掘削により、方形の基部を造りだしていると推定される。周溝は南辺の一部、西辺、北辺、そして僅かに東辺の一部と連続して掘り込まれている。溝幅は南辺から西辺にかけては約1.2～1.7m、北辺は最大で約３mを測る。深さは最大1.1mになる。

墳丘の規模は１辺約13.5～15mの方墳であろう。墳丘の高さは北側周溝底から1.35m以上、西側周溝底から1.85mである。

北辺側の周溝中の２ヶ所で古式土師器の甕が出土した。とくに東側の出土状況は甕内面に赤色顔料が土器の破面もふくめて密に入っている状況で、かつ出土部位の溝底が１段掘り込まれている状況も看取された。墓前での葬送儀礼の一端を示しているものであろう。

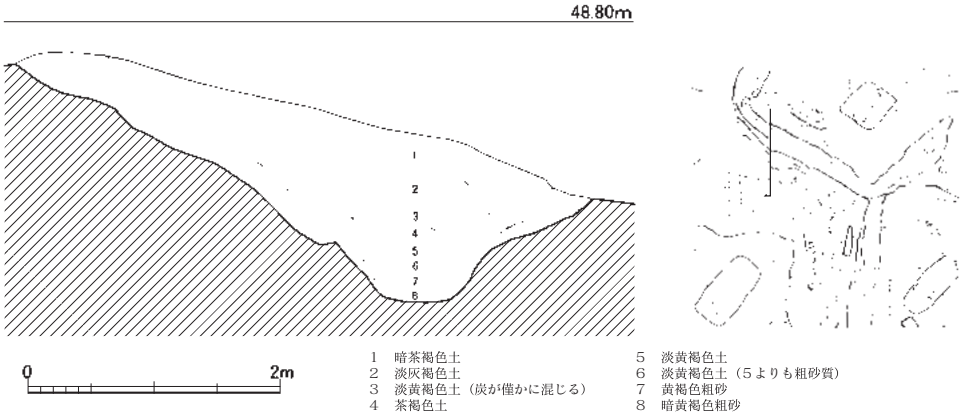
主体部

土採り掘削及び木の根の撹乱によって、主体部掘り方の東側約半分程度が失われている。掘り方内



第12図　３号墳第１主体部実測図（1/30）

第13図　３号墳第２主体部実測図（1/30）



第14図　３号墳周溝土層実測図（1/60）

部の横断面の土層観察や残存する粘土の堆積状況から判断して、主軸方向をN－56.5°－Wに取る割竹形木棺が主体部であろう。墓壙掘り方は２段になり現状では地山に直接掘り込んでいる。１段目は長辺4.77m以上、最大幅約2.85m、深さ約0.25mを測る。２段目は１段目のほぼ中央に棺を安定して置くように、深さで0.15m前後に横断面で舟底状に掘り込んでいる。棺の周囲に被覆した粘土の使用状況から判断して棺を安置後、１段目墓壙床面から10cm程裏込めの土砂を戻し、そこから粘土で棺周囲を被覆していると推定される。２段目掘り方床面をみると東側小口付近がわずかに浅い段を有しながら上がることと、この付近に赤色顔料が密に残ることから東側が頭位であろう。

以上の状況から復元される棺の規模は棺長2.55m以上、最大幅0.65mであろう。

５号墳（図版１・６、第４・19・20図）

４号墳の南隣の標高50m前後に位置する。隣接する４号墳と同様に土採り掘削によって墳丘の半分以上を失っている。土採り壁面の土層調査で溝状の断面２ヶ所を確認したので、墳丘及び周溝の検出作業に努めた。

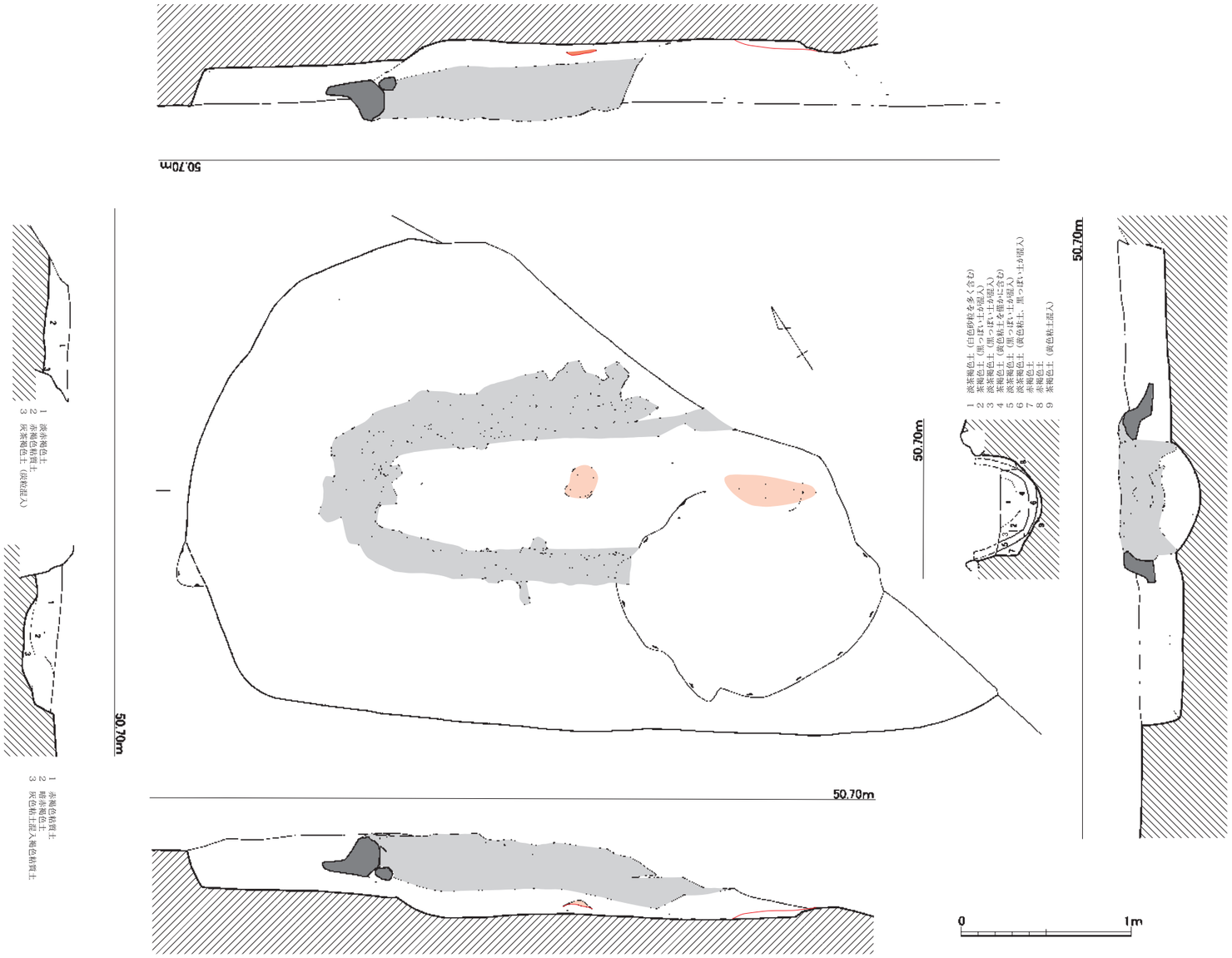
墳丘

尾根線の走る方向が４号墳のある位置よりもさらに東に寄るためであろう、地山整形されたとみられる平坦面の残りも悪い。尾根線から西側に下がる緩斜面において墳丘裾部西辺の周溝及びコーナー２ヶ所を確認した。墳丘上の南北及び東西方向の土層断面の調査では、地山整形上の盛土層は確認できなかった。北辺の周溝は４号墳南側の周溝と近接し、連続する南北方向の土層ベルトの観察によると、明らかに５号墳の周溝が４号墳の周溝を切っている。周溝の幅は0.8～1.2m、深さ0.6m前後を測る。

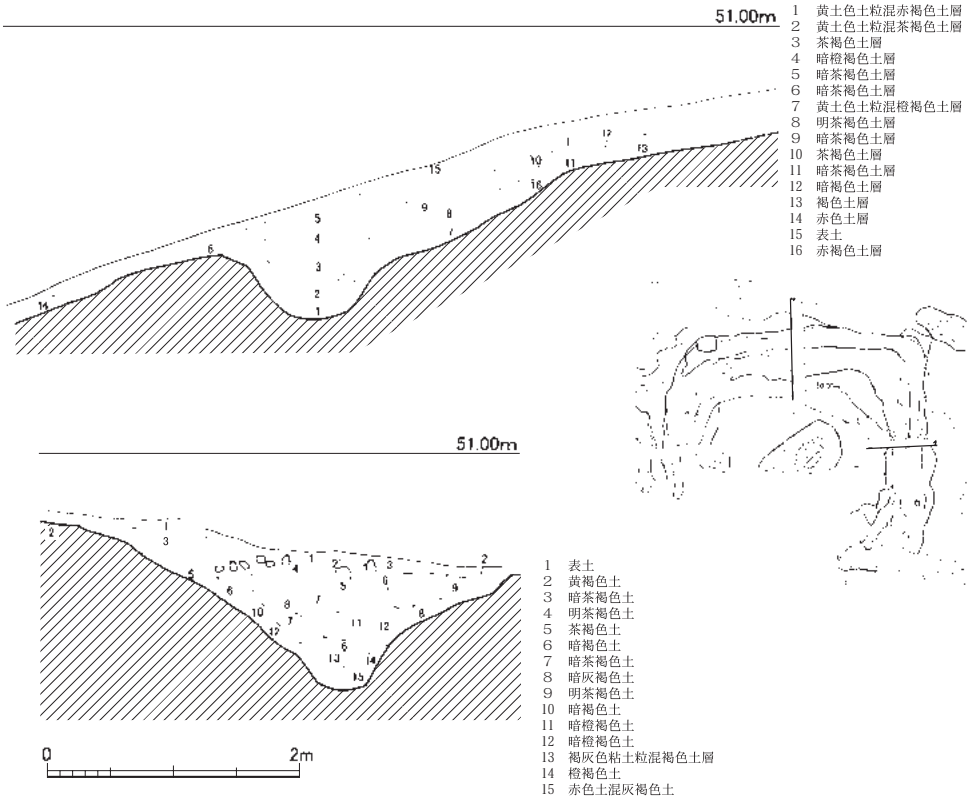
墳丘の規模は、１辺約12mの方墳である。墳丘の高さは５基中最も残りが悪く、周溝底から0.5m程度である。西辺の周溝上層から不明鉄製品１点が出土した。

主体部

土採り造成によって墳丘上の主体部は完全に消失しているものと判断される。残存する周溝内側の墳丘上には関連する遺構は皆無であった。



第15図　４号墳主体部実測図（1/30）



第16図　４号墳土層実測図（1/60）

尾根線上中央部に同じように造墓された１・２・４号墳の主体部の様相からすると、墳丘のほぼ中央部に二つの墳丘コーナーを結ぶ対角線上に、比較的大型の主体部掘り方が存在したと推察する。

１号壺棺墓（図版１・７、第21図）

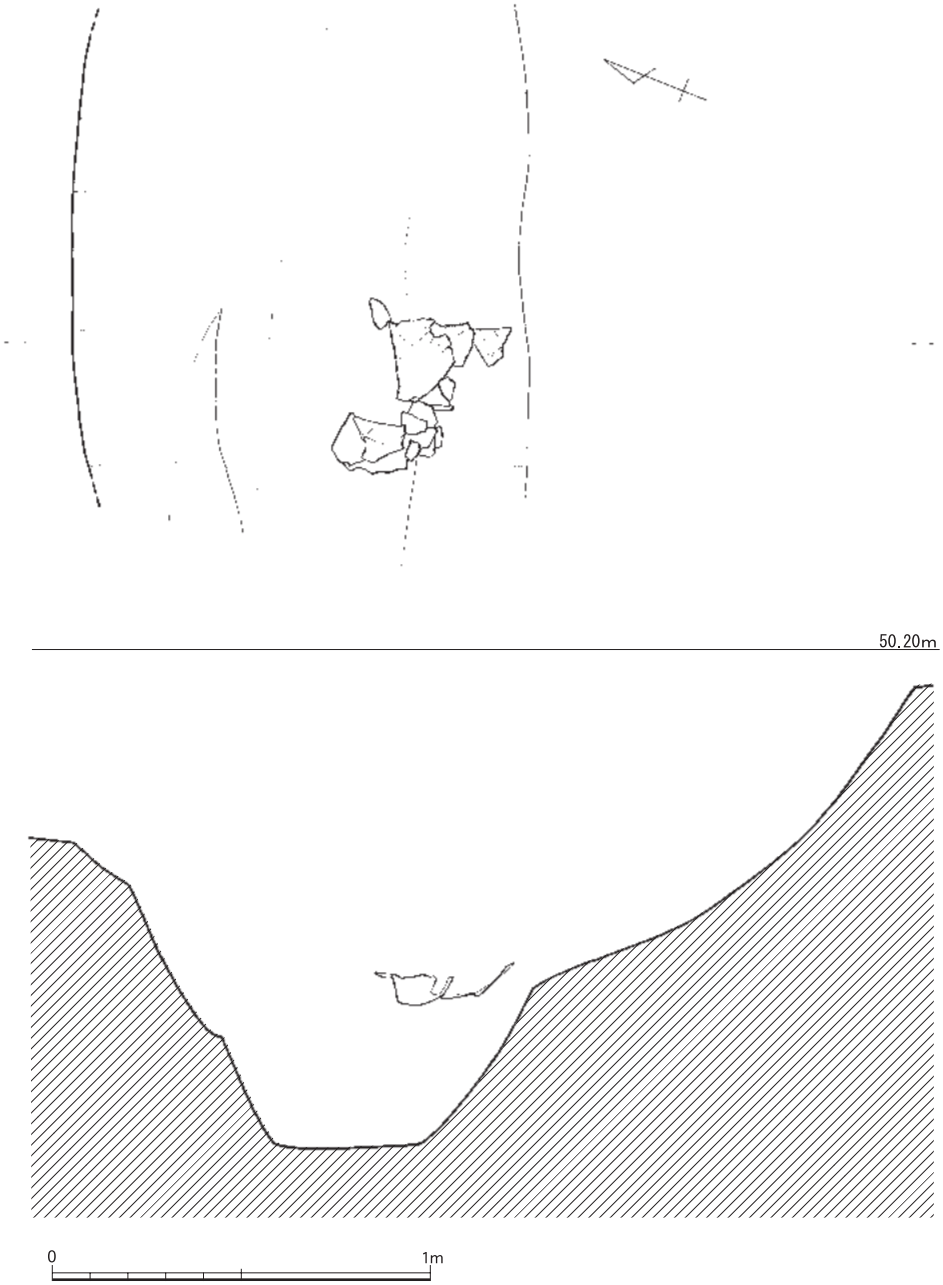
１号墳墳丘上にあり標高50.20mを測る。１号墳主体部掘り方の南東側約１mに接近しており、１号墳の第２主体部と言ってもよいだろう。

長径0.79m、短径0.64mの楕円形の掘り方を有するが、埋置される壺棺は後世の削平によって残りが悪い。主軸はN－101°－Wである。残存する壺棺は土器の主軸から約30°前後傾斜して埋置されている。胴部最大径よりも上位の部分で淡青灰色粘土が充填されていた。削平時に破砕された土器片を仔細に観察すると頸部から上が直立する壺形土器の破片もふくまれており、掘り方内部に残る壺形土器の胴部径と異なることから、上下で合わせる型式の壺棺墓であると推定される。

２号壺棺墓（図版１・７、第21図）

５号墳南側周溝の外側（南方）２mにあり標高49.50mに位置する。昭和50年７月に福岡県教育委員会による周辺での分布調査の際に確認調査された壺棺墓と同一丘陵上であるが、相対的な位置は不明である。同報告書掲載の写真図版を見ると距離的にそう大きく離れていないと察せられる。(1)

丘陵上位の後世の削平により、１号壺棺墓以上に残りが悪い。径0.58mの不整円形の掘り方を有

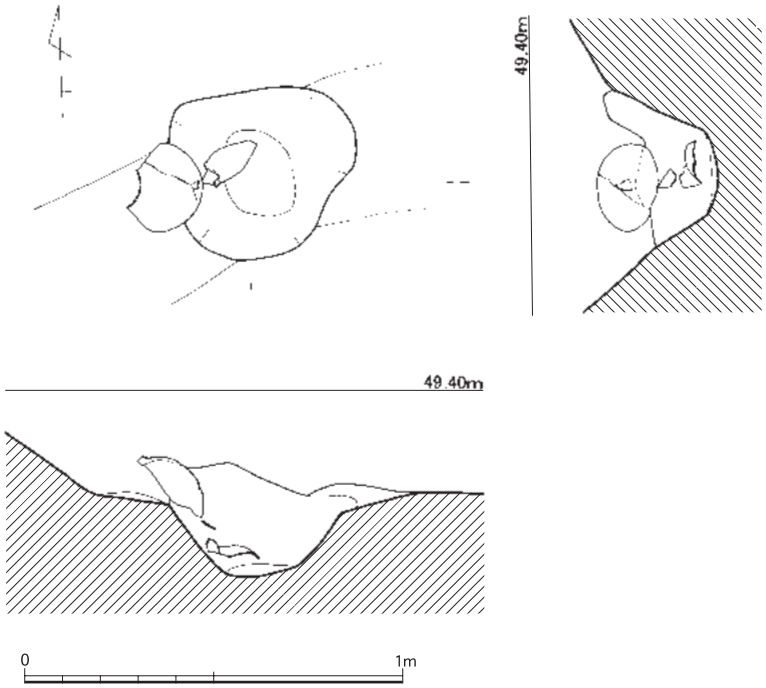


第17図　４号墳周溝内土器出土状況実測図①（1/20）

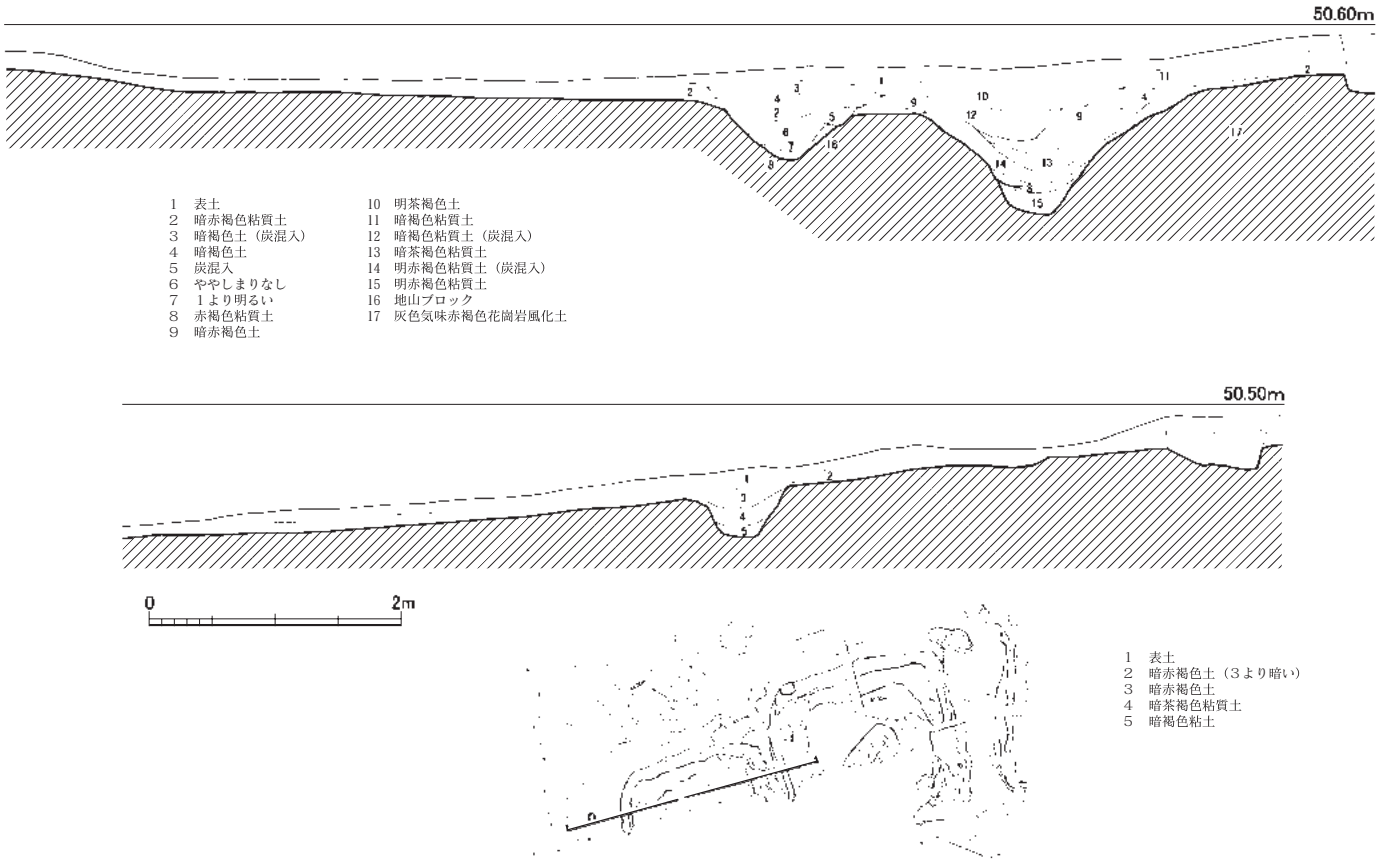
する。掘り方中の土器棺の残りも撹乱されて非常に悪く、棺の埋置角度も掴みかねる。主軸は一応N－87°－Wとした。掘り方内に残る破砕された土器片から、二重口縁の壺形土器が使用されているが、上・下棺あったかどうかは不明である。

注

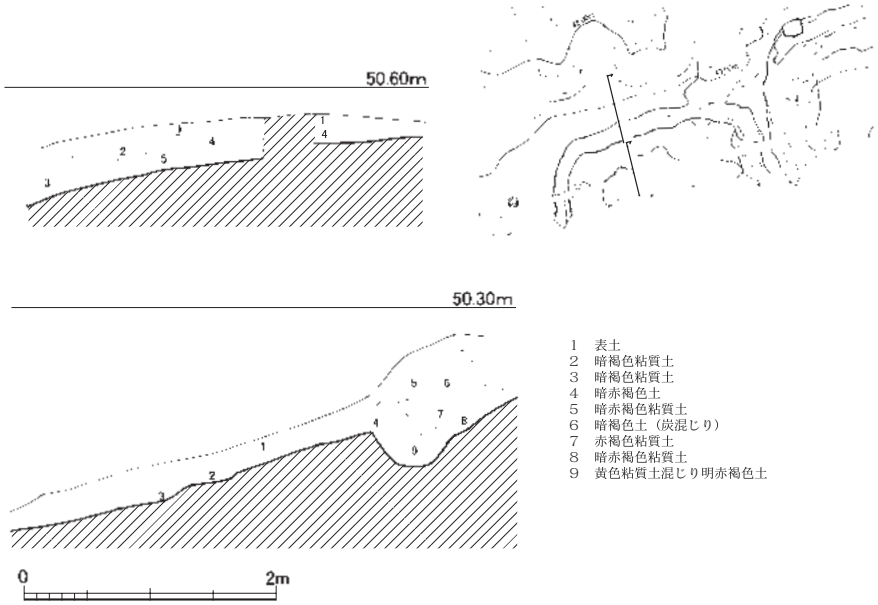
⑴　丸山康晴「２.周辺遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第３集（1977）福岡県教育委員会



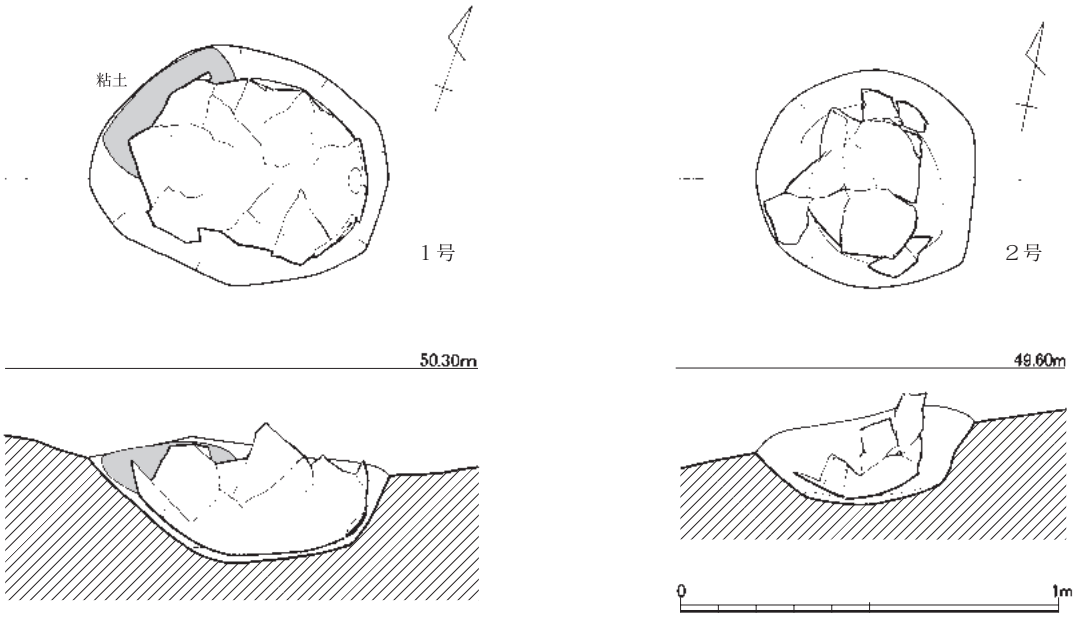
第18図　４号墳周溝内土器出土状況実測図②（1/20）



第19図　４・５号墳土層実測図（1/60）



第20図　５号墳土層実測図（1/60）



第21図　１・２号壺棺墓実測図（1/20）

２．歴史時代の遺構

今回の発掘調査で確認された同時代の遺構は中世の墓地である。大きく二つの調査区に分けられる。一つは概ね尾根線上の古墳時代前期の古墳墳丘上に配置されたもので、Ａ～Ｃ群及びＥ群の四つの群としてさらにグループ化できる。丘陵尾根上に広がるＡ、Ｂ、Ｃ群は、前代の１・２号墳及び４号墳の墳丘西側の前面から墳丘にかけて、ほぼコンターラインに沿って横方向に帯状に造築されている。Ｅ群はＡ～Ｃ群とは分布位置が異なり、１号墳から尾根線を西側斜面に約15m下った斜面上に築造されている。丘陵全体の位置関係からするとＤ群とＡ～Ｃ群とのほぼ中間に位置する。もう一つは、１次調査及び２次調査で確認した同じ丘陵から斜面を北西側に下りた丘陵裾部にまとまる一群でＤ群とした。

中世墓地の各群の中でも遺構の残り具合は区々である。後世の撹乱やごく近年の植林による破壊を多々受けている。表土下で確認した礫の集積状況も現位置を保っているのか否かの判断がつき難く、集石下部の埋納壙を墓の一単位として捉えるにも困難を極めた。以下は火葬骨を埋納壙に明らかに納めた遺構を中心に記述している。中には集石のまとまり全体に火葬骨を散布した状況も見受けられた。

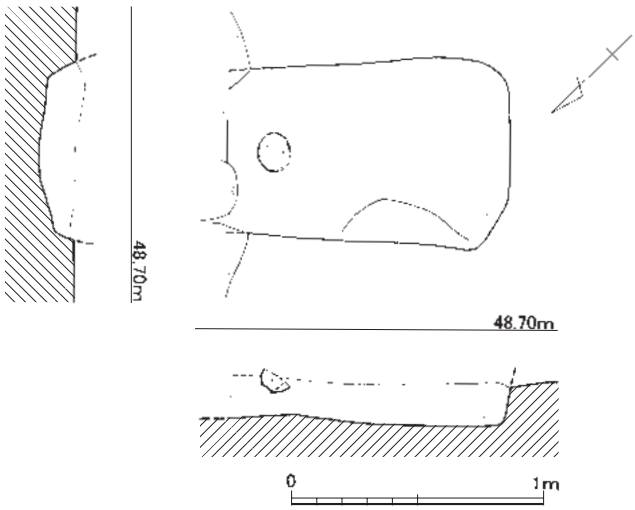
中世墓地Ａ群

２号墳墳丘南側から１号墳墳丘北西側にかけて集石状遺構が表土下で確認された。後世の撹乱が著しいため集石状況は決して密ではない。

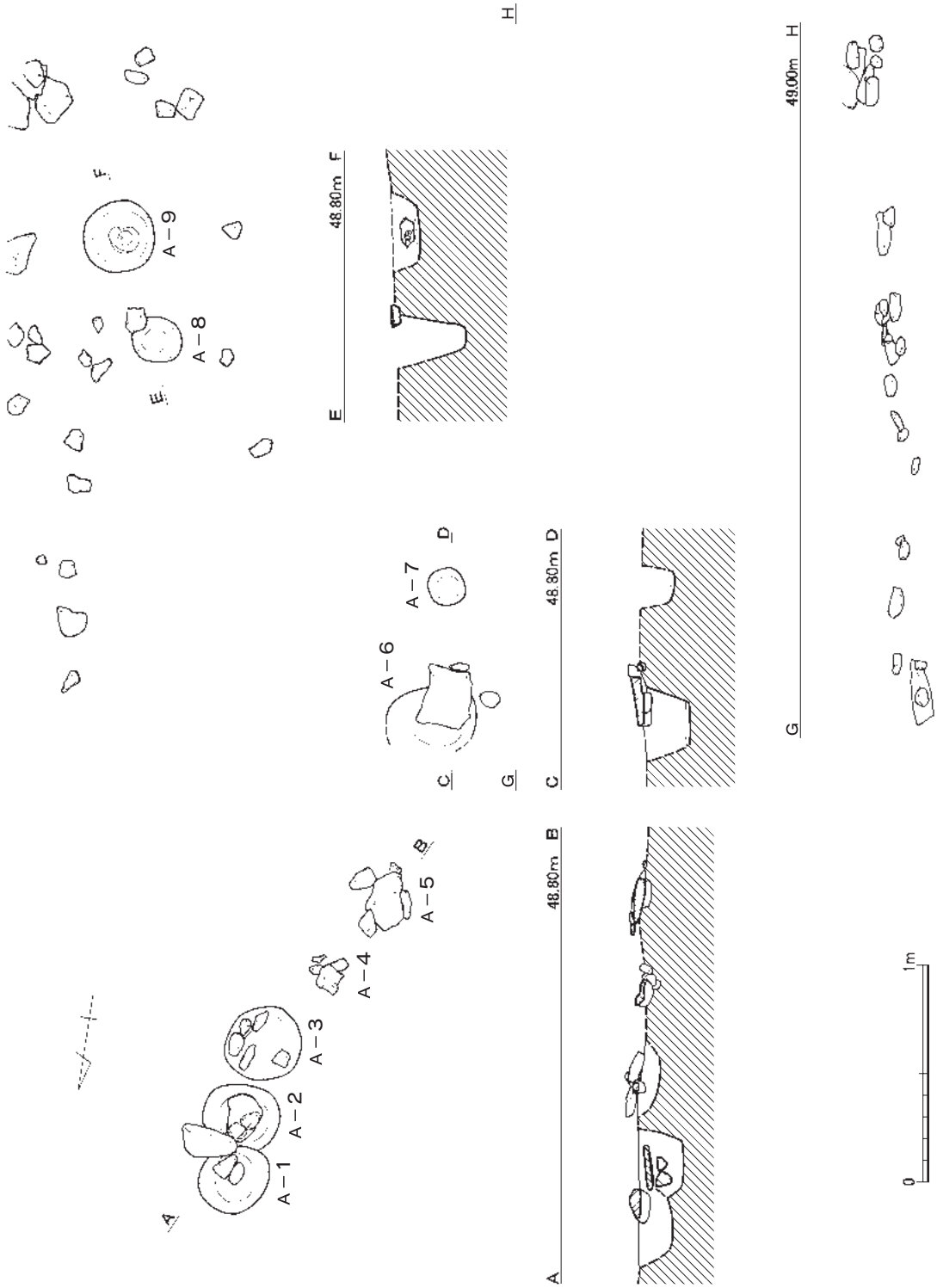
１号土壙墓（図版４・８、第５・22図）

２号墳の墳頂部南東側で検出した。Ａ群の分布範囲の中心は２号墳墳頂南側から１号墳墳頂北西側にかけてである。１号土壙墓は、それより北東側にややずれるが一応Ａ群の範囲とした。

２号墳主体部周囲の遺構検出作業中に表土下すぐに黒褐色の凹状の堆積を確認したため、丁寧に周囲の土壌を除去していったところ、墓壙プランの確認前に青磁碗が露出した。墓壙の北側を木の根等の撹乱によって失われている。墓壙の規模は平面プランが隅丸長方形で長辺1.23m以上、短辺0.76m、深さ0.15mを測る。墓壙底面はほぼ平坦であり木棺墓の可能性もあるが、調査途中の横断面方向の土層ベルトによる観察では明確な分層は確認できなかった。墓壙底面から約0.1m浮いた状況で副葬品と見られる青磁椀１点が出土した。



第22図　１号土壙墓実測図（1/30）

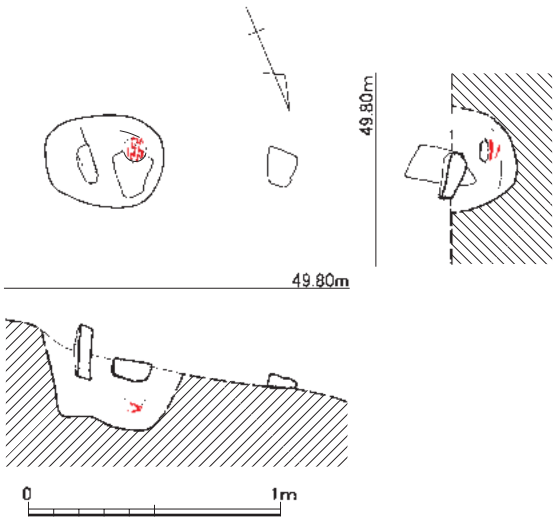


第23図　A－1～9号墓実測図（1/30）

A－1～9号墓（図版8、第5・23図）

南北方向に帯状に広がるA群のうち北半分に集中する。前代の古墳の位置からすると2号墳南西側墳丘から周溝上部にかけて集石状況が疎らに見られる。集石は10cm前後の比較的扁平な円礫や角礫

を主に使用しているが、なかには20～30cm大の角礫も部分的に混じる。礫の分布状況から、かなり撹乱されているところもある。Ａ－１～５号墓は直線的に並んでほぼ等間隔で数個の集石がみられる。各々の集石の下部遺構を確認したところＡ－１～３号墓は径30～35cm程、深さ10～20cmのほぼ円形プランの埋納壙が掘り込まれ、中より火葬人骨片が多数出土した。Ａ－４及び５号墓は集石下に埋納壙は認められなかったが、周囲から火葬人骨片が少量検出された。



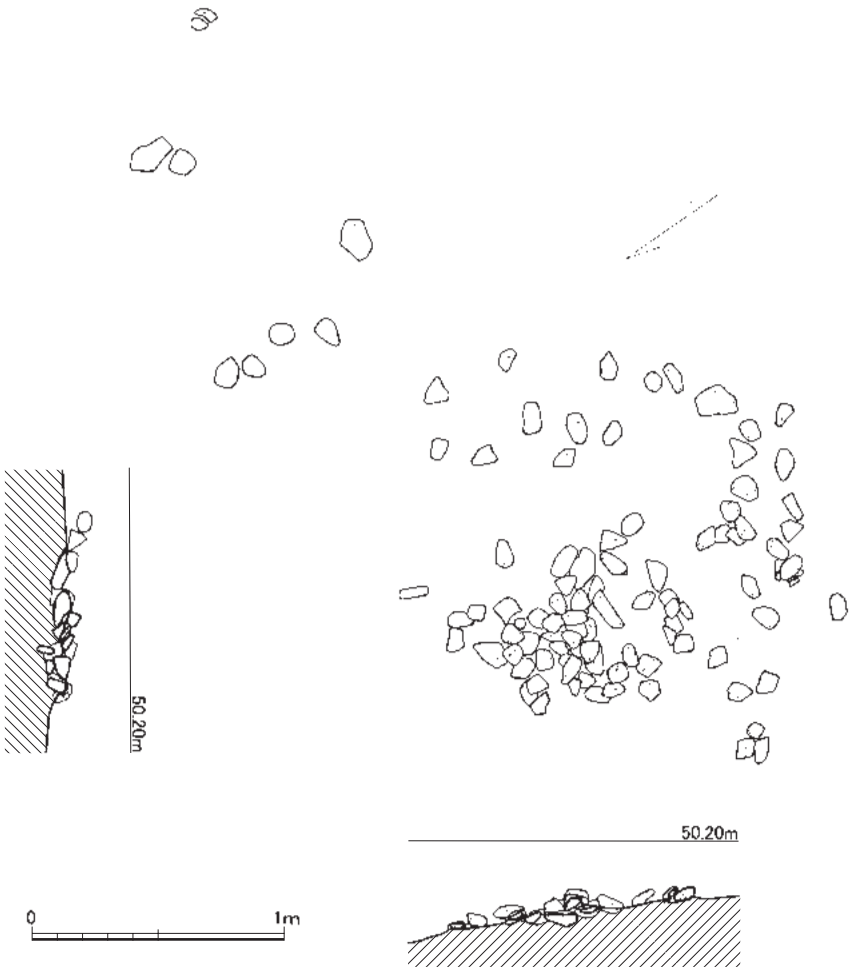
第24図　Ａ－10号墓実測図（1/30）

Ａ－６及び７号墓はＡ－１～５号墓の直列状況からはやや折れるが南側に隣接する。Ａ－６号墓は１辺25～30cm大の扁平な角礫他の集石下に径30～40cm、深さ約20cmの楕円形の埋納壙が確認され中から火葬人骨片が出土した。Ａ－７号墓はＡ－６号墓のすぐ南隣にある。上部に集石は認められなかったが径17cm、深さ15cmの円形の埋納壙が確認され、火葬人骨の細片が少量検出された。Ａ－１～７号墓は48.40m前後の標高に造営されている。

Ａ－８及び９号墓はＡ－１～７号墓の南側約1.5mにやや間隔を開けて分布する。Ａ－１～７号墓よりやや高い標高48.60m前後に築造されている。上部の集石状況はかなり疎らであり南北３m、東西1.5mの範囲に、主に10～15cm大の扁平な角礫が散布している。Ａ－８号墓は径20cm、深さ約30cmの円形の埋納壙で上部に密な集石は認められなかった。壙中から火葬人骨片が出土した。Ａ－９号墓はＡ－８号墓の南側0.5mにある。径約35cm、深さ12cmの円形の埋納壙で上部に全く集石が認められなかった。壙中のほぼ中央から土師質土器小皿２枚を身と蓋に使用した埋納器が検出され容器内から下顎片を主とする火葬人骨片が発見された。

Ａ－10号墓（図版９－１、第５・24図）

Ａ群の北端に単独で築造されている。１号墳墳頂を西側にやや下りた緩斜面に位置し標高49.60m前後を測る。古墳調査前の地形測量後、１号墳の墳丘周辺の掘り下げ時に表土から約40cm下で砂岩製の板状の加工痕が明瞭な石塊を確認したことから墳墓の存在がわかった。石塊は墓標として樹立状態であり、その西側前面0.7mにこの破片と思われる石塊片も確認された。墓標の周囲を慎重に掘り下げると、すぐ前面に19cm×16cm、厚さ９cmの花崗岩製の角礫が置かれ、これらの下位に47cm×37cmの楕円形プランの埋納壙が検出できた。埋納壙は深さ27～35cmで底部が２段になっている。角礫直下に土師質土器小皿を身と蓋にする埋納容器を確認した。容器内からは火葬人骨片等は見つからず、容器の下からまとまって火葬骨片が発見された。樹立状の砂岩製石塊は小型の整形板碑で正面は丘陵西側斜面を向いている。埋納壙の主軸はN－86°－Wをとる。



第25図　Ｂ－１号墓実測図（1/30）

中世墓地Ｂ群

１号墳墳丘２段目南西側コーナーから４号墳周溝北西側付近にかけて、集石状遺構が表土下で確認された。集石の範囲は南北約11m、東西１～４m程の帯状に広がる。帯状の群全体が西側斜面に向かって緩やかな傾斜をもつ。周囲全体にやや撹乱は入るがＡ群と比べると集石状況は密であり、埋納壙等の下部遺構が多く検出された。

Ｂ－１号墓（第５・25図）

１号墳墳丘２段目南西側コーナー付近にまとまった数の集石状況がみられ、標高は49.90～50mを測る。凡そ掌大の扁平な円礫や比較的角の取れた角礫が用いられ、１m×0.7mのほぼ楕円形の範囲に密に集石状況がみられ、その周囲にやや疎らに集石が広がる。集石状況の密な部分を中心に礫を取り除き下部遺構の検出を試みたが、埋納壙等の顕著な遺構は確認されなかった。周囲から礫に混じって火葬人骨の細片が多数発見された。

Ｂ－2～19号墓（図版９・10、第５・26図）

Ｂ－１号墓の南側に集石状況がほぼ帯状に約４m連続する。帯状の北側は１号墳南辺の周溝の直上

に位置し、谷状の斜面で集石状況が疎らであり周囲からの流れ込みによるものであろう。ここから南側は集石状況が密になり、計18ヶ所で埋納壙等を有する火葬墓として検出した。

Ｂ－２号墓は掌大の扁平な円礫、角礫が0.5～0.7mの範囲に密集している。下部遺構は確認されなかったが礫の密集中から火葬骨の細片が多数発見された。

Ｂ－３・４号墓は丘陵西側斜面に対して前後する。掌大の扁平な礫が密集する。礫の下位から火葬骨細片が多数出土したが、特にＢ－３号墓は５cm大の角礫に囲まれるような内に骨片が密集していた。

Ｂ－５号墓は上位に集石を持たず、径0.5m前後、深さ0.1mの円形の埋納壙が掘られ中から火葬骨細片が発見された。

Ｂ－６号墓はＢ－５号墓の斜面側に隣接し、上位に拳大の扁平な礫が集中していた。下部は径0.3～0.35m、深さ0.15mの楕円形の埋納壙が掘られる。集石間及び壙中から火葬骨細片が出土した。

Ｂ－７号墓はＢ－６号墓の西側に接する。上位に礫は認められなかったが下位に径0.3m、深さ0.15mの円形の埋納壙を有する。壙中に骨片は認められなかった。

Ｂ－８・９号墓はＢ－６・７号墓の南側に隣接する。掌大の扁平な礫が0.7m×0.4mの範囲に密集する。Ｂ－８号墓は径0.3m、深さ0.2mの円形、Ｂ－９号墓は0.57m×0.34m、深さ0.3m前後の隅丸方形の埋納壙が下部に掘られていた。いずれも集石間から壙中に火葬骨片が密集して出土した。Ｂ－９号墓は埋納壙下層から剣状の鉄製品が出土した。

Ｂ－10号墓はＢ－８・９号墓の南側に隣接する。検出作業当初はあまり礫の密集状況はこの地点では顕著でなかったが、下部遺構の有無を確認するため周囲の掘り下げを進めると、子供の拳大から掌大の扁平あるいは棒状の礫を重ね合わせるように用いて、埋納壙の壁面に貼ったような状況が検出された（図版９－４）。礫を貼った状況は深さ約0.2mの壙底まで及んでいた。壙中は炭混じりの暗茶褐色砂土に混じって火葬骨片が出土した。

Ｂ－11～13号墓はＢ－10号墓の南側に間隔を開けながら連続する。Ｂ－11号墓は掌大の扁平な礫を集石し、その下層に径0.3m、深さ0.6mの円形の埋納壙を掘る。壙中から火葬骨片が少量出土した。Ｂ－12号墓はＢ－11号墓の0.２m南隣にある。中央に掌大の扁平な角礫を置く。その下層に径0.25m、深さ0.15m程の円形の埋納壙を有する。壙中から火葬骨片が少量出土した。Ｂ－13号墓はＢ－12号墓の0.3m南西側に接する。拳大から掌大の扁平な礫がやや疎らに敷かれ、その下層に0.55m×0.35m、深さ0.1mの不整楕円形の埋納壙が掘られる。火葬骨片が少量出土した。

Ｂ－14～19号墓はＢ－11～13号墓の東側で斜面上位に位置し、ほぼ直線状に並ぶ。この間の集石状況は比較的密な状況で、上位の集石からは各墓の位置は掴みにくかった。拳大から掌大の扁平な礫を多用しているが、礫の密集状況が単独でありそうなのはＢ－19号墓のみである。Ｂ－14号墓は上位の礫の集石はあまり残っていない。0.55m×0.3m、深さ0.3mの楕円形の埋納壙が掘られる。壙中から火葬骨片が少量出土した。Ｂ－15～17号墓はB－14号墓の南に集石が連続し集石の下層に楕円形の埋納壙が連続して掘られていたが、新旧関係は掴みきれなかった。Ｂ－15・16・17号墓は

それぞれ深さ0.05m、0.2m、0.3mの埋納壙が掘られ、壙中から火葬骨片が少量出土した。B－19号墓はB－18号墓の南側0.7mに接する。拳大の比較的扁平な礫を密集させている。集石の下層は径0.2m、深さ0.27mの円形の埋納壙を有し壙中から火葬骨片が出土した。

中世墓地C群

１号墳墳丘１段目南東側コーナーから４号墳墳丘北西側付近にかけて、集石状遺構が表土下で確認された。帯状に南北に広がるB群のちょうど東奥側高位にほぼ帯状に広がる。その範囲は南北約13m、東西１～２m程である。群全体がB群のある西側斜面に向かって緩やかに下がる。埋没した４号墳北側周溝直上で（C－４・５号墓付近）、表土下約10～20cmで集石遺構が露出するような状況で、この辺りで標高50.10m前後を測る。B群と同様に集石状況は密であり埋納壙等の下部遺構が多く検出された。

C－１号墓（第５・27図）

C－１号墓は埋没した１号墳周溝南東側コーナー部の直上にあり、標高49.80m前後に築造される。前述のC群の帯状の配置から東へ約２m離れているが、尾根上の全体的な中世墓の配列から一応C群とした。C群の他の集石状況とはまったく単独で存在し、掌大から長さ20cm超までの円礫を主体とする。その下層に径0.3～0.35m、深さ0.15mの円形の埋納壙が掘られていた。壙中から火葬骨片が出土した。

C－２号墓（第５・28図）

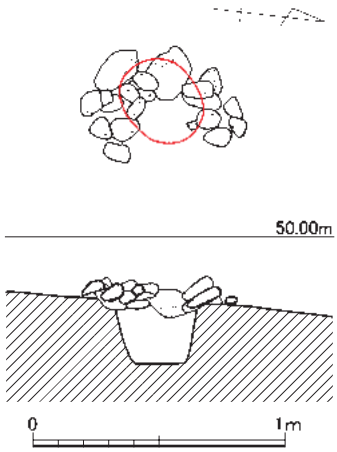
帯状の群の北端に位置し標高49.60m前後に築造される。他の集石状況での礫とは明らかに異なり、小でも0.1m四方、大は0.3m×0.6mの花崗岩の角礫を密集させている。各々の礫を規則的に組んだという形跡もなく、このうち２、３個は自重で沈み込んだような状態であった。集石の間から土師質土器数点ほか火葬骨片が出土したが、下層に埋納壙等の顕著な遺構は確認されなかった。

C－３～14号墓（図版９・10、第５・29図）

C－３号墓と以下のC－４～14号墓との間は約2.5mにわたって集石が疎らで、埋納壙等が確認されなかった空間が存在するが、C－２号墓も含めて両者間は帯状になる。C－３号墓は拳大から掌大の礫が１m×0.6mの間に密集し、その下層に径0.35～0.4m、深さ0.3mの楕円形の埋納壙が検出された。壙中から火葬骨片が出土した。C－４号墓は拳大前後の比較的扁平な角礫、円礫が径0.4m程の範囲に密に集石されていた。集石間から火葬骨片は出土したが下層に埋納壙等の掘り込みは確認されなかった。

C－５号墓はC－４号墓の南側0.7mに位置する。扁平な拳大ほどの角礫４個の集石からやや北にずれた下層に径0.3m、深さ0.15mの埋納壙が検出され、中から火葬骨片が少量出土した。C－６・７号墓はC－５号墓の南西側0.5mに位置する。集石状況は南東から北西にかけて拳大前後の角礫が密集しているが、南東側が約0.1m高く段になって礫が残っていた。C－６号墓はこの段の北側を掘り下げたところ、深さ0.1mで火葬骨片が集中して出土した。さらに掘り下げると径0.3m前後、深さ

0.45mの円形の埋納壙が検出された。Ｃ－７号墓はＣ－６号墓の西側で接する。Ｃ－６号墓に切られ、上部遺構の集石が撹乱され沈み込んだために前述の集石間の段差が生じたと考えられる。集石下層に径0.3m前後、深さ0.3mの円形の埋納壙が掘り込まれているが火葬骨片は出土しなかった。Ｃ－８号墓はＣ－６号墓のすぐ南隣にある。拳大以下の扁平な角礫は、やや疎らであまり密集しない。下層から径0.22～0.3m、深さ約0.3mの楕円形の埋納壙が検出された。壙中から火葬骨片が少量出土した。Ｃ－９号墓はＣ－８号墓の西側0.5mに位置し、拳大から掌大の礫が集中する。下層に径0.35m、深さ0.5mの不整円形の埋納壙が確認された。壙中から火葬骨片が出土した。Ｃ－10号墓はＣ－９号墓の南側0.4mに位置する。Ｃ－９号墓周辺の密な集石状況が消え、集石は疎らである。下層に径0.3m前後、深さ0.4mの埋納壙が掘られ中から火葬骨片が出土した。Ｃ－11・12号墓はＣ－10号墓の南側に接する。上位の集石は拳大から掌大の角礫で疎らである。いずれも径0.3m前後、深さ0.3～0.4mの楕円形の埋納壙が検出された。壙中から火葬骨片が出土した。Ｃ－12号墓のすぐ南側に0.35m×0.1m、厚さ0.2m程の花崗岩製の角礫が横たわる。12号墓埋納壙とのズレ、周囲の集石状況からは墓石とは俄に判断し難い。Ｃ－13・14号墓はＣ－12号墓の南側約１mに位置する。Ｃ－12号墓南側に横たわる角礫から南側は南北1.5m、東西0.7mの範囲に拳大から掌大の扁平な礫が密集する。Ｃ－13号墓は径0.35m、深さ0.3m、Ｃ－14号墓は径0.3m、深さ0.34mの円形の埋納壙が掘られる。壙中から火葬骨片が出土した。Ｃ－14号墓はやや南にずれるが、集石に混じって高さ0.35m、幅0.37m、厚さ0.18mの花崗岩製の自然石が樹立する。自然石立石の墓標と考えられる。

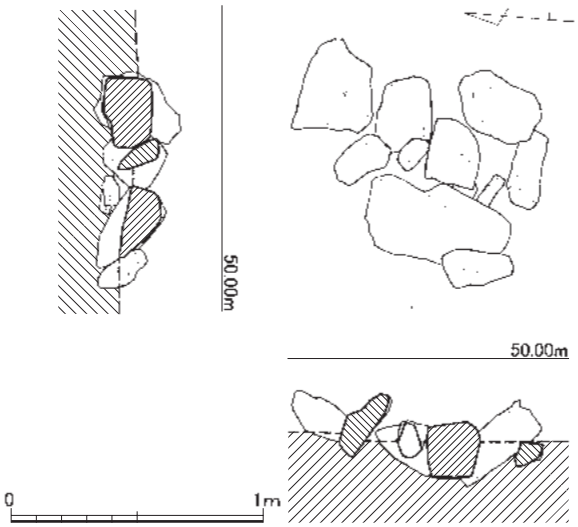


第27図　Ｃ－１号墓実測図（1/30）

中世墓地Ｄ群

Ｄ群は１次調査及び２次調査で発掘調査を行った丘陵から、斜面を北西側に下りた丘陵裾部斜面上に広がる一群である。

尾根線上の古墳墳丘を中心に展開する、Ａ～Ｃ群とは上部構造である集石遺構の築造の状況が明らかに違う。ひとつは、Ａ～Ｃ群と比べると造墓された周囲の斜面の傾斜が急なため、集石の背後をカットして平坦地をそこそこで設けていることである。さらに集石の周囲に縁石を巡らして個々の墓地の単位が比較的明瞭に区別されていることである。また、この中に複数の埋納壙が掘り込まれている。



第28図　Ｃ－２号墓実測図（1/30）

１次調査は丘陵上の２号墳北側直下の丘陵裾部斜面の３ヶ所の集石遺構で、７基の埋納壙のほか方形周溝遺構を確認した。標高37.50～39.50mに位置する。２次調査は１次調査地の北西側に連続する斜面を調査し計９ヶ所の集石遺構を確認した。丘陵裾部は調査前に雑木林が形成されており、椎ほかの大型の樹木によってかなり撹乱を受けており残り具合は悪かった。表土下で確認した礫の集積状況も現位置を保っているのか否かの判断がつき難かった。

Ｄ・ａ－１号墓（図版11－４、第５・30～32図）

１次調査地の東側斜面に単独で確認された。標高は38.50mを測る。周囲を含めて撹乱が著しい。人頭大以上の比較的大型の角礫を縁石として方形に囲むように配置している状況に見えるが、その内部に礫は無かった。後世の破壊を受け、斜面下位に流失したとも考えられるが判然としない。縁石状の礫は周囲の斜面を削り込んだ平坦面上に構築されている。礫の周囲からわずかに火葬骨片が発見された。

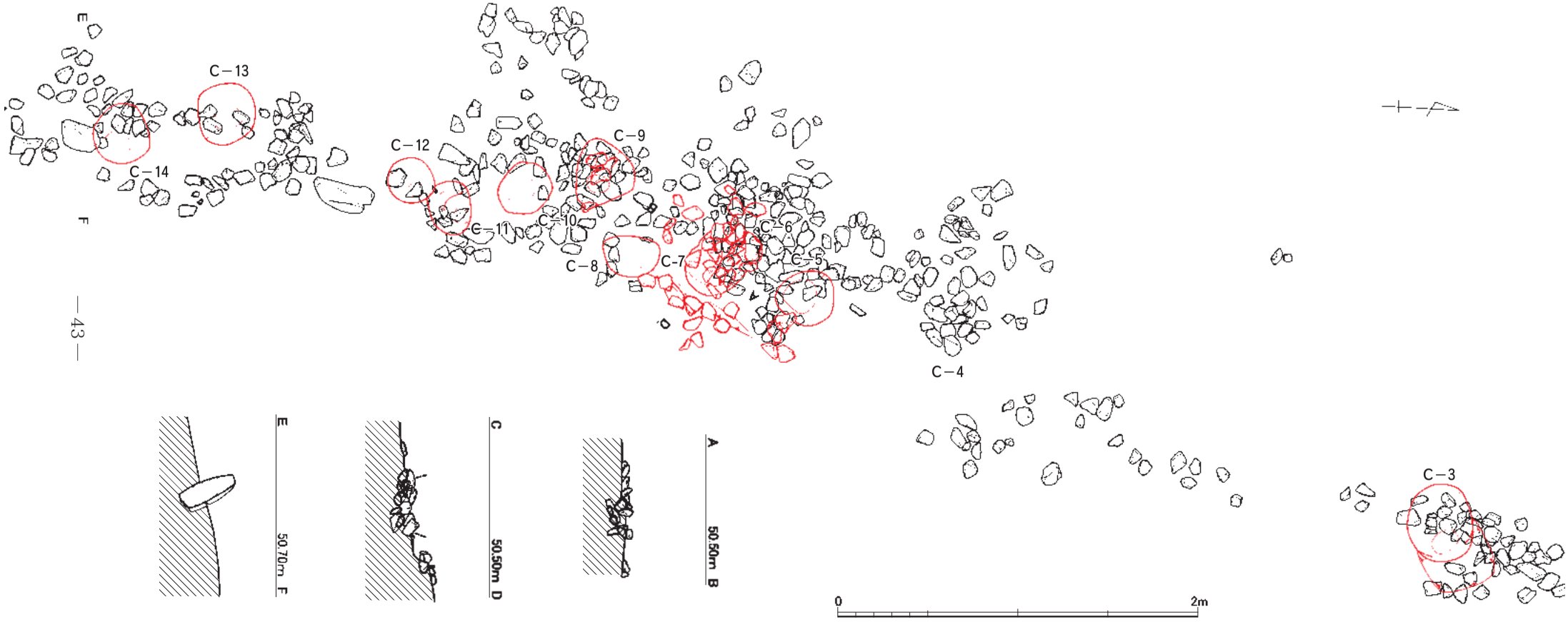
Ｄ・ｂ－１号墓（図版11－1、第５・30・31・33図）

１次調査地南西側斜面上方で確認された。標高40.00m前後を測る。北側の斜面下方は土砂が流出し失われている。人頭大の礫が４個囲むように配置されているが、小型の集石は流失したのであろうか、残っていない。南側斜面上位を大きく削り込んで平坦面を形成している。礫の北側で火葬骨片をわずかに検出した。

Ｄ・ｃ－１～５号墓（図版11、第５・30・31・34図）

１次調査地西側斜面で確認された。斜面の等高線に沿って東西11m以上、南北の奥行き２mの範囲を斜面上方から削り込んで、テラス状の平坦面を形成して墓地を造っている。全体に後世の撹乱が入るが、なかでも東半分程は斜面下方側から撹乱されて破壊が著しい。

Ｄ・ｃ－１～４号墓は集石がほぼ連続しているが、部分的に人頭大前後の角礫が縁石として残っている。１号墓は集石遺構の東側から北側が流失している。南辺から西辺は１辺0.2～0.4m前後、厚さ0.1m前後の角礫を縁石として方形に囲み、その内部に拳大の礫を集積している。集石中から火葬骨片が出土した。２・３号墓は集石がかなり流出しているが、２号墓埋納壙西側の１辺0.15～0.2mの角礫２個が縁石と思われる。３号墓は埋納壙南西側の１辺0.3m大の角礫が縁石として残っている。２号墓は径0.3～0.35m、深さ0.1mの埋納壙を集石下に設ける。壙中から火葬骨片が出土した。また集石中からも火葬骨片が出土した。３号墓は径0.26～0.34m、深さ0.2mの楕円形の埋納壙が集石下に掘られ、中から火葬骨片が出土した。４号墓は３号墓西側に縁石を介して隣接する。集石の南西側に１辺0.18～0.26mの角礫が２個置かれている辺りがコーナーであろう。４号墓は下層に埋納壙は無かったが、集石中の２ヶ所で火葬骨片が集中して出土した。５号墓は４号墓の南西側約１mにある。集石された平坦面が１～４号墓から一段上がる。縁石状の大型の角礫は無く、拳大の礫がやや疎らに集積する。集石下位に埋納壙は無かった。集石中から火葬骨片が出土した。



第29図　C－3～14号墓実測図（1/30）

方形周溝遺構（図版11、第５・30・34図）

Ｄ・ｃ－１号墓集石を除去し周囲を精査したところ、さらに下層に溝状遺構の一部が確認された。溝は大きく失われた１号墓集石の真下にコーナーを有し、東に約３m延び、もう一方のコーナーをつくり、そこから北に延びる。斜面下位側は撹乱をうけ失われているので、主体部の有無は不明である。残存する周溝の規模は１辺約３m、溝幅約0.6～0.9m、深さ約0.1～0.3mを測る。出土遺物は無かった。

Ｄ・ｄ－１・２号墓（図版13、第５・30・31・35図）

２次調査区の南端の標高39.50m前後に位置する。北西向きの斜面を上位からカットして、長さ1.1m以上、奥行き約0.7mの平坦面を造成して墓域を造っている。テラス状の平坦面の北東側の短辺は撹乱によって失われている。拳大前後の礫を集積するが、わずかに左右に分かれて密集する。集石の周囲を囲む縁石は無い。向かって左手のＤ・ｄ－１号墓は集石下に径約0.43m、深さ約0.35mの円形の埋納壙が掘り込まれ、壙中から火葬骨片が少量出土した。Ｄ・ｄ－２号墓は集石のやや奥側に幅約0.16m、厚さ約0.09m、高さ約0.27mの花崗岩の板状礫が樹立して残っていた。墓標と考えられる。その下位に径0.34m前後、深さ約0.28mの円形の埋納壙が掘られる。暗黄褐色土中から炭粒及び火葬骨片が出土した。また、墓域内から土師質土器の小皿小片が出土した。

Ｄ・ｅ－１・２号墓（図版11－３、第５・30・31・36図）

２次調査区南側の北西向き斜面上方に位置し標高40.25m前後を測る。墓域構築に当たっての明らかな平坦面の造成はない。緩斜面上にやや疎らな集石が見られる。１・２号墓とも拳大前後の礫の下位に埋納壙を有する。Ｄ・ｅ－１号墓は径0.3m前後、深さ約0.2m、Ｄ・ｅ－２号墓は径0.3～0.4m、深さ約0.2mを測る。壙中から火葬骨片が出土した。また、集石に混じって土師質土器の坏が出土した。

Ｄ・ｆ－１～９号墓（図版12－２、第５・30・31・37図）

２次調査区南側の斜面中位に位置し標高38.55m前後を測る。比較的緩斜面の周囲に等高線に沿って横約11m、奥行き５mに集石遺構が残る。計９ヶ所を墓とした。Ｄ・ｆ－１～８号墓は掌大以上の比較的大型の礫を多用して下部の埋納壙も近接する。これに対してＤ・ｆ－９号墓の集石は拳大以下の小ぶりの礫を多用している。埋納壙は径0.25～0.3m、深さ0.1～0.2mの円形を呈する。壙中から火葬骨片が出土した。Ｄ・ｆ－４・８・９号墓は集石下に火葬骨片が集中して出土するが、埋納壙はなかった。Ｄ・ｆ－７号墓は集石下にさらに拳大の比較的扁平な礫を組み合わせて内径約0.1m、深さ0.12mの穴を設け火葬骨片を納めていた。Ｄ・ｆ－５号墓中から土師質土器小皿片、須恵質土器片が出土した。

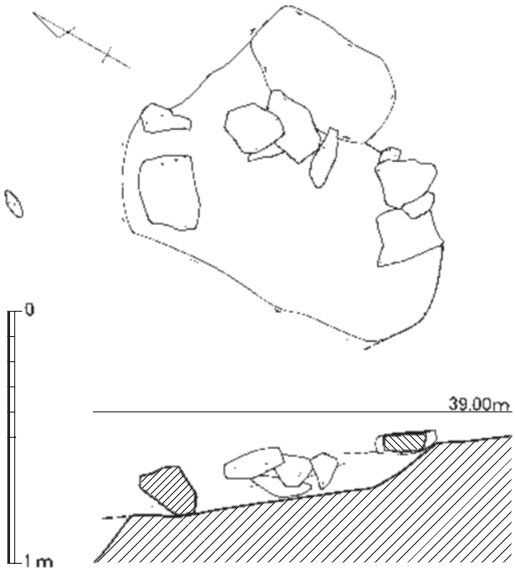
Ｄ・ｇ－１・２号墓（図版12－２、第５・30・31・38図）

２次調査区南側斜面下方に位置し標高38.00m前後を測る。Ｄ・ｆ－１～９号墓から北西側に見下ろす位置に構築される。斜面下位側は後世の掘削及び木の根によって流失している。斜面上位側は残りが良く、ほぼ平坦な緩やかな斜面上に長さ0.25～0.4m、幅0.1～0.2m、厚さ0.15m前後の礫を縁石として４個並べ、その内側に炭混じりの暗褐色土を充填し、さらにその上に拳大前後の礫を集積

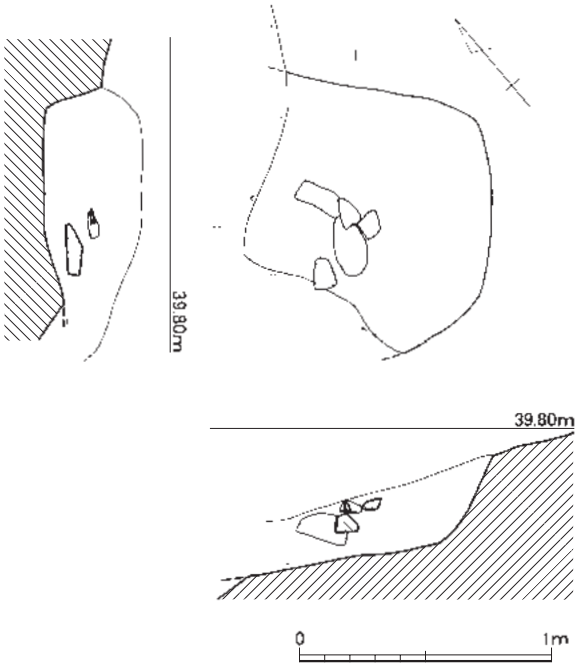
している。集石下層に２基の埋納壙を確認した。Ｄ・ｇ－１号墓は径0.3m前後、深さ0.2mの円形の壙中から火葬骨片が出土した。また、壙の壁面の一部に扁平な礫を貼るように組んでいた。Ｄ・ｇ－２号墓は径0.25m前後、深さ0.1mの円形の壙中から火葬骨片が出土した。

Ｄ・ｈ－１～４号墓（図版12－２～４、第５・30・31・39図）

２次調査区南側斜面下方に位置し標高37.90mを測る。Ｄ・ｇ－１・２号墓のすぐ南西側に隣接する。斜面下位側は後世の掘削に周囲を木の根に撹乱されている。拳大前後の礫が密に集積され、その南辺及び西辺、それと南辺の東端をコーナーにして直交方向に、長さ0.25m前後の礫を縁石として「コ」の字形に並べている。墓域の構築は緩斜面の上位を掘削し平坦面を確保し、縁石で石囲みをした内部に暗赤褐色土を充填し、上面に拳大前後の礫を集積している。残存する「コ」の字形の石囲み内部には、Ｄ・ｈ－１～３号墓の埋納壙がほぼ等間隔で並列して掘り込まれている。壙中から火葬骨片が出土した。Ｄ・ｈ－４号墓は石囲み東辺の外側に連続する集石下に径0.4m前後、深さ約0.3mの円形の埋納壙を掘り込んでいる。壙中から火葬骨片が出土したが、これに拳大の礫が多数混じる。この他に石囲み内部の集石中から土師質土器小皿の小片が出土した。



第32図　Ｄ・ａ－１号墓実測図（1/30）



第33図　Ｄ・ｂ－１号墓実測図（1/30）

Ｄ・ｉ－１号墓（図版12－1、第５・30・31・40図）

Ｄ・ｈ－１～４号墓の南側斜面上位に位置し標高38.25m前後を測る。丘陵裾部の斜面が北東側から南西側にむけて緩やかに変換する位置で、斜面下方に向かって大きく緩やかに張り出しており、ごくわずかに丘状に高まる。このわずかな高まりに、約１m四方の範囲に１辺0.2～0.3m大の礫を集積している。礫間で火葬骨片が少量出土した。

Ｄ・ｊ－１～９号墓（図版13－１、第５・30・31・41図）

Ｄ・ｉ－１号墓から南側の丘陵斜面は西向きに下りる傾斜面に変わり、調査区斜面の上位から下位

まで広く集石が認められた。木の根や後世の掘削による撹乱が全体に見られ、集石や縁石の残存状況が良くないが、斜面の等高線にほぼ沿った集石の列が３乃至４段確認されるだろう。明確に集石下に埋納壙等を有する墓を計９基確認できた。

Ｄ・ｊ－１号墓は拳大の扁平な角礫を0.4m四方に集積し、その下位に径0.3m、深さ0.2m程の埋納壙を掘り、その壁面に扁平な礫を貼っている。壙中から火葬骨片が出土した。Ｄ・ｊ－２～７号墓は長さ５m、奥行き１mの列状の集石の下位に各々の埋納壙がほぼ直列に並んで掘り込まれている。Ｄ・ｊ－４号墓は集石下位に径0.3～0.4m、深さ0.15mの楕円形の埋納壙が掘られ、中から火葬骨片とともに鉄製短刀が出土した。Ｄ・ｊ－１号墓とＤ・ｊ－２～７号墓は集石の途中に木の根による撹乱によって分断されているが、本来は同じ集石の列であろう。標高は39.00～39.20mを測る。Ｄ・ｊ－８号墓はＤ・ｊ－１～７号墓の集石列の西側斜面下位に位置する。標高38.70m前後を測る。約0.5m四方に拳大前後の礫の集石がとくに密集しており、集石下位から火葬骨片がまとまって出土した。埋納壙は確認されなかった。Ｄ・ｊ－９号墓は集石列を斜面下位の南東側約2.3mにあり、標高38.20m前後を測る。全体に撹乱され周囲に集石が散逸しているが、斜面上位側に長さ0.3m前後、幅0.2m前後、厚さ0.1m程の礫３個が縁石として残存する。縁石列の内側の集石がかなり流れ出ているが、下位を深さ0.4m程掘り下げると底面からまとまって火葬骨片が出土した。明確な壁面は確認できなかったが径0.35m前後の埋納壙があったと推定される。

Ｄ・ｋ－１号墓（図版11－３、第５・30・31・42図）

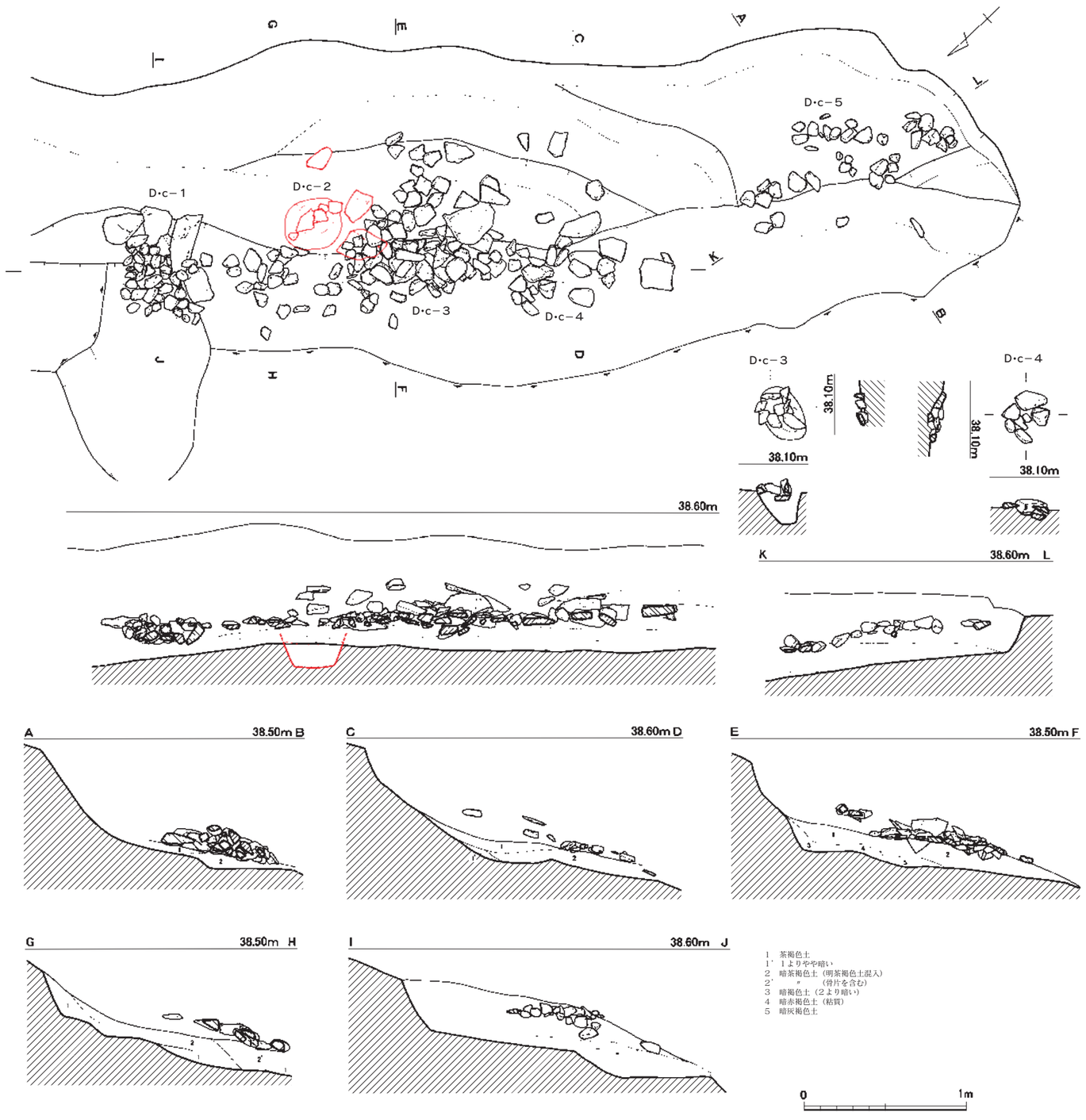
Ｄ・ｊ－９号墓の斜面上位南東側3.5mに位置し標高38.60m前後を測る。斜面下位側の集石前面のほぼ中央を木の根によって撹乱されている。集石は横1.7m、奥行き0.6mの範囲に残る。斜面上位側を掘削してテラス状の平坦面を確保し、明茶褐色土を充填した上に集石を敷いて墓を構築していると推定される。南側集石の中心に幅0.25m前後、厚さ約0.17m、高さ約0.3mの花崗岩の自然石が墓標として樹立していた。立石下に径0.35～0.4m、深さ約0.22mの埋納壙が掘り込まれている。壙中から炭に混じって火葬骨片が出土した。

中世墓地Ｅ群

墓地Ｄ群から丘陵斜面上方の南側約20mに位置する。他の墓地群から隔絶した位置に単独で墓地が営まれており、丘陵上の墓地Ａ～Ｃ群からも斜面を西側約20m降りた位置にある。標高は44.60m前後を測る。

Ｅ－１号墓（図版13－2、第５・30・31・43図）

北西向きの緩やかな斜面上の平坦地に、0.5m四方の範囲に拳大から掌大以上の角礫が密集している。集石のほぼ中央に破面のやや新しい約10cm四方の方柱状の花崗岩礫が露出していた。周囲の集石を慎重に取り除いていくと、方柱状の礫の根元まで集石が詰まっていた。残存高0.23mの自然石立石の墓標と考えられる。集石間に火葬骨片が認められた。埋納壙の規模は径0.5m前後、深さ約0.2mの円形である。



第34図　D・c－1～5号火葬墓実測図（1/30）

３．その他の遺構

１号土壙（図版７－２、第６・44図）

４号墳周溝北西隅の西側外の緩斜面にある。標高は約49.50mを測る。主軸はN－17.5°－Wをとる。掘り方プランは主軸長1.82m、最大幅0.84mの不整楕円形である。深さ0.1～0.15mで２段を掘削し底面に達する。底面の規模は主軸長1.46m、最大幅0.2m、深さ0.17mで整った隅丸長方形を呈する。底面の南側約2/5は北側底面から約５cm段が付いて下がる。

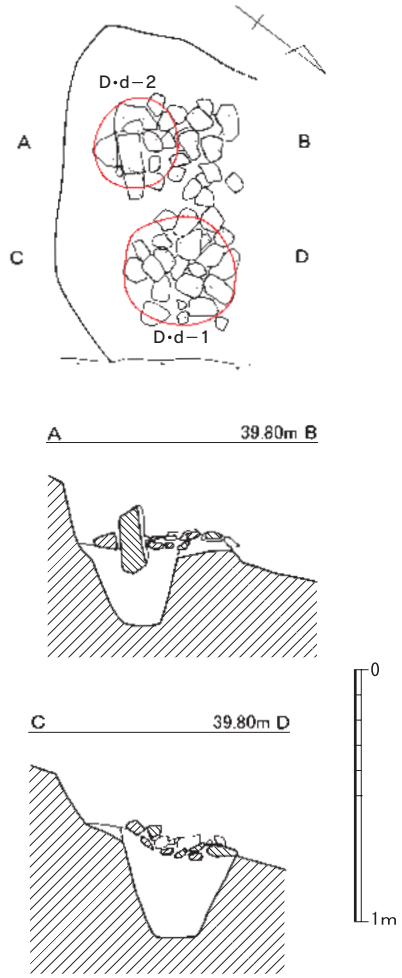
２段目掘り方の形状から墓壙の可能性もあるが確証はない。出土遺物は無かった。

２号土壙（第６・45図）

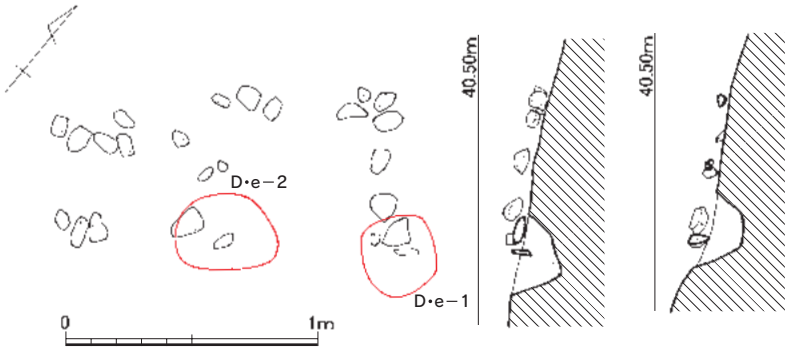
４号墳南西隅の周溝の外側を切っている。標高は49.10m前後を測る。主軸はN－28.2°－Eをとる。掘り方プランは主軸長1.1m以上、最大幅0.9mを測る整った隅丸長方形である。底面に向かってほぼ垂直に掘り込んでおり、約0.7mの深さで底面に達する。底面は主軸長1.4m、最大幅0.74mを測り平坦である。出土遺物は無かった。

２号土壙墓（図版７－４、第６・46図）

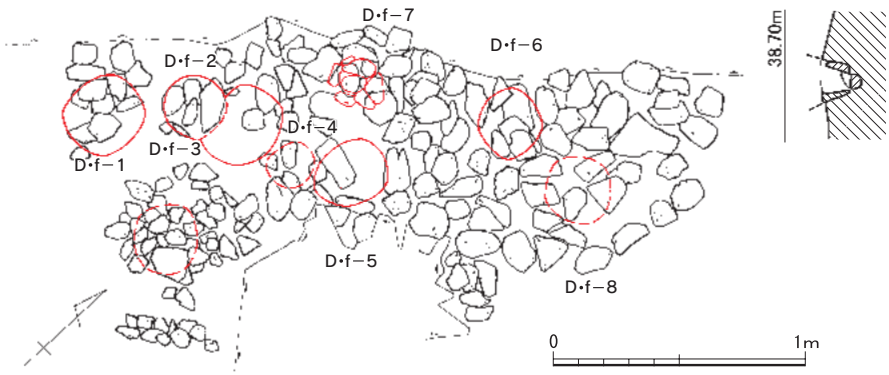
１号墳と２号墳の接する空閑地に位置し標高は48.10m前後を測る。やや整わないが掘り方上面プランは隅丸長方形を呈する。主軸長1.82m、東側幅約0.44m、西側幅0.28m、深さ約0.2mを測る。主軸方向はほぼ東西に沿うN－88.6°－Eである。横断面の土層観察からすると木棺墓であろう。床面は平坦であり掘り方幅の広い東側小口が頭位であろう。出土遺物は無かった。



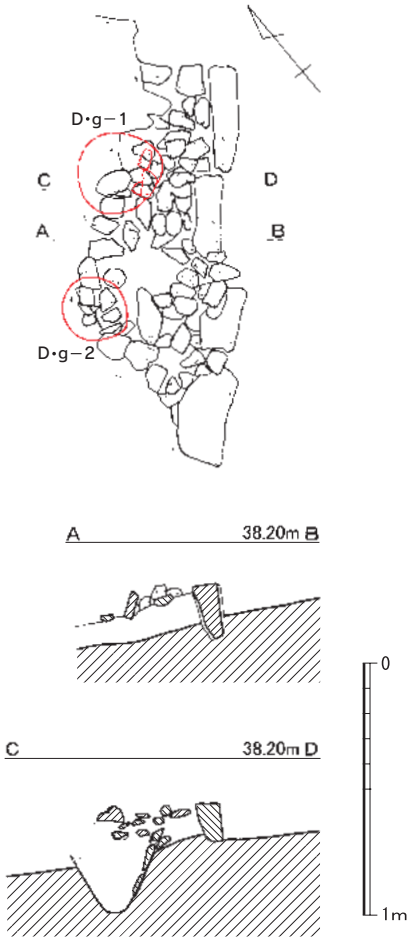
第35図　Ｄ・ｄ－１・２号墓実測図（1/30）



第36図　Ｄ・ｅ－１・２号墓実測図（1/30）

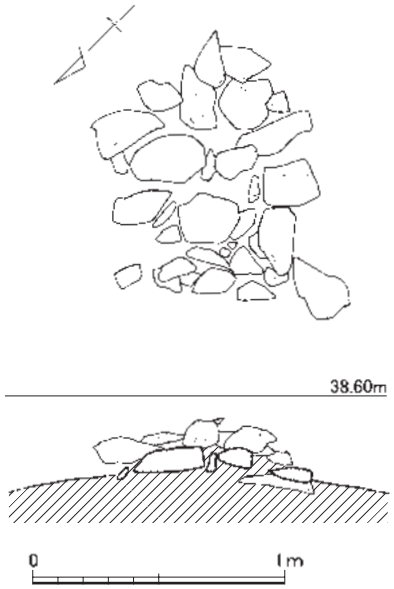


第37図　D・f－1～9号墓実測図（1/30）

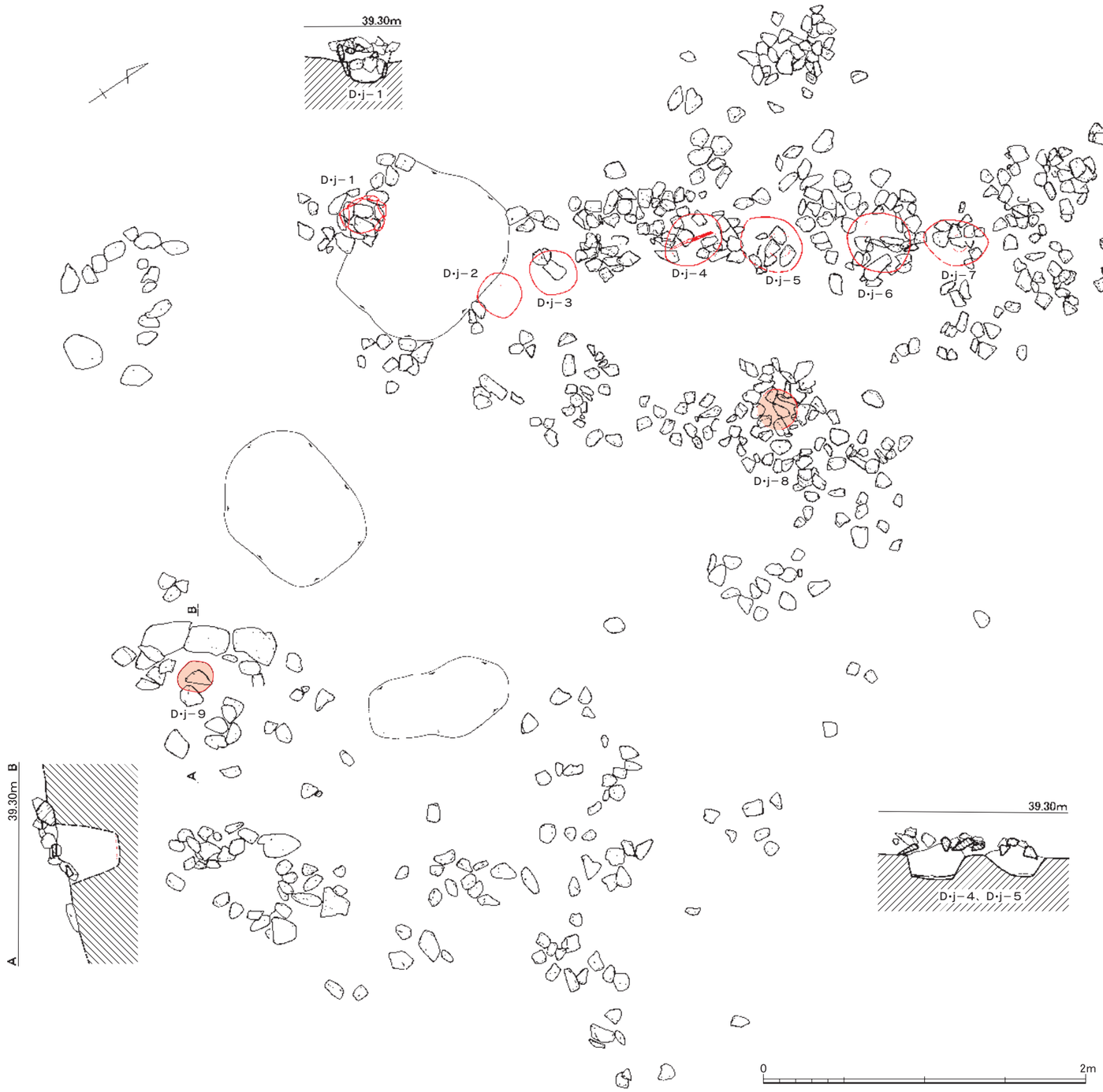


第38図　D・g－1・2号墓実測図（1/30）

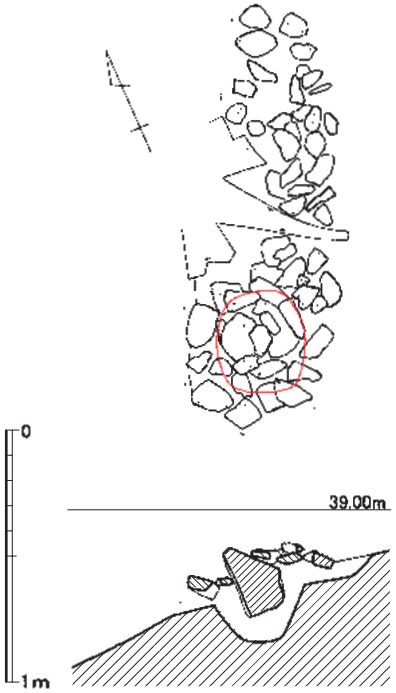
第39図　D・h－1～4号墓実測図（1/30）



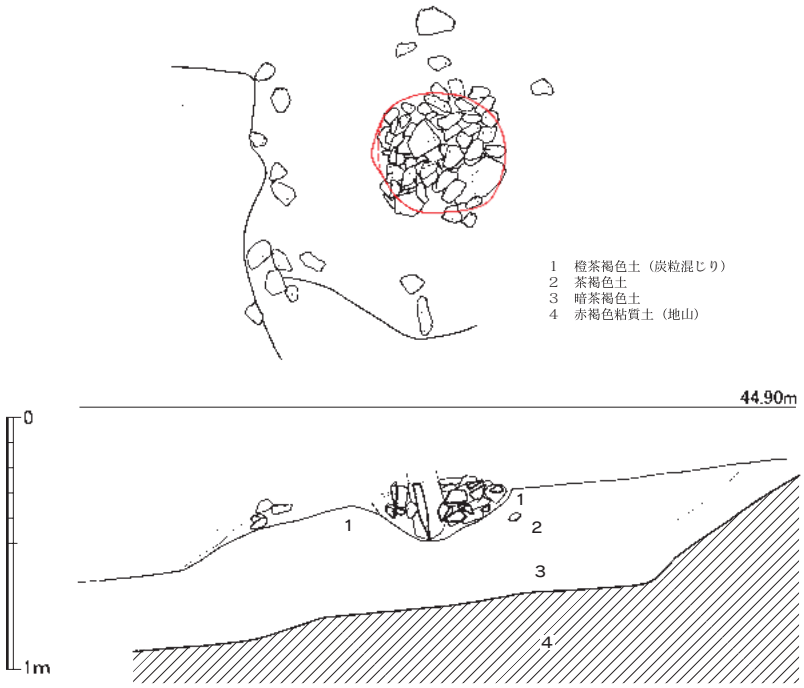
第40図　D・i－1号墓実測図(1/30)



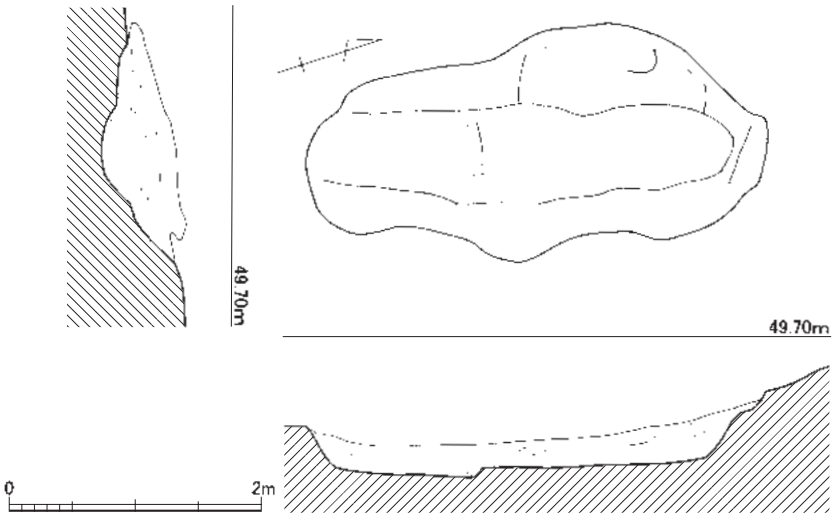
第41図　D・ｊ－１～９号火葬墓実測図（1/30）



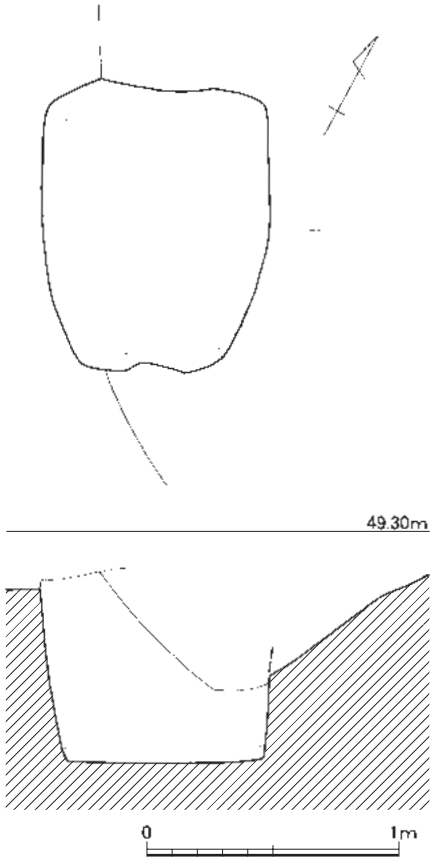
第42図　D・k－１号墓実測図(1/30)



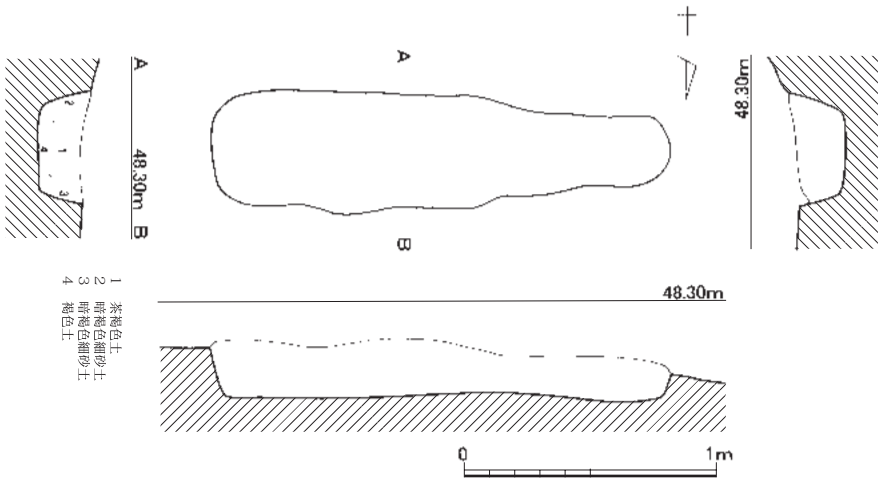
第43図　Ｅ－１号墓実測図（1/30）



第44図　１号土壙実測図（1/60）



第45図　２号土壙実測図（1/30）



第46図　２号土壙墓実測図（1/30）

Ⅴ 遺　物

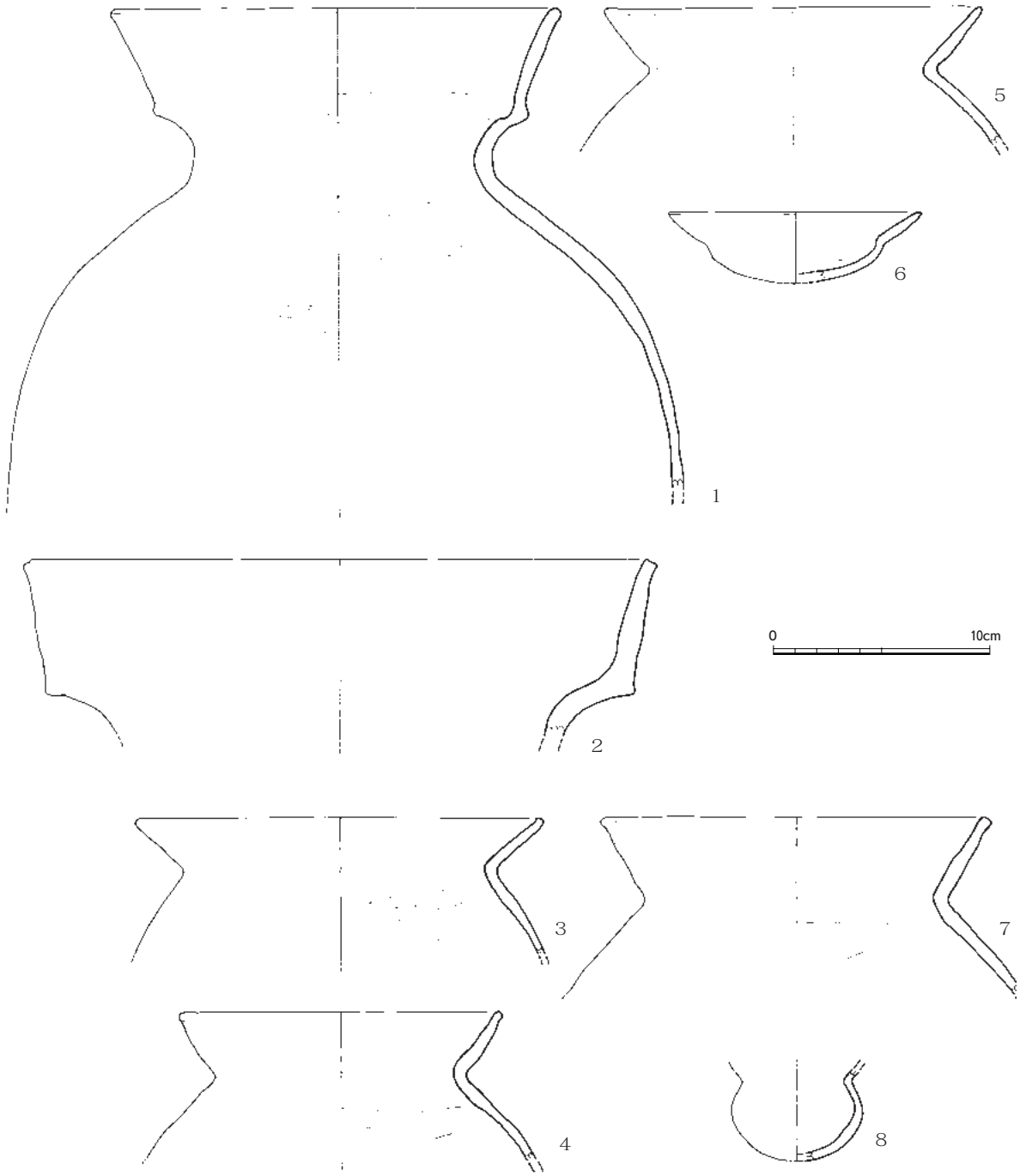
1．古墳時代の遺物

土師器（図版14・15、第48～51図）

１～６は１号墳出土の古式土師器である。１・２は二重口縁壺。１は復元口径20.7cm。胴部から頸部にかけて丸く大きく内傾し、頸部は短く急に外反し、わずかに凸状に張り出す。二次口縁は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部は外側がわずかにつまみ出す。体部最大径付近が図示した下端部であろうから体部は卵形になるだろう。調整は体部外面はヨコ、タテ、斜め方向のハケ目調整を行い、その上に波状文風の沈線を施すがほぼ直線状である。内面の調整は、頸部下付近はナデ調整で、それより下位はヨコ方向のヘラケズリを行う。胎土は細砂粒及び赤色砂粒を多く含む。焼成は普通で黄灰色を呈する。２は頸部から上の破片資料。復元口径は29.2cm。頸部から大きく外反し、二次口縁の基部は口縁部に向かって垂直に屈曲する。わずかに外反しながら立ち上がり、口縁端部外側はごくわずかつまみ出して角張る。内外面ともハケ目調整後ヨコナデ調整を施す。胎土は１㎜以下の細砂粒を含む。焼成は普通で黄橙色を呈する。３～５は甕。３は口頸部破片資料で復元口径は18.8cm。ほぼ直線的に外反する口縁で端部は外傾して面をなす。内外面とも磨滅しているが、体部内面の調整は頸部屈曲部下はナデ調整で、それより下部は斜め方向のヘラケズリを施し器壁は薄くなっている。胎土は砂粒をやや含む。焼成はやや不良で橙黄色を呈する。４は口縁部から体部上半の資料で体部最大径までは残っていない。口径14.8cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は全体に丸く外横方向にわずかにつまむ。調整は口縁部外面及び口縁部内面から頸部屈曲部下までヨコナデ調整。体部内面は強いヘラケズリ調整である。胎土は細砂粒をわずかに含む。焼成は普通で黄灰色を呈する。５は口縁部から体部上位の破片資料。復元口径は17.3cm。口縁部は直線的に外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面とも磨滅して不明である。胎土は粗砂粒を含む。焼成は普通で橙黄色を呈する。６は小形の鉢の破片資料。復元口径は11.6cmである。丸く緩やかな体部は器高のほぼ中位で大きく外反して口縁部に続く。器表面の磨滅が著しいが、内外面ともヨコ方向のミガキ調整が施されている。胎土は精製されており砂粒をほとんど含まない。焼成は普通で淡黄色を呈する。外面の一部がわずかに赤くなっており赤色顔料の痕跡とみられる。

７は４号墳出土の古式土師器の甕の破片である。復元口径は16.0cm。口縁部は直線的に外反して立ち上がる。口縁端部は外傾して面をなし、わずかに横につまみ出し角張る。調整は体部外面は磨滅して調整不明。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で頸部屈曲部下までおよぶ。体部内面は磨滅しているがヘラケズリの痕跡がわずかに残る。胎土は砂粒をわずかに含む。焼成は普通で黄灰色を呈する。外面の一部に黒斑が観察される。

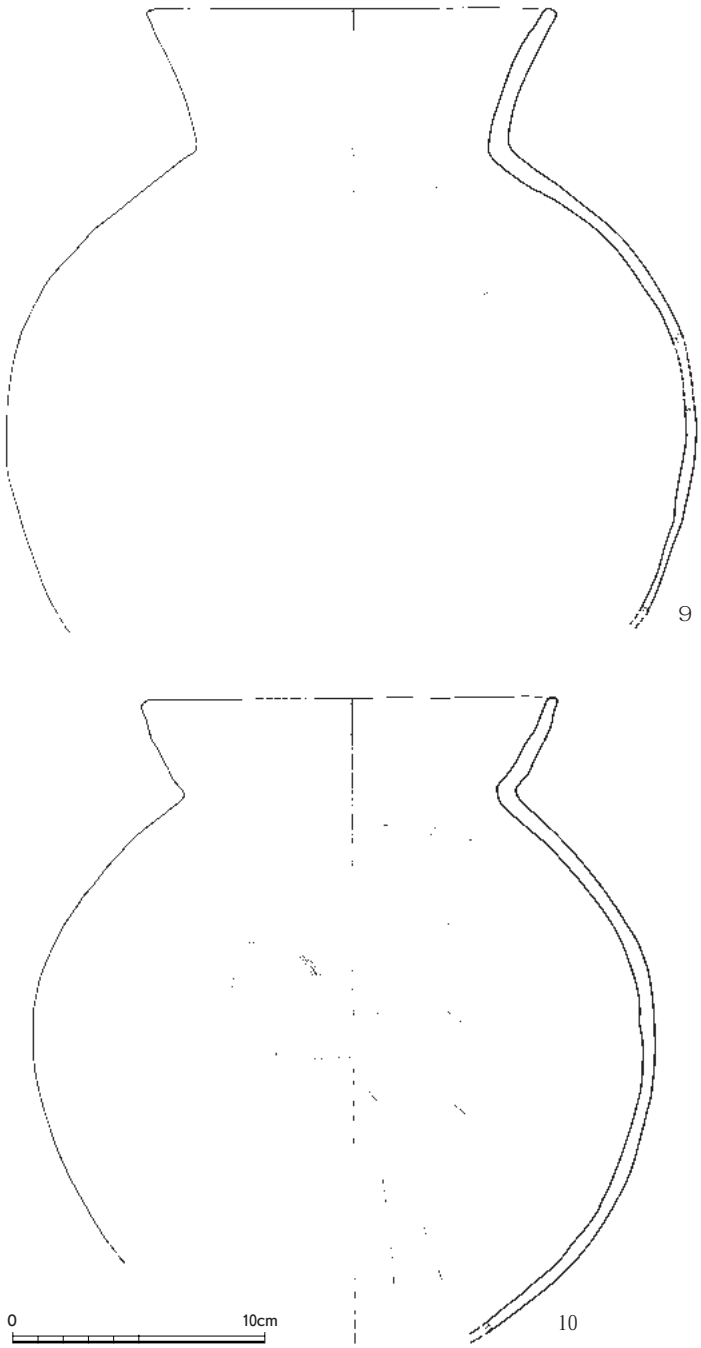
８は古式土師器の小型丸底壺の破片資料で口縁部を失う。頸部径は復元で約５cm。内外面とも磨滅が著しく調整技法は不明である。内底部付近にわずかに赤色顔料が付着する。胎土は径１～４㎜の



第47図　出土土師器実測図①（1/3）

砂粒を含む。焼成は良好で橙褐色を呈する。

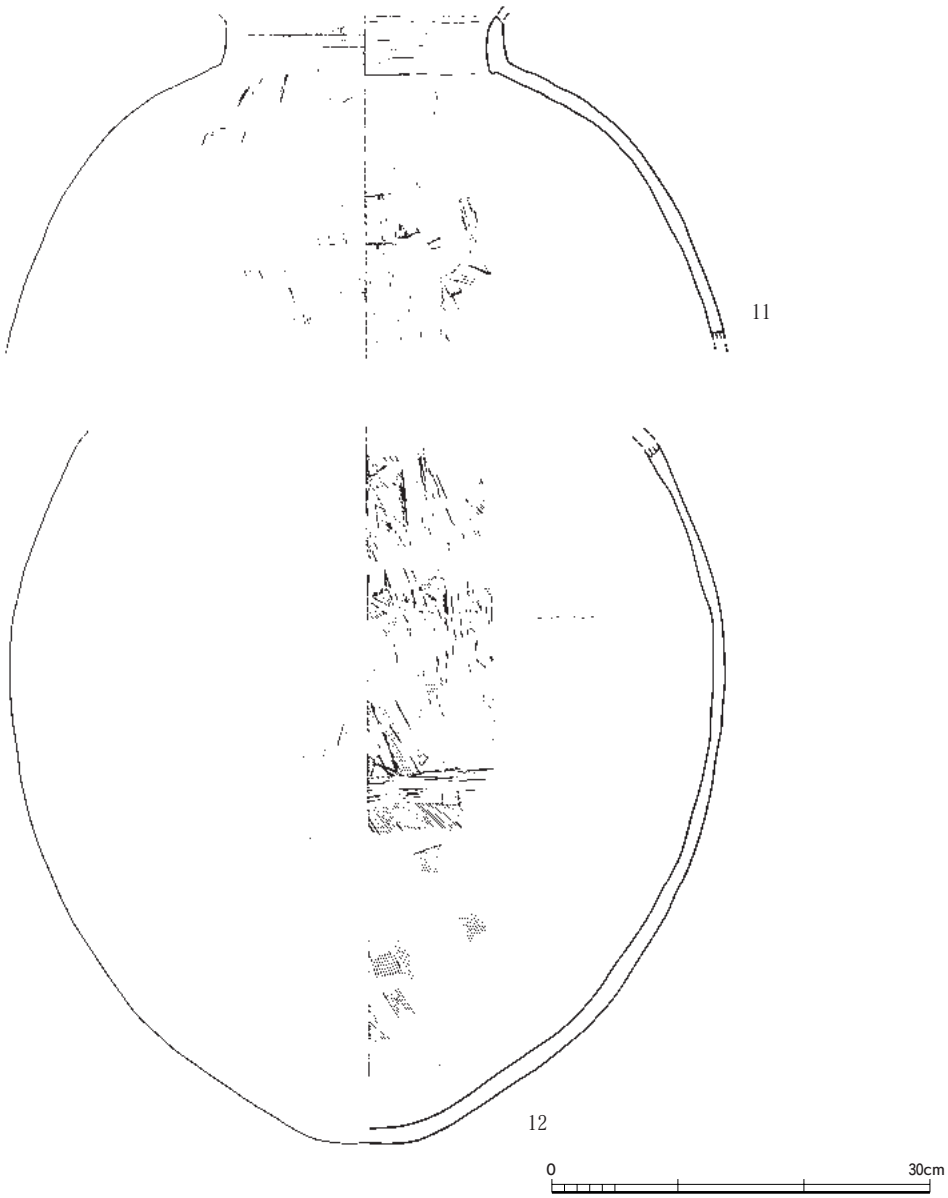
９、10は４号墳周溝中から出土した古式土師器。９は広口壺上半部の破片資料。口縁部径は16.2cm、頸部径は12.3cm、胴部最大径は復元で27.2cm。口縁部径と比較して胴部最大径が大きい。体部上半は接合しなかったが図上で合成し復元した。球形に近い体部は最大径が上位にある。口縁部はわずかに外湾しながら立ち上がる。口縁端部は内外とも少し角張る。全体に磨滅が著しい。体部外面にわずかにハケ目が残る。体部内面は頸部下にヘラケズリが認められ器壁は薄くなっている。外面に赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。胎土は細砂粒と径２～４㎜の赤色粒を多く含む。焼成は良好で



第48図　出土土師器実測図②（1/3）

淡黄色を呈する。外面に黒斑がみられる。10は甕で底部付近と口縁部の一部を欠く。復元口径16.4cm、胴部最大径24.5cm。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部に向かって細くなり、端部は角が残る。調整は体部外面はハケ目を施し、肩部にヘラ沈線による波状文が巡る。口縁部は内外面とも屈曲部直下までヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施す。胎土は径１㎜前後の細砂粒を含む。焼成は普通で淡黄灰色を呈する。外面の一部に黒斑がみられる。また、同資料は内面に夥しく赤色顔料が付着し、破砕面および外面にも付着が及んでいる。こういう状況から、古墳周溝内に破棄された際に土器内に赤色顔料を入れていたものと考えられる。

11～14は土師器の壺棺で11～12は１号壺棺墓の上・下棺。11は頸部復元径18.8cmの大型の二重口縁壺上半部破片。口縁部下で打ち欠いている。球形の胴部上半は大きく内傾し頸部はほぼ直立する。調整技法は内外面ともハケ目を施す。胎土は粗砂粒及び黒色粒を含む。焼成は良好で内面は赤褐色、外面は黄褐色を呈する。外面の一部に黒斑がみられる。12は胴部最大復元径56.3cm、残存高55.6cm以上の大型の壺。卵形の胴部に、肩部はあまり張らず底部はわずかに凸レンズ状の名残がある。調整は内外面ともハケ目を行う。胎土は径0.5～２㎜の砂粒を含む。焼成は良好で橙褐色を呈する。外面の一部に黒斑が観察される。13～14は２号壺棺墓出土の二重口縁壺の破片。13は復元口径25.4cmを測る。直線的に内傾する口縁屈曲部上位の破片で、調整は外面はナデ調整内面はヨコ方向乃至斜め方向のハケ目調整を施す。14は胴部下半から底部にかけての約1/4の破片。卵形の胴部にわずかに凸レンズ状の底部が続く。内外面ともヨコ乃至斜め方向のハケ目調整を施す。13、14は胎土焼成とも酷似しており同一個体と考えら



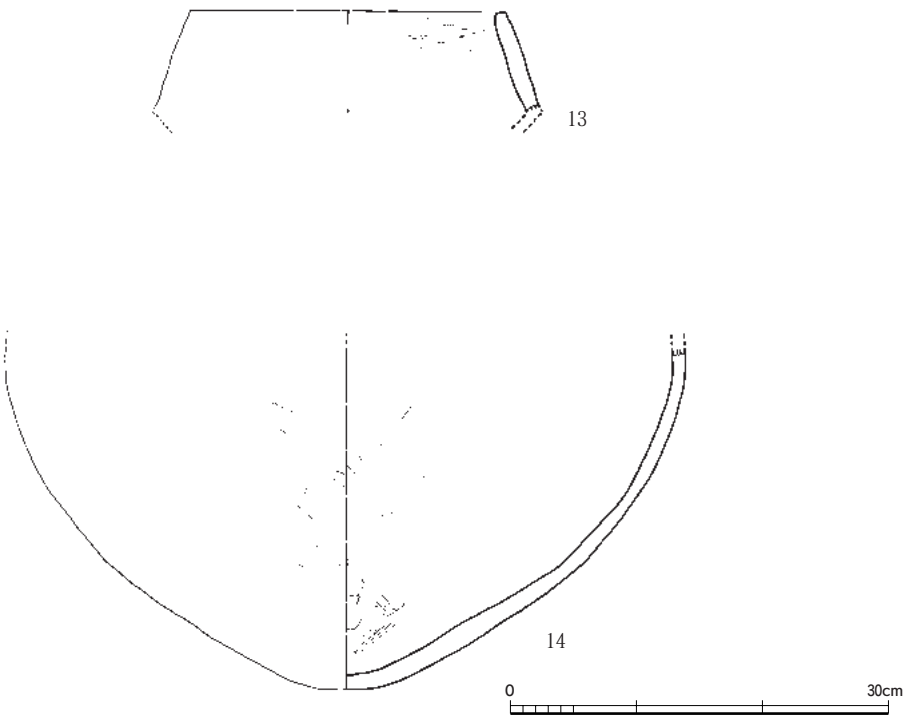
第49図　出土土師器実測図③（1/6）

れる。胎土は径0.5～５㎜の長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で外面は淡黄褐色から淡赤褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

装身具（図版15、第51図）

１～５は滑石製の小型の勾玉、６～10はガラス製の小玉で、すべて１号墳主体部棺内から出土した。１は全長13.6㎜、幅8.57㎜を測る。両側面ともよく磨かれているが厚みは頭部が尾部よりわずかに細い。両側から頭部の孔を穿孔している。２は全長8.4㎜、幅5.2㎜で、両側面とも平滑に磨いている。孔の穿孔は片方から行っている。３は全長8.38㎜、幅5.31㎜。両側面とも平滑に磨いている。孔は片側から穿孔している。４は全長7.62㎜、幅5.03㎜。頭部、腹部、尾部とも全体に丸みを帯びる。５は全長8.2㎜、幅5.28㎜。腹部から孔にかけて折損する。

６は径4.31～4.46㎜、厚さ4.6㎜を測る。やや縦長に見え全体に丸みをもつ。透明感のやや欠け



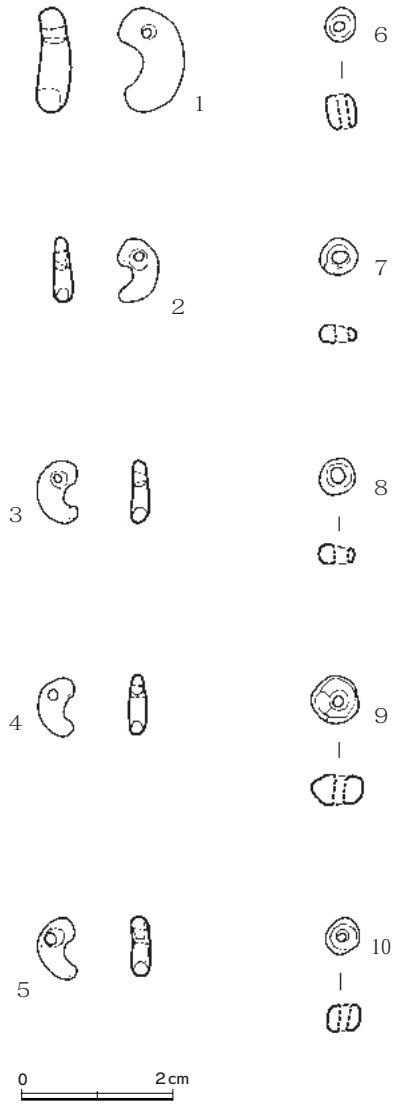
第50図　出土土師器実測図④（1/6）

るマリンブルーを呈する。わずかに気泡が目立つ。７は径4.82～5.17㎜、厚さ1.8～2.31㎜。径に比べやや扁平だが全体に丸みをもつ。透明感のやや欠けるマリンブルーを呈し気泡がやや目立つ。８は径4.96～5.14㎜、厚さ1.84～2.57㎜。やや扁平だが全体に丸みをもつ。透明感のあるマリンブルーを呈する。ごくわずかに気泡が入る。９は径6.12～6.39㎜、厚さ3.96～４㎜。全体に丸みを帯びるが多面体状にやや角張る。透明感のあるマリンブルーでやや気泡が目立つ。10は径4.62～５㎜、厚さ3.15～3.22㎜。全体に丸みを帯びる。透明感のあるマリンブルーであるがやや気泡が目立つ。

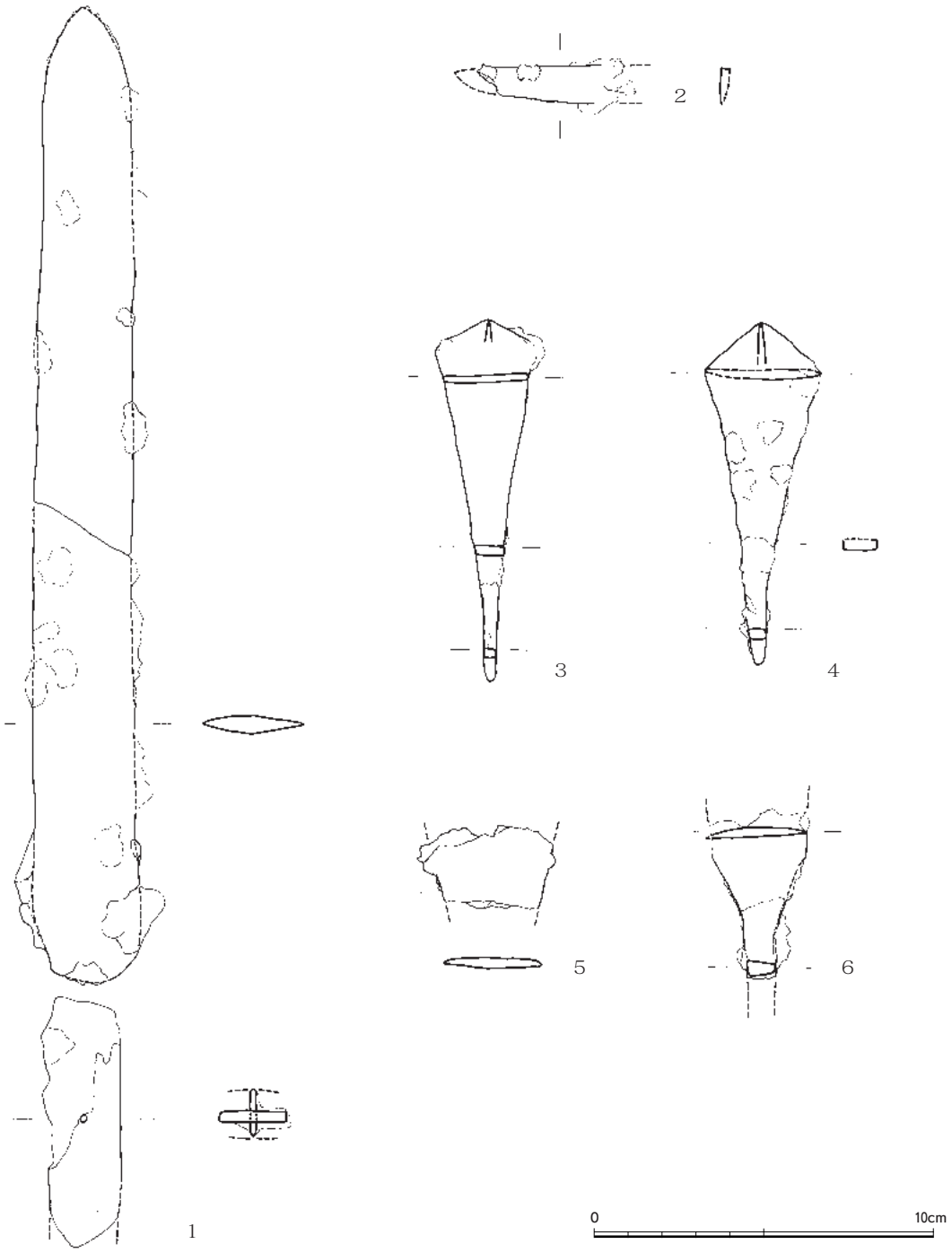
鉄製品（図版15、第52図）

１は剣で１号墳主体部棺内出土。茎部は基部の一部を欠く。現状で全長36.4cm以上。刃部は長さ約27.5cm前後。刃部の断面形は扁平な菱形だが、鎬は腐食のため不明瞭である。茎部のほぼ中間に目釘が残る。また基部にかけて木質が残る。

２は刀子で１号墳主体部棺内出土。切っ先及び茎部を欠く。刃部幅は最大で1.1cmを測る。断面形は二等辺三角



第51図　出土装身具実測図（1/1）



第52図　出土鉄製品実測図①（1/2）

形。背部の一部に繊維圧痕が認められる。

３～６は鏃。３は１号墳主体部床面出土。圭頭系で鏃身幅は約3.4cmを測る。茎はほとんどを欠くが、身から次第に細くなり断面形は方形を呈する。残存長は10cm。４は１号墳墳丘２段目の覆土中から出土した。圭頭系の鏃であろう。身の幅は2.9cm前後で両丸造りである。関部はわずかに張り断面形長方形の茎部へと続く。５は３号墳第１主体部から出土した。広根式の鏃の破片であろう。６は５号墳西側周溝の上層から出土した。柳葉系であろう。残存長10.6cmを測る。関部から茎までは長く茎の断面形はほぼ方形である。

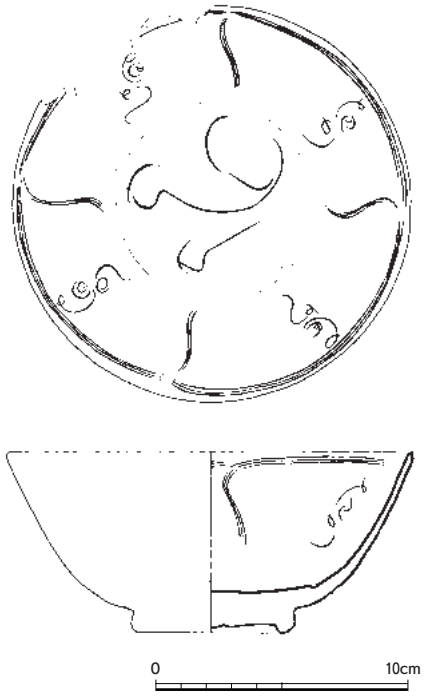
２．歴史時代の遺物

陶磁器（図版16、第53図）

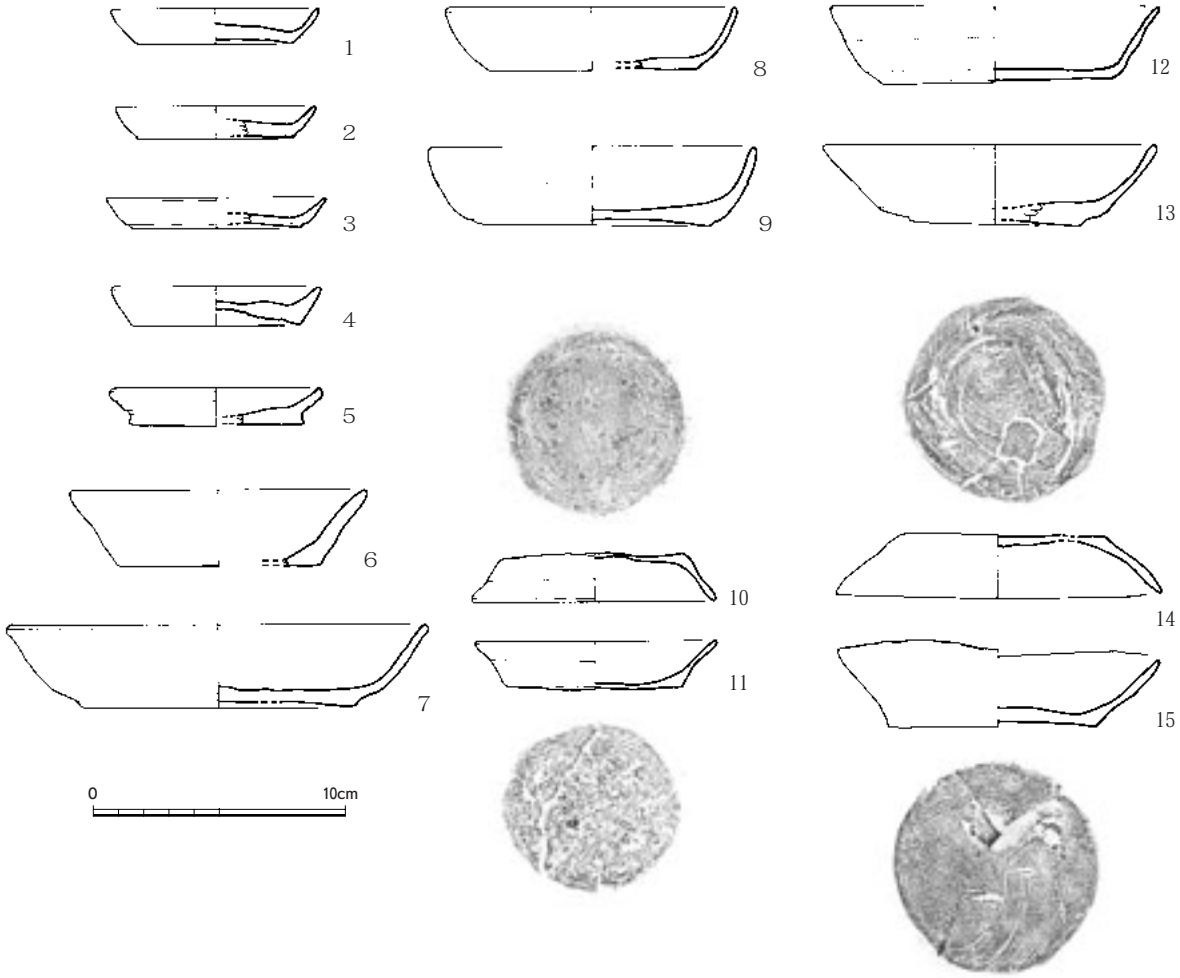
１号土壙墓出土の竜泉窯系青磁碗Ⅰ－４ａ類のほぼ完形品である。見込みが深く全体にずんぐりしている。高台は外底部のケズリが浅いために分厚い。外面は素文、内面には見込みも含めてヘラ描きの草花文が施される。体部下半部に回転ヘラケズリが施され、その上に淡灰緑色の釉薬が掛けられ、畳付き及び高台の内面の一部に及ぶ。

土器（図版16～19、第54～58図）

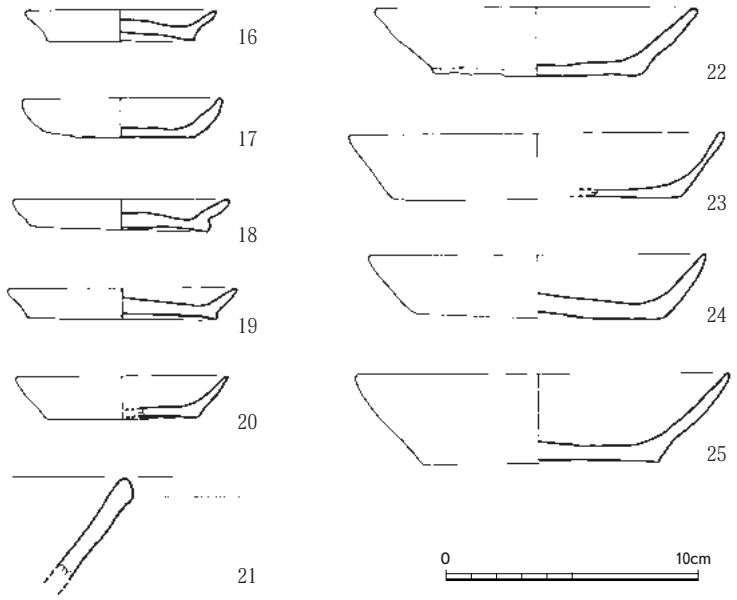
中世墓Ａ～Ｅ群から出土した土器のうち圧倒的多数を占めるのは、大宰府出土土師器の形態分類のうちの小皿ａ、坏ａに属するが、一部この小皿、坏の法量あるいは形態的特徴が中間的な特徴をもつものも出土している。このほか少数であるが、土師器の鉢、須恵質の壺（瓶）などが出土



第53図　出土陶磁器実測図（1/3）



第54図　出土土器実測図①（1/3）

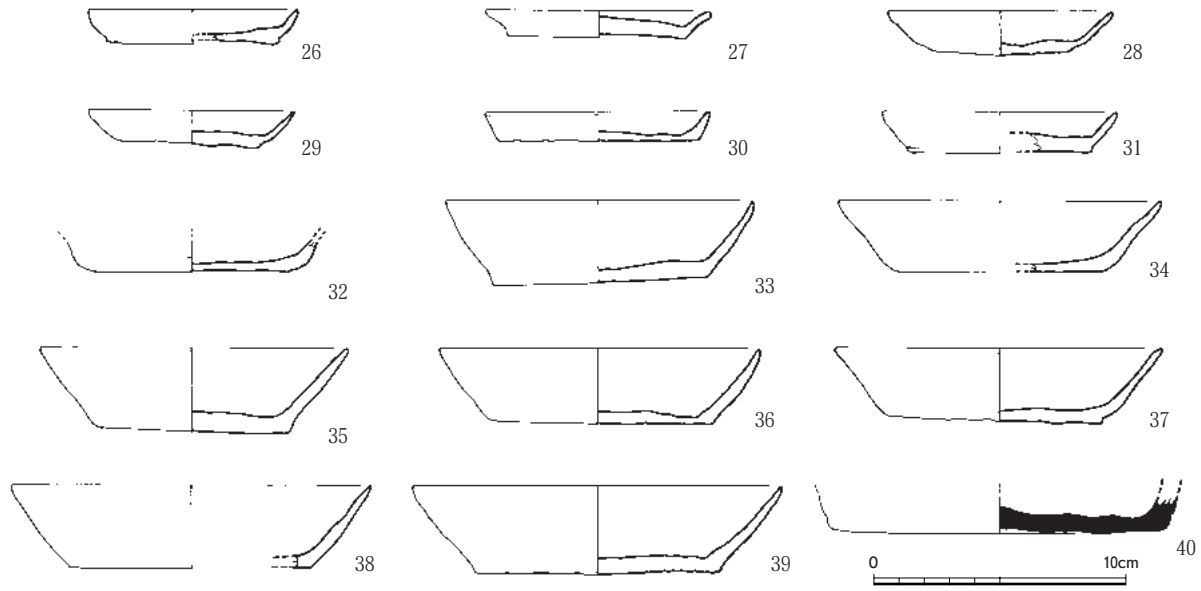


第55図　出土土器実測図②（1/3）

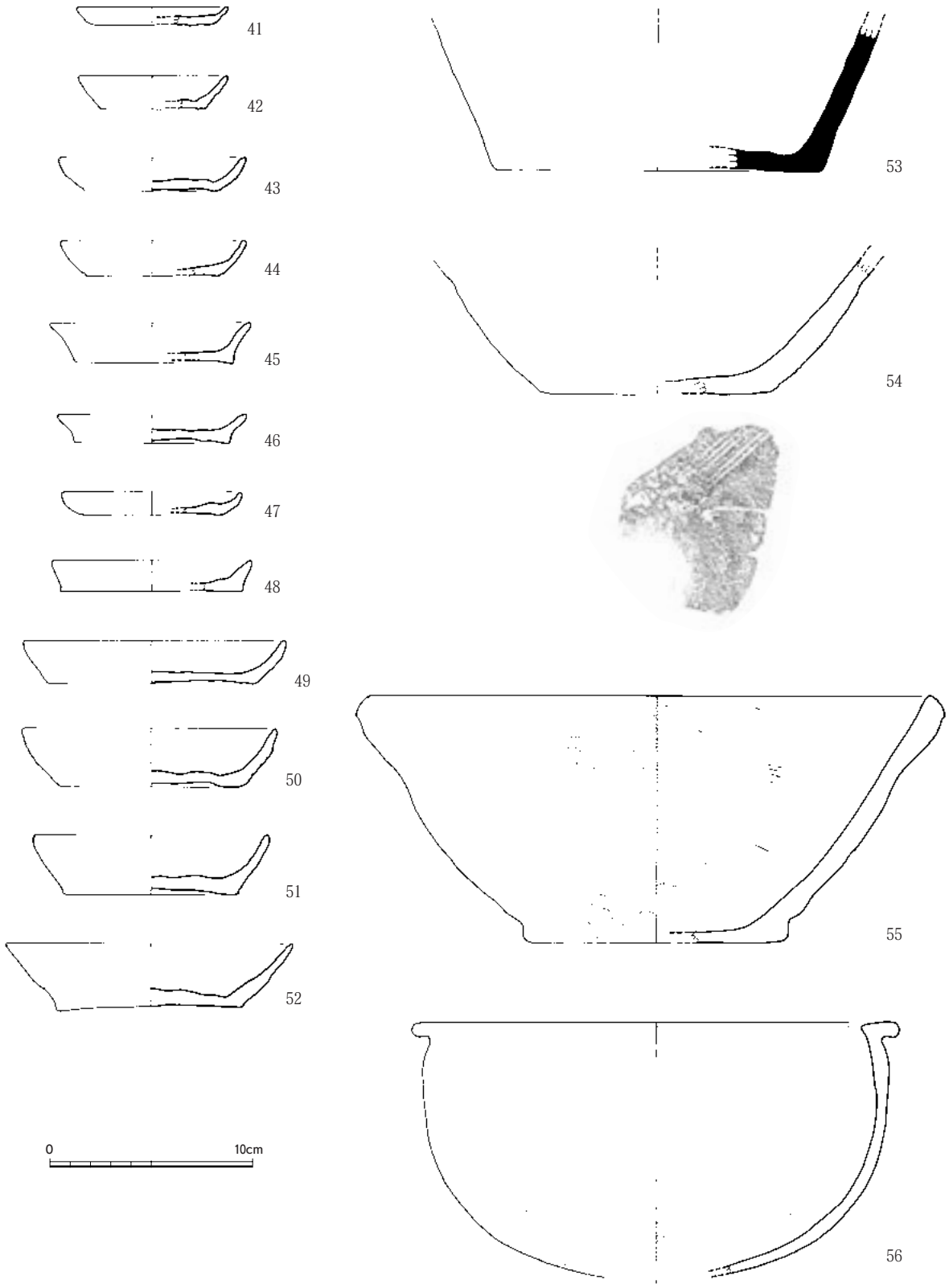
している。以下に実測図示したのは、全体の器形乃至は法量が把握できるものであり、別表の出土土器観察一覧表に記述した。小片及び歪みが著しく実測図示しえなかった土師器の坏・皿類の総重量は約9.46kgに及ぶ。今回出土したほぼ完形の坏１点の重量を130ｇとすると、72.8点分に相当する。以下に各群の出土土器の特徴の概要を記しておく。

Ａ群出土の土師器は、特筆すべきは、Ａ－９号（10、11）及びＡ－10号墓（14、15）の埋納器に使用された土師器である。前者は法量からすると、土師器坏が小型化した所謂小坏ａ（中皿ｂ）に該当するものか。大宰府出土土師器の編年観(1)からすると、ⅩⅧ・ⅩⅨ期であろう。後者は土師器坏ａの範疇ではあるが、器高がやや深めであり、体部中位から外方へやや屈曲しながら開く特徴を有する。ⅩⅨ期に相当する。なお内底部とくに蓋のほうに明らかな２次焼成が認められる。１～５は小皿ａで法量から大宰府のⅩⅧ～ⅩⅨ期であろう。６は法量から坏ａと坏ｂの中間に当たる。ⅩⅩ期か。７は出土した坏のうち最も法量が大きい。ⅩⅣ～ⅩⅤ期か。

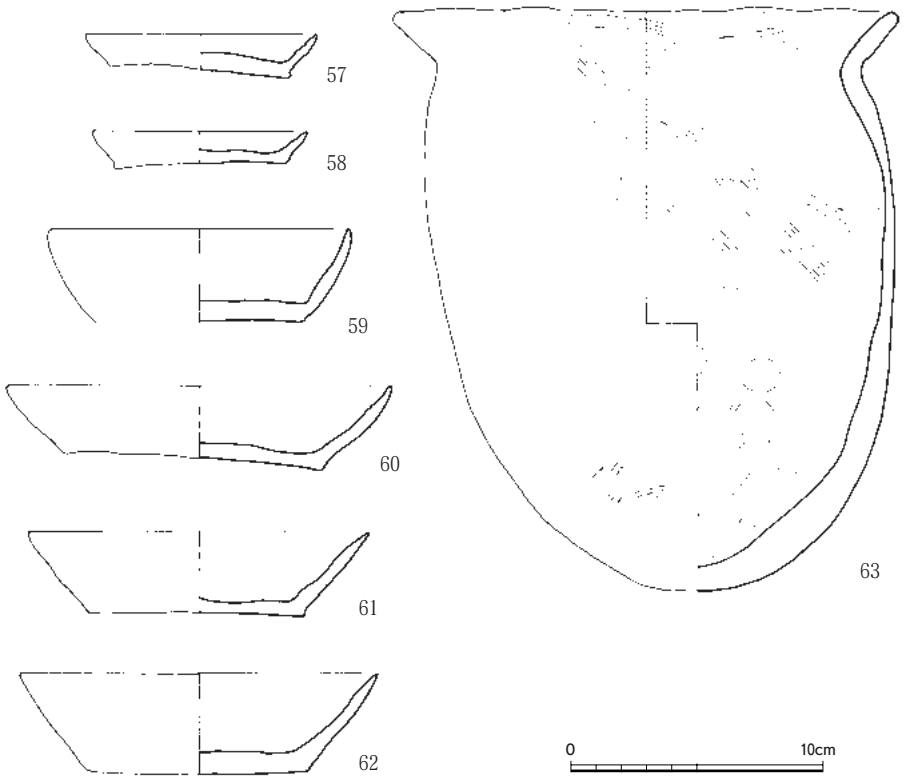
Ｂ群からの出土土師器は比較的少ない。16～20は小皿ａ。20は他と比較すると口径に対する器高の割合が高い。21は土師質の擂鉢で、体部内面に３条以上の条線がみられる。同一個体と思われる片口部分の小片が出土している。23の坏ａはＡ群出土の７に次ぐ法量を有する。ⅩⅤ～ⅩⅥ期であろう。25は口径に比べて器高がやや高い坏ａである。



第56図　出土土器実測図③（1/3）



第57図　出土土器実測図④（1/3）



第58図　出土土器実測図⑤（1/3）

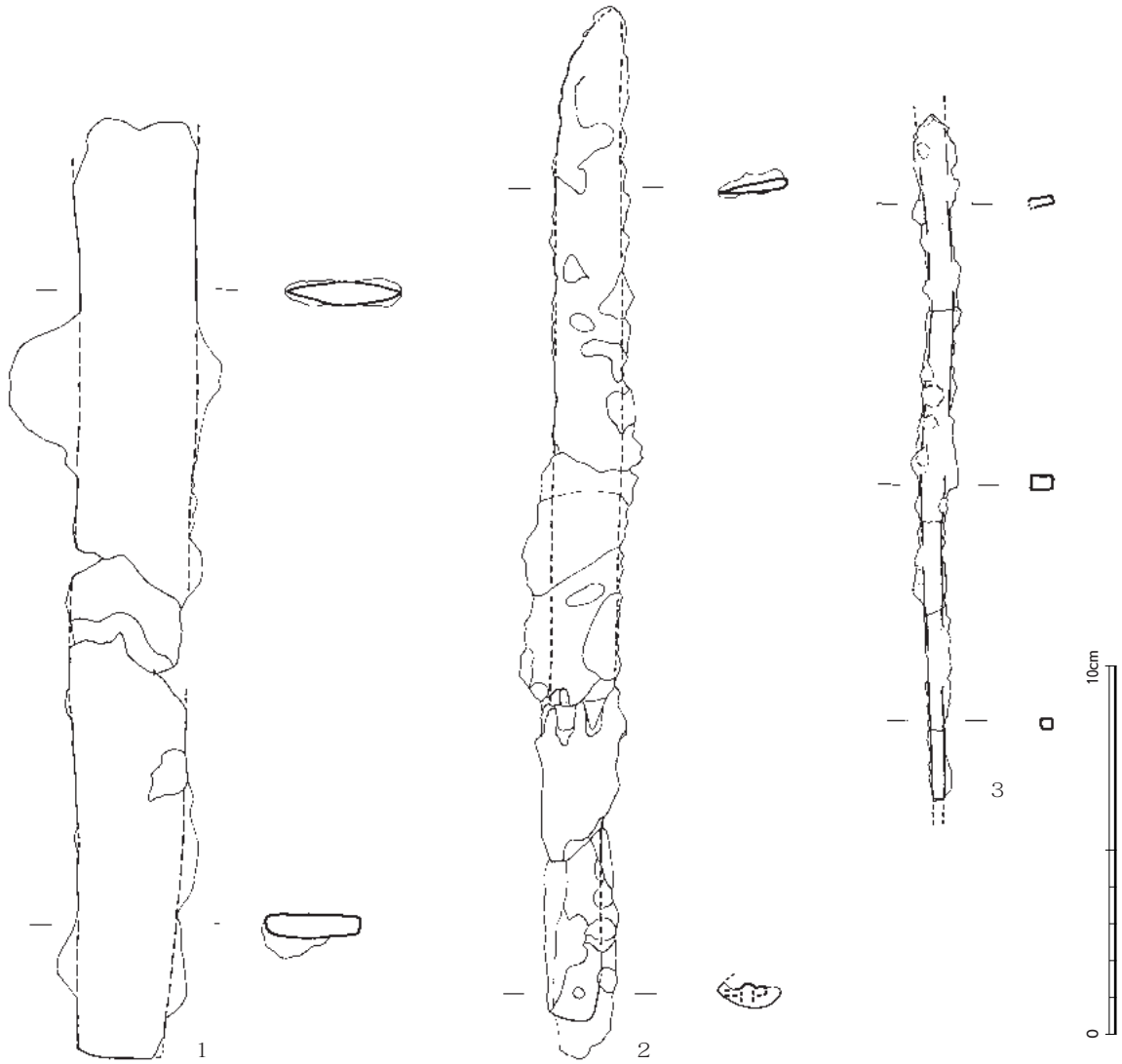
Ｃ群は最も土師器坏・皿類の出土量が多い。26～31は小皿ａで外底部はすべて糸切りである。32～39は坏ａであるが概して口径に比べ器高が高い傾向にある。35は坏ａと坏ｂの中間的な形態であろう。40は須恵質の壺類の底部破片資料。

Ｄ群からは、土師器坏、皿類の他に調理具である擂（捏）鉢（54・55）や鍋（56）も出土している。54・56は土師質であるが55は瓦質である。53は須恵質の底部破片資料で壺乃至は鉢であろう。41～48は小皿であるが、とくに42は口径に比べ器高が大きい傾向にある。ⅩⅨ期であろう。

注
⑴　山下信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』（1990）

鉄製品（図版20、第59図）

１はＢ－９号墓埋納壙中から出土した。銹化による腐食が著しいが剣状の鉄製品である。残存長約25.4cmであるが、その中間やや下寄りで折損しており図上復元した。腐食が著しく判然としないが、図上上半部の断面形は扁平な菱形、同じく下半側は断面形長方形を呈する。関部の有段部分も見いだせない。２はＤ・ｊ－４号墓埋納壙から出土した短刀。全長約28.5cm、刃部の身幅1.8cmを測る。柄部の木質が全体的に残るため関部が肉眼では観察できないが、呑み口式と考えられる。茎部の基部に近い箇所に目釘の跡が認められる。３はＤ・ｆ－２号墓埋納壙から出土した。棒状で残存長約18.6cmを測る。4ヶ所で折損している。断面形は長方形である。



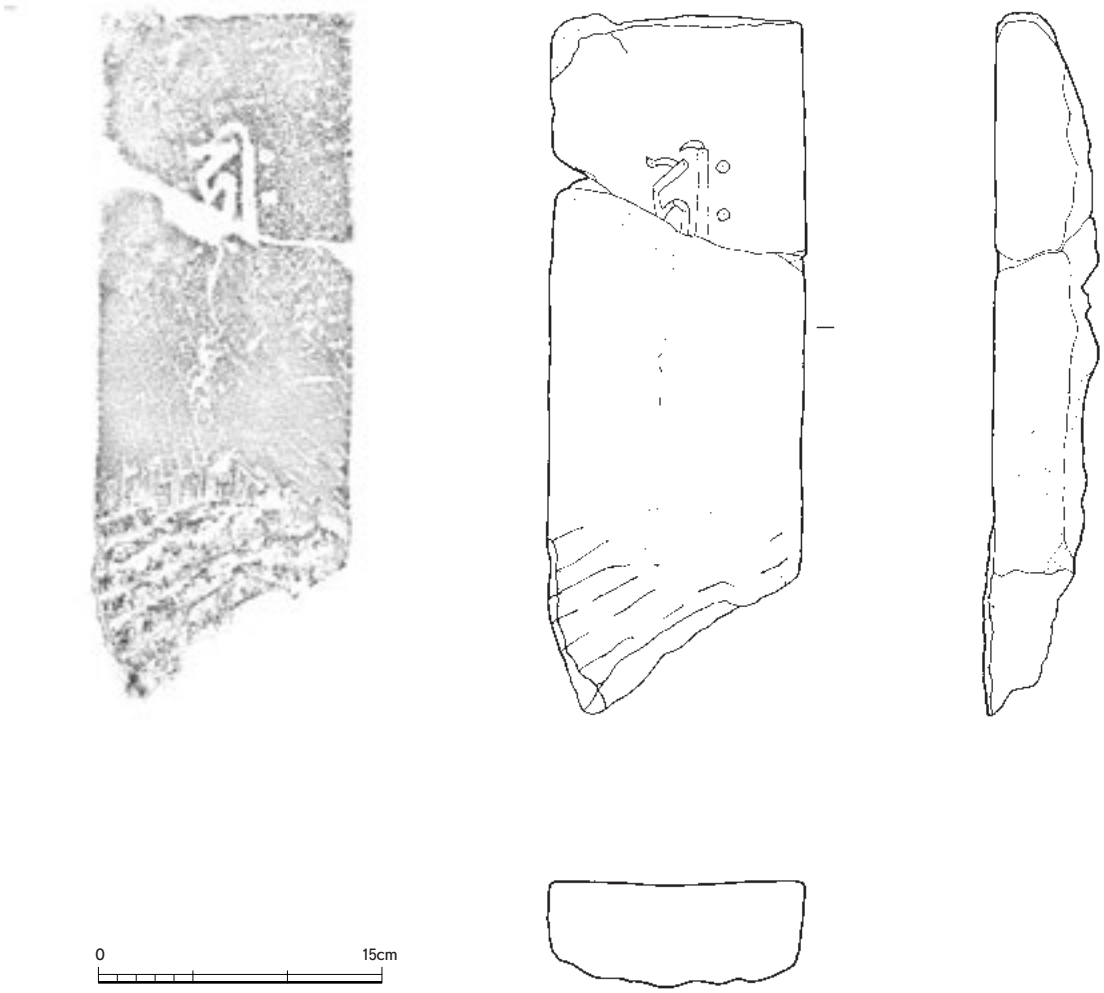
第59図　出土鉄製品実測図②（1/2）

石塔類（図版20、第60図）

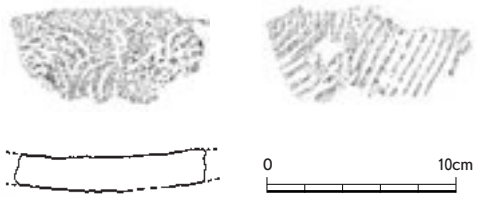
Ａ－10号墓の墓標に用いられた整形板碑である。黄茶褐色の砂岩製で残存高は37cmで頭部を折損して欠く。基部も一部欠いている。幅約13.5cm、側面の厚さ４cm前後、最大厚さ5.5cmを測る。正面及び両側面は丁寧に切削研磨されて面を取っている。正面やや上位寄りに梵字（キリーク）が浅い薬研彫りで精緻に陰刻されている。背面及び基部はやや粗い加工で終わっている。基部は地に向かってやや細り、正面全体に斜め方向の粗いノミ痕が残る。

瓦（図版20、第61図）

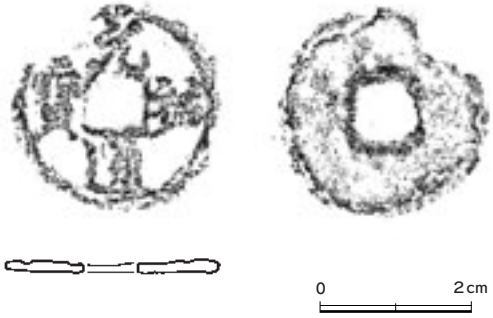
墓地Ｂ群の集石中に混じって出土した平瓦の小片である。厚さは２cm前後である。凸面は粗い平行タタキ、凹面は布目圧痕及び同心円文の当て具痕が観察される。径１～３㎜の白色砂粒を含む。焼成は良好で色調は淡橙褐色である。調整技法の特徴からウトグチ瓦窯跡で生産された資料であろう。



第60図　出土石塔類実測図（1/4）



第61図　出土瓦実測図（1/4）



第62図　出土古銭実測図（1/1）

古銭（図版20、第62図）

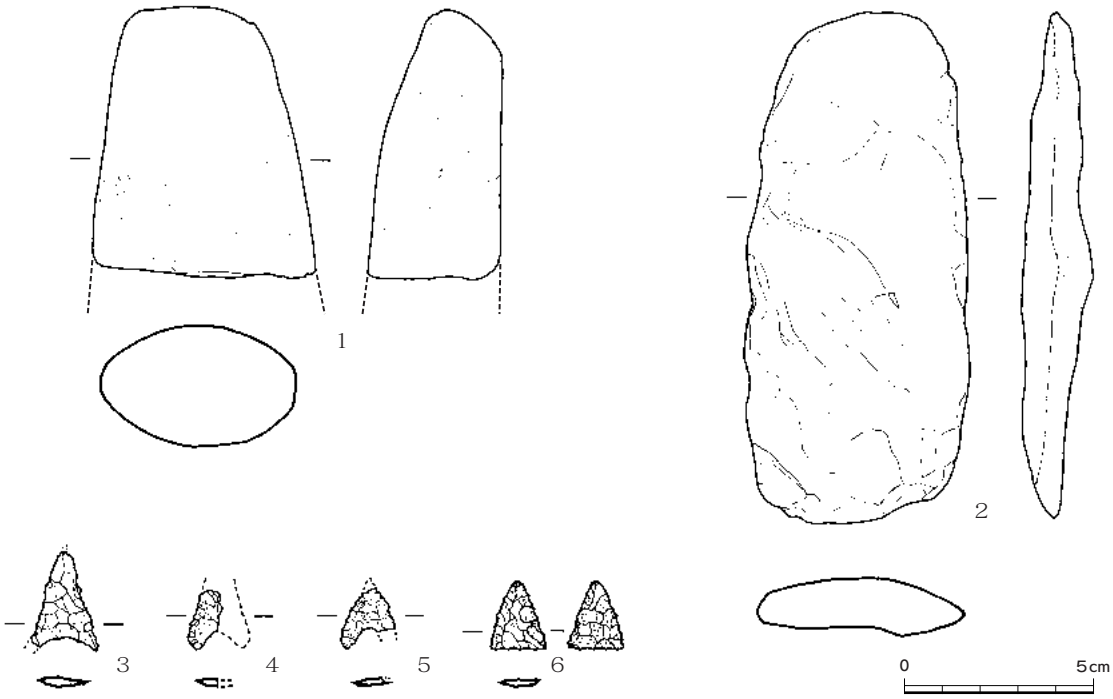
１号墳東側墳裾部表土下で出土した銅銭である。拓影でも２、３文字目が不鮮明であるが、「元祐通寶」（西暦1086年初鋳）である。銅質は悪く全体に脆くなっている。直径28.0㎜、最大厚さ1.8㎜を測る。

出土部位から墓地Ｃ群中に埋納されていたものだろう。

３．その他の遺物

土器（図版19、第58－７図）

弥生土器甕のほぼ完形資料。丘陵西側斜面から遺構検出作業中に出土した。口縁部径20cm、



第63図　出土石器実測図（1/2）

器高23.1cmを測る。あまり張りのない丸底の体部に、「く」の字状に外反する口縁部が続く。調整技法は、体部外面は粗いハケ目、体部内面は上半は粗くケズリに近いハケ目調整、下半は指によるナデ調整を行う。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色を呈する。

石器（図版20、第63図）

１は凝灰岩製と思われる磨製石斧。刃部側の約半分程を欠損している。残存長8.1cm、最大幅5.8cm、厚さ3.2cmを測る。丘陵西側斜面の遺構検出作業中に表土下で出土した。２は緑色片岩製の打製石斧。刃部側はかなり剥落している。残存長13.4cm、最大幅5.9cm、厚さ1.9cmを測る。尾根部東側の表土下で出土した。３～６は打製石鏃で、３と５はサヌカイト製、４と６は黒曜石製。３は抉りが浅く、４と５は抉りがやや深い。６は茎部の抉りが無い。３・４・６は中世墓地Ｄ群、５は中世墓地Ａ群の遺構検出中に出土した。

Ⅵ まとめ

１．前期古墳について

今回の調査で尾根上に並ぶ方墳５基が確認された。造墓の順序は、各墳墓とくに周溝間に切り合いが一部認められること（１号墳→３号墳）や尾根先端付近での微妙な選地の優劣から察すると１号墳→２号墳→３号墳→４号墳→５号墳であろう。また各墳墓の規模あるいは副葬品の差異からも、１号墳が５基の中では突出した内容を有し２号墳がこれに次ぐ。

次に古墳の築かれた時期であるが、１～３号墳の周溝内出土の古式土師器を福岡平野における当該期土器編年観に照らし合わせると、ⅡｂからⅡｃ期に相当することから４世紀前半代と考えられよう。[1]方墳周辺で確認された２基の壺棺墓については、さらに後出するものと考えられる。

調査地点周囲でこれまでに確認された古墳との関連性については、ウトグチＣ遺跡の北東側に対峙する丘陵の円墳（ウトグチＢ遺跡；５世紀前半代）１基[2]、南奥に対峙する丘陵の円・方墳（ウトグチＡ遺跡；４世紀後半代）７基[3]が発掘調査され、ウトグチ古墳群として古墳時代前期の墳墓群が分布する。時期的な順序（Ｃ→Ａ→Ｂ）からすると、最初期のＣの方墳群が最も好位置に造営されていると言える。ウトグチ古墳群として、北西側の眼下に見下ろす中位段丘上に当該期の集落及び水田等の生産地が展開することは明白であるが、既往の発掘調査ではまだ確たる内容を把握していない。今後の周辺での発掘調査の成果の課題である。

２．中世墓地について

丘陵尾根上及び丘陵西側斜面裾部に上位施設を集石遺構とする中世の墓所を広い範囲にわたって確認することができたが、福岡平野における当該期のまとまった中世墓地の発掘調査成果は県内他地域に比べ少なく、同じく福岡平野奥部に位置する大宰府周辺（横岳遺跡、金光寺跡、石穴遺跡）[4]の調査成果に次ぐ貴重な事例であろう。

今回の発掘調査で検出された中世墓地について、墓地の造営法、個々の墓の上部及び下部の構造、内容等、及び造営の推定時期を整理し、墓所の特徴等の検討と今後の調査課題を若干まとめてみたい。なお、地形的な特色から、今回の調査区内から見いだせる墓所は大まかに２つの墓所（丘陵尾根部のＡ～Ｃ群、Ｅ群と丘陵西側斜面のＤ群）として大別した。墓へ詣るための墓道の基幹的な導線及びまとまりを持つ墓所が造営され、結果として奥津城から見返すと何処が眺望できるかを考慮した。残念ながら、今回の発掘調査の中では中世墓地への道の跡は確認できていない。

⑴　墓所の造成方法

丘陵尾根部　古墳及びその周囲の比較的平坦部分を利用し、なおかつ、前代の古墳の高まりを墓所の表象として背景に置くような選地を行っている。古墳時代等の前代の丘状の高まりを意識した中世墳墓の造営は、全国的に確認されている。[5]春日市内においても、豆塚山遺跡（土葬墓か？青磁碗完形出土）、伯玄社遺跡[6]、ウトグチＢ遺跡（方形周溝状遺構）[7]、宮の下遺跡（土葬墓）[8]などで確認されている。

丘陵西側斜面　できるだけ緩斜面を有効に選地し、なおかつ、斜面上位側を必要最小限度掘削造成して、平坦面を造り出している。場合によっては、そこに若干の盛土（積み土）を行い、墓地の基礎地業としている。

⑵　上部遺構の構築

丘陵尾根部　拳大から掌大の礫を多用して平坦面に集石する。かつ、帯状に細長く集石が分布する。また、後述するが、集石全体の中で集積の疎密と下部の火葬骨片埋納の位置に関連性が認められるが、単一の墓地間で集石間に明瞭な区画はあまりはっきりしない。墓標として、砂岩製整形板碑（Ａ－10号墓)、自然石立石（Ｃ－14、Ｅ－１号墓）を部分的に集石の内側に樹立させる。但し、墓所全体に占める明らかな墓標は少ない。

丘陵西側斜面　丘陵尾根部と同じく集石をするが、中には比較的大型の板状乃至柱状の礫をもって、集石を概ね方形に囲む区画を有する墓地も構築される。墓標は、集石の内側に自然石の立石が樹立される（Ｄ・ｄ－２号墓)。

⑶　下部遺構と納骨方法

丘陵尾根部　集石下にまとまった火葬骨片をまとめて埋納しているほか、集石下にピット状の埋納壙を掘り込み、火葬骨片を埋納している。この場合、ピット状の埋納壙の有無に関わらず集石が周囲の集石よりも密である傾向が看取できる。また、埋納壙自体の壁面を偏平な礫で張り石状に用いて埋納壙をより丁寧にこしらえる墓（Ｂ－10号墓）もみられる。墓地Ａ群中には、土師器坏・皿を蔵骨器の蓋と身に利用した埋納器が使用されている（Ａ－９・10号墓)。ただし、Ａ－10号墓の整形板碑下で確認した埋納器（土師器小皿ａ）は器内ではなく合わせ置く器の下部に接して火葬骨片が埋置されていた。身に利用された小皿の外底部に微かに２次被熱の形跡が認められ、火葬所による火化から間もなく火葬骨片と同時に埋納された状況であることは少なくとも推定されよう。なお、Ａ－10号墓上位施設である砂岩製整形板碑については、埋納壙掘り方中に掘り直し等の新旧関係は認められなかったので、火葬骨埋納と同時に墓標として造立したと推定される。その他４号墳北西側集石中出土の壺、甕類の須恵質土器片（第57図40）も埋納器の可能性が考えられる。

副葬乃至は供献品として、Ｂ－９号墓埋納壙中から剣状の鉄製品が出土している。

ほとんど大半が火葬墓であるが、Ａ群東側奥部に単独で営まれる１号土壙墓は遺体処理法として土葬を採用していると推定される。

丘陵西側斜面　丘陵尾根部に比べ、墓所周囲の斜面が急なため流出して原位置を留めていない石塊も含まれているようであるが、集石下にまとめて火葬骨片を埋納するあり方は丘陵尾根部とあまり差異はない。また集石下についても、やや密な集積の下部にピット状の埋納壙乃至は明確な掘り込みは有さなくとも火葬骨片を集めて埋納している。さらに丁寧な埋納壙（Ｄ・ｊ－１号墓）は、壙壁面にやや扁平な礫を張り石状に用いている。

埋納器については、明確なものは確認していないが、Ｄ・ｆ－５号墓集石中出土の壺、甕類と思われる須恵質土器（第57図53）は埋納器の可能性があろう。

副葬乃至は供献品として、Ｄ・ｊ－４号墓埋納壙中より鉄製短刀が出土している。

集石下の遺体処理法は、火葬によるものがほとんどであるが、Ｄ・ｃ－１号墓の下層に方形周溝遺構が確認された、主体部は残っていないが土葬の可能性が考えられよう。

⑷　造営時期について

出土土師器から造墓の時期をみると、13世紀前後に火葬墓地の造築が開始され、14世紀代まで営まれると推定される。[9]また墓地の開始時期の特徴として、まず土葬墓あるいは方形周溝を有する墳墓が先行するものと推測する。１号土壙墓は、副葬品から12世紀後半代と推測される。近年中に刊行予定だが、ウトグチＢ遺跡の北側の整理池遺跡でもこの傾向が看取される。また、尾根上に展開する墓地の特徴として、前代の古墳墳丘を意識した造墓の有様は特筆される。

⑸　造営主体者について

火葬墓地の上位遺構として、今回の調査では砂岩製の整形板碑をはじめとして数基の墓標の樹立を確認したが、これらは、眼下のとくに北西側を見下ろす配置が窺われる。墓地の時期と同じくする集落遺構として、北北西500mに展開する中白水遺跡が知られる。同時期には環濠集落として発展し、中核部分としての居館跡（「上白水館跡」）も確認されている。地域的な背景としては、京都石清水八幡宮領である白水荘の存在は見過ごせない。対置する下流の調査内容からも、墓地は白水荘の経営に在地で直接関与した在地領主である武士層の奥津城として営まれたと推定されよう。

⑹　今後の調査の課題について

最後に同遺跡及び周辺の関連遺跡に関しての課題を若干述べたい。

白水荘に関連する遺跡の発掘調査については、報告書の刊行がこれまでほとんどなされていない。とくに、昭和57・58年（1982～83）に発掘調査された居館跡である「上白水館跡」を含む中白水遺跡の調査成果の正式な公開が急がれる。今後の白水地域における中世地域史の復元にとって今回報告する墳墓跡と一対となるからである。この点は担当者の一人として鋭意努力していきたい。

今回の調査報告書で、報告できなかった点についても、明記しておきたい。出土資料について、鉄製品の化学的保存処理ができていないため、細部のつくりが実測図中不明確であるものがある。将来保存処理を経たのち、改めて検討する機会を得たい。

中世墓地出土の火葬人骨片についても、今回の調査で多量の資料を得た。とくにＡ－９・10号墓埋納器にともなう資料は墓地の性格解明に重要な情報をもたらすであろう。形質人類学的調査の分析についても後日行いたい。

注
⑴　柳田康雄「土師器の編年　九州」『古墳時代の研究』６（1991）
⑵　春日市教育委員会「ウトグチ遺跡Ｂ地点」『春日市文化財調査報告書』第39集（2004）
⑶　春日市教育委員会「ウトグチＡ遺跡」『春日市文化財調査報告書』第48集（2007）
⑷　太宰府市教育委員会「横岳遺跡」『太宰府市の文化財』第45集（1999）
　　九州歴史資料館「第107次調査」『大宰府史跡』昭和62年度発掘調査概報（1988）
　　太宰府市教育委員会「高雄地区遺跡群」『太宰府市の文化財』第22集（1994）
⑸　太宰府市教育委員会「篠振遺跡」『太宰府市の文化財』第11集（1987）
⑹　春日市教育委員会「伯玄社遺跡」『春日市文化財調査報告書』第35集（2003）
⑺　註⑵に同じ
⑻　春日市教育委員会「宮の下遺跡（４次調査）」『春日市埋蔵文化財年報』10（2003）
⑼　山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』（1990）

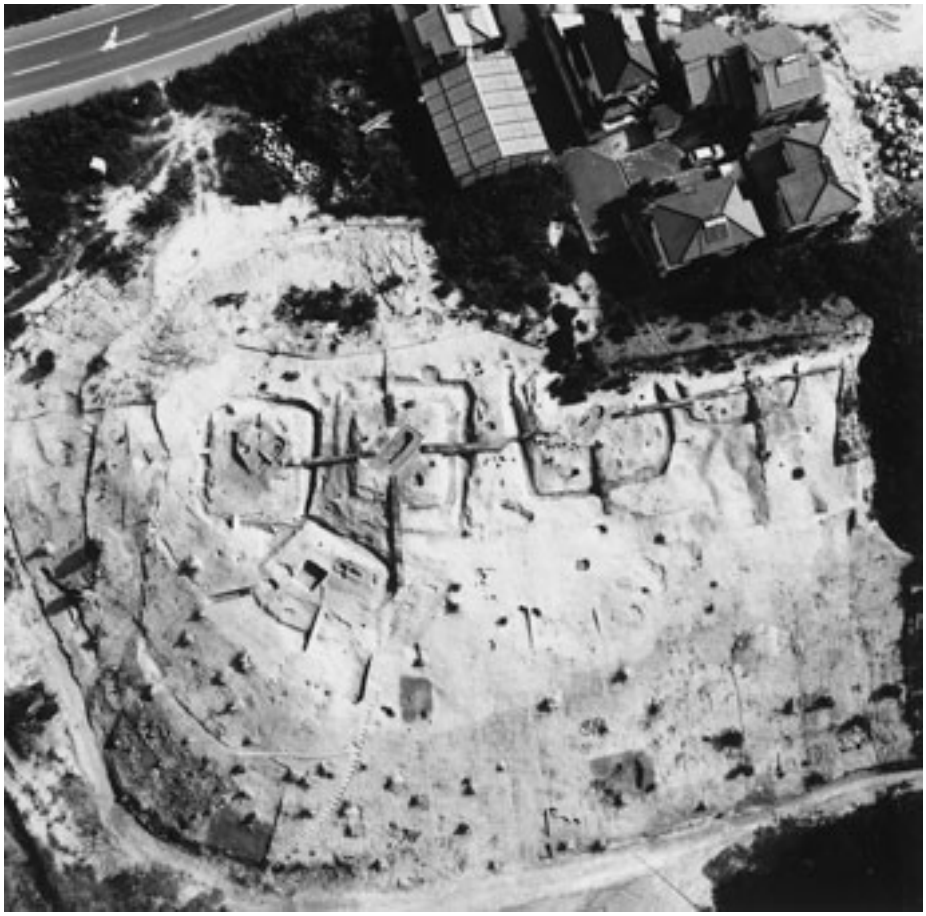
中世墓関連出土土器観察表

（器種に器形以外注記がないものは土師質土器、須は須恵質土器、瓦は瓦質土器。法量の（　）は復元値）

挿図	No.	出土遺構・箇所	器種	口径	底部径	器高	胎土	色調及び焼成	内底部ナデの有○無×	板状圧痕の有無	備　考
55	1	A群 ２号墳周辺	小皿	(8.2)	6.2	1.4	径１㎜前後の白色砂粒、微細な黒・赤色粒子を少量含む。	淡黄褐色 やや不良	○	○	2/3残存
55	2	A群 ２号墳表土下	小皿	(7.9)	(6.2)	1.3	径１㎜前後の白色砂粒・赤色粒、微細な金雲母・黒色粒を含む	淡茶褐色 良	○	○	2/5残存
55	3	A群 ２号墳周辺	小皿	(8.5)	(6.6)	1.2	１㎜前後の白色砂粒、微細な赤・黒色粒、金雲母粒を少量含む	淡黄褐色 良	○	○	2/3残存
55	4	A群 １号墳北側周溝外	小皿	(8.3)	6.6	1.55	２㎜以下の白色砂粒、微細な赤色粒・金雲母粒を少量含む	赤橙色 良	×	×	3/4残存
55	5	A群 １号墳北側周溝外	小皿	(8.4)	(7.0)	1.5	1.0㎜以下の白色砂粒、微細な金雲母粒を少量含む。	淡赤褐色 やや軟質	?	×	1/3残存
55	6	A群？ ３号墳周辺	坏	(11.8)	(8.0)	3.05	0.5㎜以下の白色砂粒、微細な金雲母・赤・黒色粒を少量含む。	淡赤褐色 良	?	?	1/4弱残存
55	7	A群 １号墳北側周溝外	坏	(16.8)	10.9	3.25	３㎜以下の白色砂粒・赤色粒を含む。微細な黒色・金雲母粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	1/2残存
55	8	A群 ２号墳表土下	坏	(11.6)	(8.1)	2.5	１㎜以下の白色砂粒含む。微細な黒色・金雲母粒を少量含む。	黄褐色 良	?	×	1/3残存
55	9	A群 １号墳北側周溝外	坏	12.9	9.2	3.1	粗砂粒、金雲母・赤色粒を少量含む。	淡橙褐色 良	○?	×	2/3残存
55	10	A群 A－10号墓	坏	9.6	7.0	1.9	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な金雲母粒を少量含む。	黄褐色～灰褐色　良	×	×	完形 埋納器・蓋
55	11	A群 A－10号墓	坏	9.6	7.0	1.95	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な金雲母・赤色粒を少量含む。	灰褐色 良	×	×	完形、外底部２次被熱、埋納器・身
55	12	A群 １号墳北側周溝外	坏	12.9	9.0	3.1	粗砂粒と微細な赤色・金雲母粒を少量含む。	淡赤褐色 良	×	×	4/5残存
55	13	A群 １号墳北側周溝外	坏	(13.2)	(6.8)	3.2	１㎜以下の白色砂粒、微細な赤・黒色・金雲母粒を少量含む。	黄褐色～淡橙褐色　良	○	○	2/5残存
55	14	A群 A－９号墓	坏	12.9	8.1	2.6	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な金雲母粒を少量含む。	黄褐色～淡赤褐色　良	?	×	完形、内面２次被熱、埋納器・蓋
55	15	A群 A－９号墓	坏	12.8	8.2	3.5	0.5㎜程度の白色砂粒を少量含む。	淡黄褐色 良	○	×	完形、内面２次被熱、埋納器・身
56	16	B群 １号墳南西側周溝中	小皿	(7.6)	5.8	1.2	砂粒は殆ど含まない。微細な赤・黒色・金雲母粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	2/3残存
56	17	B群 B－１号墓集石中	小皿	7.8	5.95	1.65	１㎜以下の細砂粒を含む。金雲母・赤色粒・角閃石を少量含む。	淡赤褐色 良	○	?	1/2強残存
56	18	B群 B－15号墓集石中	小皿	(8.5)	(6.9)	1.35	１㎜以下の白色砂粒・赤色粒、微細な金雲母粒を少量含む。	淡茶黄色 良	?	×	1/2強残存
56	19	B群 B－15号墓集石中	小皿	9.0	7.4	1.20	１㎜前後の白色砂粒、微細な赤・黒色・金雲母粒を少量含む。	淡茶灰色 良	○	×	ほぼ完形
56	20	B群 B－15号墓集石中	小皿	(8.3)	(6.0)	1.7	0.5㎜程の白色砂粒、微細な赤・黒色・金雲母粒を少量含む。	淡橙褐色 良	○	×	1/3残存
56	21	B群 B－19号墓前面	擂鉢	－	－	－	６㎜以下の白色砂粒を多く含む。	淡黄褐色 やや軟質	－	－	条線の単位３本以上
56	22	B群 １号墳丘上表土下	坏	12.8	8.0	2.8	１～２㎜程度の白色砂粒、微細な金雲母粒を少量含む。	淡橙褐色 良	○	○	ほぼ完形
56	23	B群 B－１号墓集石中	坏	(14.9)	(11.3)	2.6	１～３㎜程度の白色砂粒、微細な金雲母粒を含む。	黄茶褐色 やや不良	○	○	1/2弱残存
56	24	B群 １号墳南西側周溝中	坏	(13.4)	9.85	2.6	１㎜以下の白色砂粒・赤色・金雲母粒を少量含む。	茶褐色～淡橙褐色　良	○	×	2/3残存
56	25	B群 １号墳南西側周溝中	坏	14.6	9.3	3.55	１㎜以下の白色砂粒、微細な赤色・金雲母粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	3/4残存
57	26	C群 ４号墳北西側集石中	小皿	(8.2)	(6.8)	1.4	１㎜以下の白色砂粒、微細な赤色・金雲母粒を含む。	淡赤褐色 良	×	×	4/5残存
57	27	C群 C－２号墓南側集石中	小皿	9.7	7.0	1.1	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な金雲母・赤色粒を少量含む。	黄茶褐色 良	○	×	ほぼ完形
57	28	C群 ４号墳北側集石中	小皿	(9.0)	15.4	1.75	0.5㎜以下の白色砂粒、微細な金雲母・赤色粒を少量含む。	茶黄色 良	×	×	3/5残存
57	29	C群 C－３号墓北側	坏	(8.2)	(5.4)	1.3	１㎜以下の白色砂粒、微細な金雲母・赤色粒を含む。	淡黄褐色 良	×	×	ほぼ完形
57	30	C群 C－２号墓南側下段	小皿	8.9	7.9	1.1	１～２㎜の白色砂粒を少量含む。金雲母・赤色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	○	○	ほぼ完形　口縁部に油煙付着
57	31	C群 ４号墳北西側表土下	小皿	(9.4)	(7.4)	1.6	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な赤色・金雲母粒を少量含む。	黄褐色 良	×	×	1/3残存

挿図	No.	出土遺構・箇所	器種	口径	底部径	器高	胎土	色調及び焼成	内底部ナデの有〇無×	板状圧痕の有無	備　考
57	32	C群 ４号墳北側集石中	小皿	?	-7.7	?	１㎜以下の白色砂粒、金雲母を少量含む。	淡黄褐色 不良	?	○	1/3残存
57	33	C群 ４号墳北西側集石中	坏	12.2	8.5	3.4	１㎜前後の白色砂粒•赤色粒を含む。微細な金雲母•黒色粒を少量含む。	淡橙褐色 良	×	×	ほぼ完形
57	34	C群 C－２号墓集石中	坏	(12.8)	(8.2)	2.8	１～５㎜の白色砂粒を少量含む。微細な金雲母粒を含む。	黄茶褐色 良	×	○?	3/4残存
57	35	C群 C－２号墓西側表土中	坏	(12.0)	7.8	3.45	0.5～２㎜の砂粒を含む。赤色・金雲母粒を少量含む。	淡赤褐色 良	×	×	2/3残存
57	36	C群 C－２号墓南側斜面	坏	12.7	8.7	3.0	１㎜以下の白色砂粒・赤色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	ほぼ完形
57	37	C群 C－２号墓南側斜面	坏	13.3	8.3	3.0	１～３㎜の白色砂粒を多く含む。赤色・金雲母粒を少量含む。	淡黄褐色 良	○	○	3/4残存
57	38	C群 ４号墳北西側表土下	坏	(14.3)	(9.6)	3.3	１㎜以下の白色砂粒を含む。微細な赤色粒を少量含む。	黄褐色 良	?	?	1/4残存
57	39	C群 C－２号墓集石中	坏	(14.7)	(9.7)	3.55	１㎜以下の白色砂粒、赤色粒、微細な金雲母・黒色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	1/4残存
57	40	C群 ４号墳北西側集石中	須•壺か甕	－	(13.2)	－	１㎜以下の白色細砂粒を少量含む。	暗灰色 良	－	－	底部約1/4残存
58	41	D群 D・d－２号墓集石中	小皿	(7.5)	(6.0)	0.9	１㎜以下の白色砂粒・黒色粒を多く含む。	淡赤褐色 良	○	○	1/5残存
58	42	D群 D・e－1・2号墓西側斜面	小皿	(7.4)	(5.0)	1.65	0.5㎜以下の白色砂粒、金雲母を少量含む。	黄褐色 良	×	×	1/3残存
58	43	D群 D・k－１号墓南側斜面	小皿	(9.2)	(6.6)	1.65	１～３㎜の白色砂粒含む。微細な金雲母・黒色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	○	○	1/5残存
58	44	D群 D・j－１号墓南側斜面	小皿	(9.2)	(6.5)	1.75	２㎜以下の白色砂粒を含む。赤色・金雲母粒を少量含む。	黄赤褐色 良	○	×	1/4残存
58	45	D群 D・ｊ－８号墓北側斜面	小皿	9.9	7.7	2.0	１～２㎜の白色砂粒を含む。金雲母・赤色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	3/4残存
58	46	D群 D・C－３号墓集石中	小皿	(9.0)	(7.4)	1.5	１㎜以下の白色砂粒を少量含む。	淡茶白色 良	×	×	底部約1/2残存
58	47	D群 D・C－４号墓集石中	小皿	(8.9)	7.0	1.1	0.5㎜以下の白色砂粒、金雲母、赤・黒色粒を少量含む。	黄褐色～淡赤褐色　良	○	×	1/5残存
58	48	D群 D・C－３号墓集石中	小皿	(7.2)	(6.0)	1.5	微細な白色砂粒、金雲母粒を少量含む。	淡黄褐色 良	?	×	1/4残存
58	49	D群 D・C－４号墓集石中	坏	(12.9)	10.0	2.1	微細な白色砂粒、金雲母・黒色粒を少量含む。	淡茶白色 良	○	×	2/3残存
58	50	D群 D・e－1・2号墓西側斜面	坏	(12.4)	8.6	2.9	１～２㎜の白色砂粒を含む。金雲母・黒色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	3/4残存
58	51	D群 D・ｊ－１号墓南側斜面	坏	(12.2)	(8.6)	2.9	１～３㎜の白色砂粒含む。微細な金雲母・黒色粒を少量含む。	暗黄褐色 良	×	×	1/2残存
58	52	D群 D・ｅ－２号墓前面	坏	14.2	9.1	3.3	１㎜以下の白色砂粒、金雲母・黒色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	ほぼ完形
58	53	D群 D・ｆ-５号墓集石中	須•壺か甕	－	(16.0)	－	0.3㎜以下の白色砂粒をごく少量含む。	淡灰色 良	－	－	底部周1/8残存
58	54	D群 D・ｊ－１号墓西側斜面	擂鉢	－	(11.4)	－	１㎜程度の白色砂粒を含む。	淡黄褐色 やや軟質	－	－	底部周1/4残存
58	55	D群 D・e－1・2号墓前面斜面	瓦・捏鉢	(27.4)	(12.4)	12.1	１㎜前後の白色砂粒を少量含む。	暗灰色～黄褐色　良	－	－	体部約1/2残存
58	56	D群 D・ｉ－１号墓西側斜面	土鍋	24.0	－	－	１㎜前後の白色砂粒を含む。金雲母・角閃石を少量含む。	淡黄褐色 良	－	－	口縁周7/8残存 外面に煤付着
59	57	１・２号墳周辺遺構検出時	小皿	9.1	7.1	1.8	３㎜の白色砂粒を含む。金雲母・赤色粒を少量含む。	淡黄灰褐色 良	×	×	3/5残存
59	58	１・２号墳周辺遺構検出時	小皿	8.6	6.75	1.5	１～2.5㎜の白色砂粒を含む。金雲母粒を少量含む。	淡黄橙褐色 良	×	×	ほぼ完形
59	59	１・２号墳周辺遺構検出時	坏	(11.8)	(8.15)	3.7	２㎜程度の白色砂粒を含む。金雲母粒を少量含む。	淡橙褐色 良	×	×	2/3残存
59	60	１・２号墳周辺遺構検出時	坏	13.3	10.1	3.35	微細な金雲母・赤色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	3/4残存
59	61	１・２号墳周辺遺構検出時	坏	13.4	8.5	3.4	２㎜程度の白色砂粒を含む。金雲母・赤色粒を少量含む。	黄褐色 良	○	×	3/4残存
59	62	１・２号墳周辺遺構検出時	坏	14.2	8.7	4.0	１㎜程度の白色砂粒を含む。金雲母・赤色粒を少量含む。	淡黄褐色 良	×	×	3/5残存

図　　版



1　古墳群全景

2　古墳群全景（南から）

図版2

1　１号墳全景

2　１号墳主体部

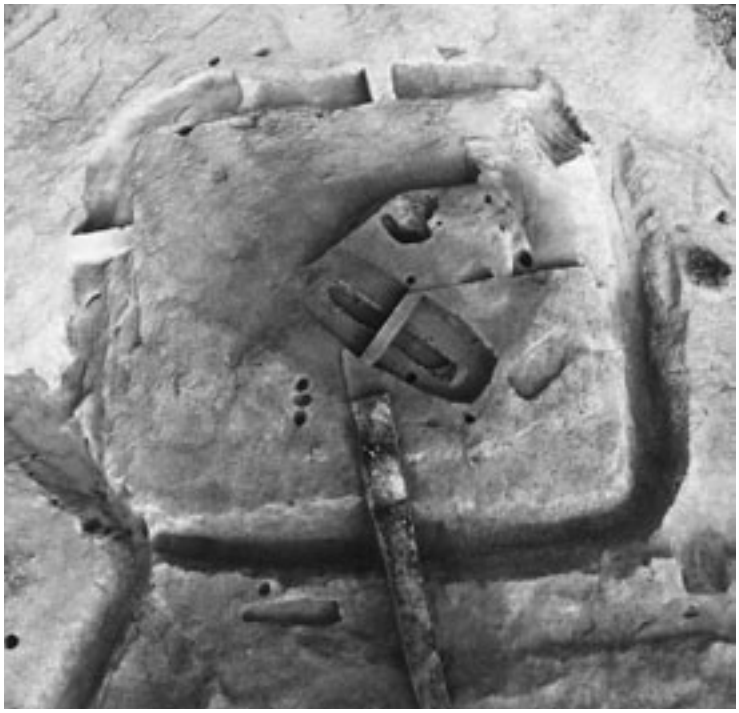
3　１号墳主体部（東から）

1　1号墳主体部土層断面

2　1号墳主体部鉄剣

3　1号墳周溝内土器

図版4



1　２号墳全景

2　２号墳木棺墓

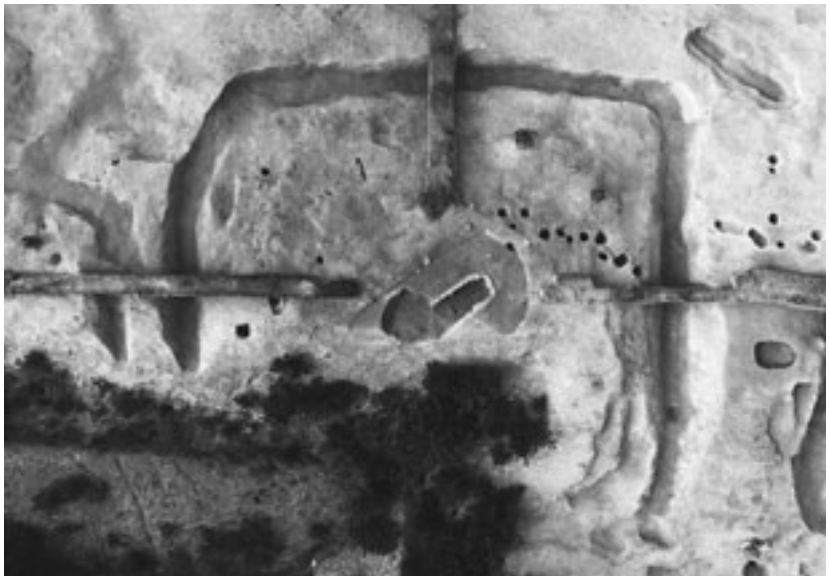
3　２号墳主体部

1　３号墳第１主体部

2　３号墳第２主体部

3　３号墳第２主体部

図版6

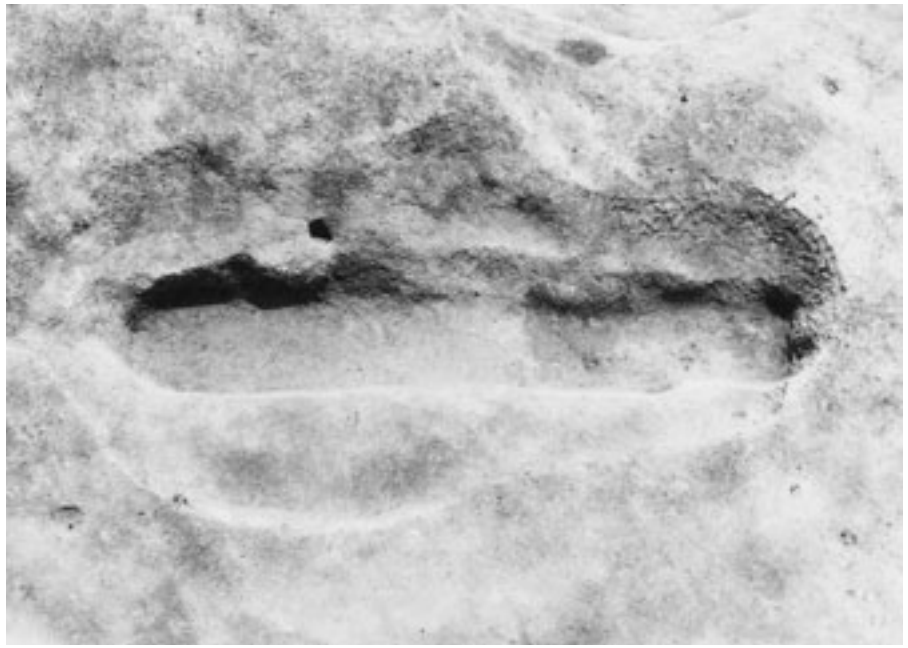


1　４号墳全景

2　４号墳主体部

3　５号墳

1　1号壺棺墓



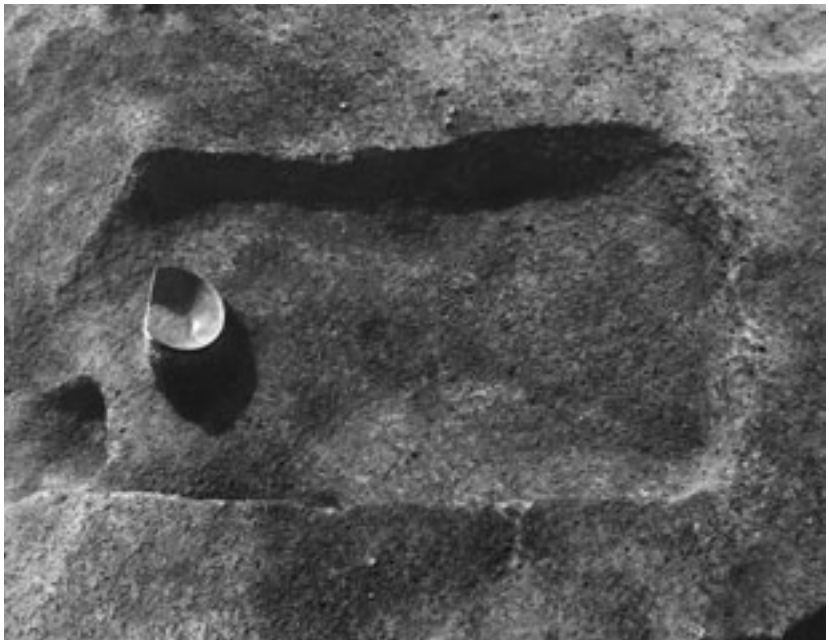
2　1号土壙

3　2号壺棺墓

4　2号土壙墓（西から）

図版7

図版8



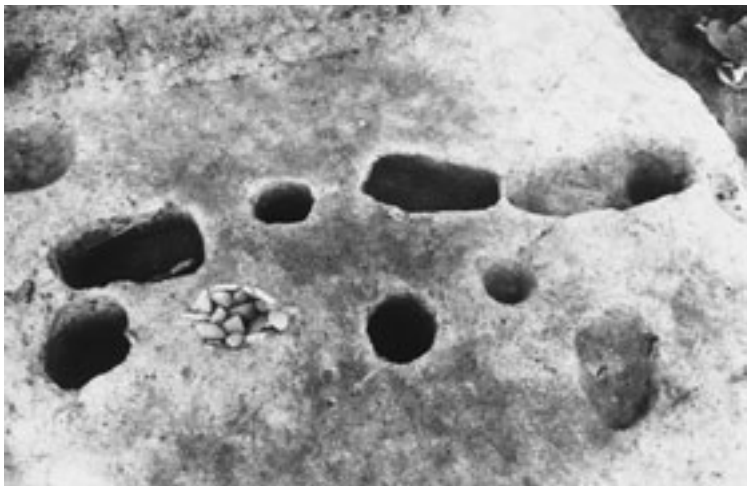
1　Ａ群１号土壙墓（北西から）

2　Ａ－８・９号墓

3　Ａ－９号墓火葬骨埋納状況

1　A－10号墓

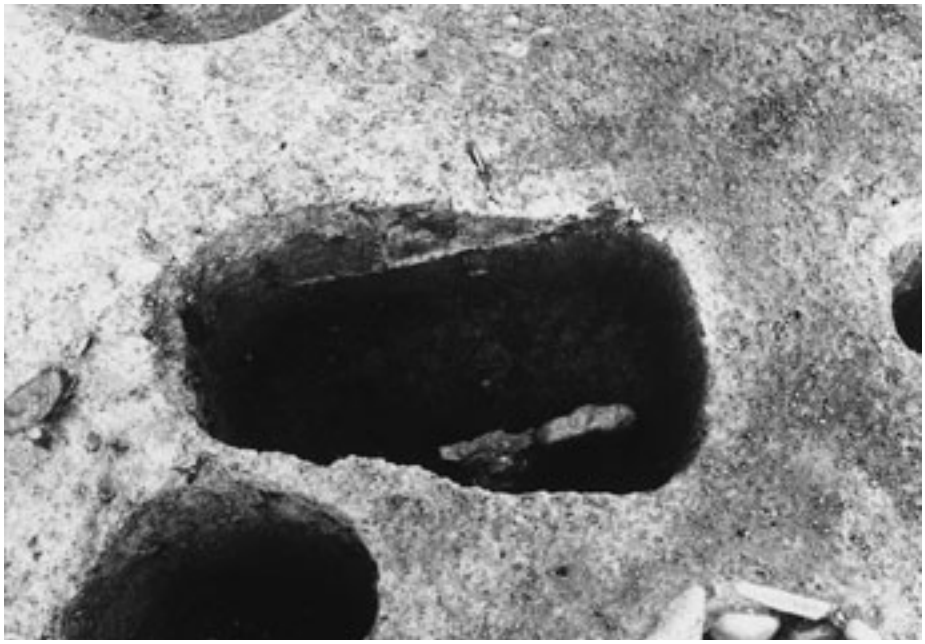
2　中世墓地B・C群集石遺構



3　中世墓地B群埋納壙

4　B－10号墓埋納壙

図版10



1　Ｂ－９号墓鉄製品出土状況

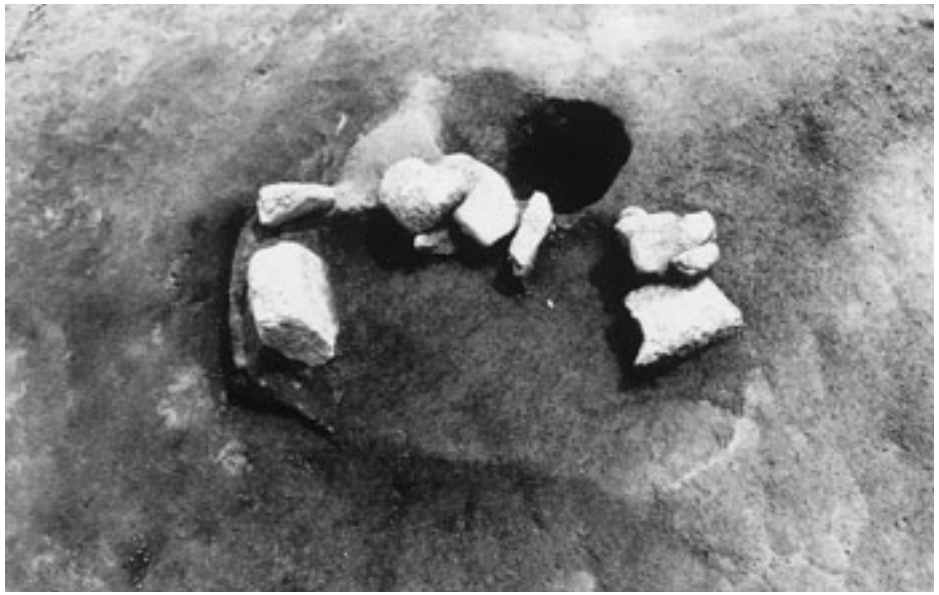
2　中世墓地Ｃ群集石遺構

3　中世墓地Ｃ群埋納壙

1　中世墓地Ｄ群（１次調査）

2　中世墓地Ｄ群（１次調査）

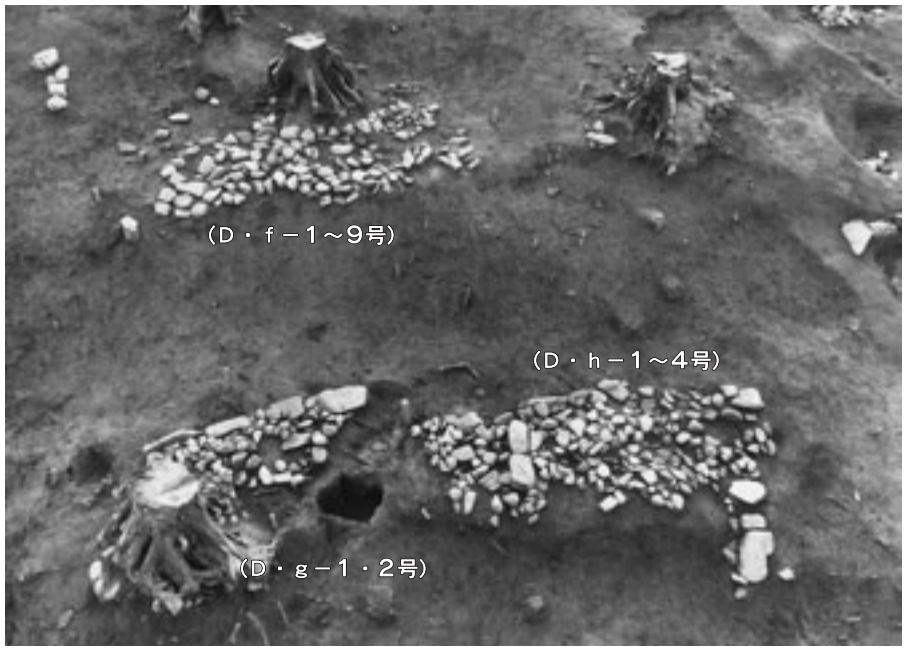
3　中世墓地Ｄ群（２次調査）



4　Ｄ・ａ－１号墓

図版１１

1　D・i－1号墓



2　中世墓地D群（D・f～h）

3　D・h－4号墓

4　D・h－4号墓（完掘）

1　D・j－4号墓鉄製品出土状況

2　E－1号墓

3　D・d－1・2号墓

図47－1

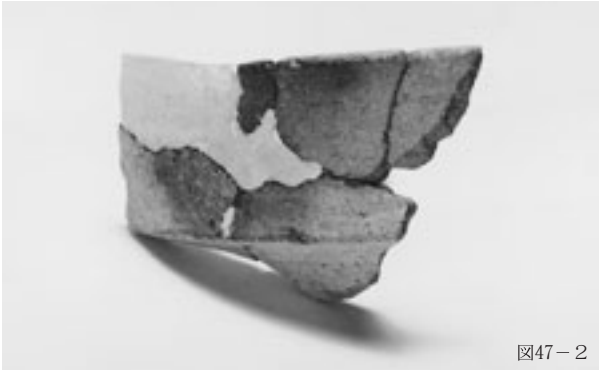


図47－2

図47－3

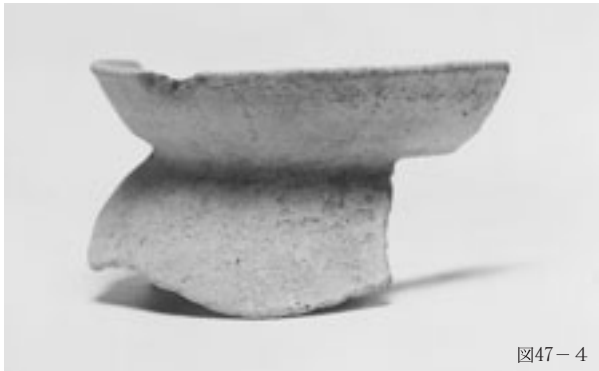


図47－4

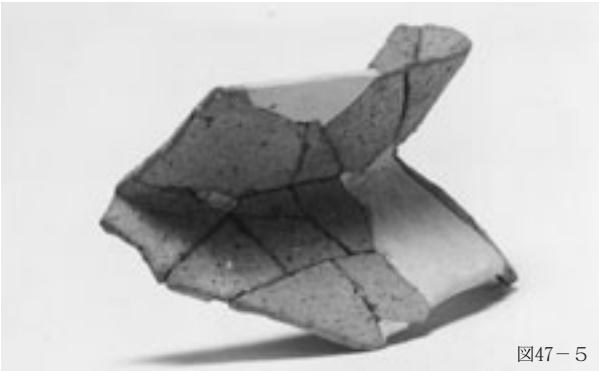


図47－5

図47－7

図47－8

図48－9

図48－10

古墳出土土器

図49－11

図49－12

図52－1

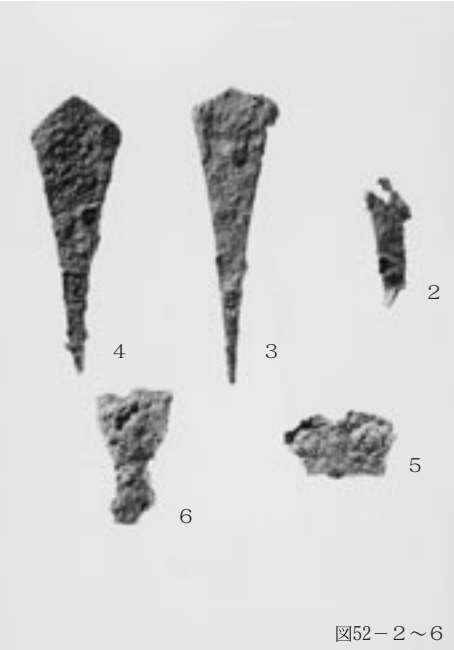


図52－2～6

図51－1～5

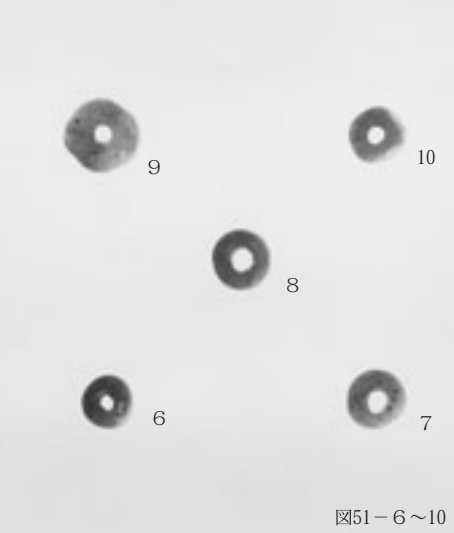


図51－6～10

壺棺、古墳出土鉄製品、玉類

図53

図53

図54－14

図54－10

図54－15

図54－11

中世墓出土陶磁器・土器①

図54－1

図54－12

図55－22

図54－2

図55－17

図55－23

図54－3

図55－18

図55－24

図54－6

図55－19

図55－25

図54－9

図55－20

図55－26

中世墓出土土器②

図56－29

図56－36

図57－45

図56－35

図56－34

図57－46

図56－27

図56－37

図57－49

図56－30

図56－40

図57－50

図56－33

図57－43

図57－51

中世墓出土土器③

図57－52

図58－57

図58－62

図57－53

図58－58

図58－63

図58－59

図57－55

図58－60

図57－56

図58－61

中世墓出土土器④、出土土器

図60

図59－2

図63－1

図59－1

図62

図59－3

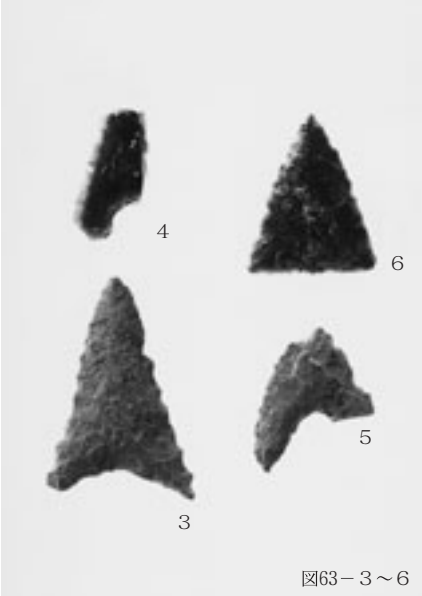


図63－3～6

図63－2

中世墓出土石塔類・鉄製品・古銭、出土石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	うとぐちしーいせき
書名	ウトグチＣ遺跡
副書名	福岡県春日市白水ケ丘所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第54集
編著者名	中村昇平
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816-0804　福岡県春日市原町３丁目１番地５号　TEL　092-584-1111
発行年月日	2008年３月31日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ウトグチＣ遺跡（うとぐちしーいせき）	福岡県春日市白水ケ丘３丁目35、38番地外（ふくおかけんかすがしらうずがおかちょうめばんち）	40218		33°30′50″	130°26′36″	1988年6月20日～7月12日 1989年4月6日～1990年1月10日	1,488㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ウトグチＣ遺跡	墳墓	古墳時代前期	方墳　５基 壺棺墓　２基	石製勾玉、ガラス製、小玉、鉄剣、鉄鏃、鉄刀子	丘陵北西側下流に広がる推定白水荘故地の中白水遺跡の発掘調査成果で確認された中核的な中世集落の奥津城として、まとまった数の墓地が確認された。
		中世	土壙墓　１基 火葬墓	板碑、青磁椀、土師器埋納器	

ウトグチＣ遺跡

春日市文化財調査報告書
第54集

平成20年３月31日

発　　行　　春日市教育委員会
福岡県春日市原町３丁目１番地５

印　　刷　　山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5